

てんとうむし



第 11 号

姫路昆虫同好会

姫路昆虫同好会会則

1. この会は、姫路昆虫同好会と称する。
2. この会は、播磨地方の昆虫研究と播磨在住の者および県内外の会員が幅広く昆虫研究を行った成果を発表し、会員相互の親睦をはかることを目的とする。
3. この会は、その目的を果たすため次のことをする。
 - (1) 会誌(年1会の発行)
 - (2) 連絡誌の発行
 - (3) 姫昆サロンの催し
 - (4) 合同観察会などの催し
4. この会は、昆虫に興味をもち、会の目的に賛同する人は誰でも入会できる。
5. 会員は、会を維持するため、年会費を負担しなければならない。
6. 会員は、会誌などの配布を受け、またこれに投稿できる。
7. 会員は、観察会などの催し、またサロン会などに参加できる。
8. この会を運営するため、顧問、会長および世話人若干名と事務局をおく。さらに世話人中より代表世話人1名を選出する。これらの役員は総会で選出し、その任期は1年とする。ただし、再選は妨げない。
9. 総会は年1回とし、役員改選、会則の改正など会の運営上の重要事項を審議する。議決は出席者の過半数の賛成を必要とする。
10. この会の会計年度は、暦年とする。

[平成8年度顧問] 奥谷禎一

[平成8年度会長] 三木順一

[平成8年度世話人] 稲田和久 木村三郎 広畑政巳 相馬明直 高島 昭
相坂耕作(代表)

表紙剪画解説

剪画作者 萬 洪成氏は上海在住で、1934年生まれ。
中国工芸美術会会員。上海剪紙学会理事などを歴任し、
剪紙歴40年余となる。その作品は花・鳥・虫・魚・動物・人物・風景など数多い。
国内外で有名でテレビ、新聞等でその活躍が紹介されている。

“てんとうむし”の復刊を祝う

奥谷 禎一

機関誌“てんとうむし”復刊心からお祝い申し上げます。姫路昆虫同好会とのお付き合いもとうとう20年を越えたかと思うと感慨無量であると共に長生きはしたいものと思っているが、老化はふせぐ手立てはなく年々衰えを感じる年頃になってしまった。以下に姫昆の思い出などを述べてお祝いの言葉としたい。

姫路を中心として播磨の昆虫類を目標とする同好会が、木村三郎・相坂耕作の両氏によって結成され、小野市在住の蝶屋山本広一氏と神戸大学にいた筆者が顧問として迎えられて何時の間にか20年が過ぎてしまった。この間には、木村氏には昭和51(1976)年から52年にわたる、大河内町の揚水発電所にかかわる自然環境事前調査にご協力頂いたことも大きな思い出である。神戸大学を定年退職後、家庭の事情で川越に転居したが、数人の方から何度か論文のご相談や筆者のもつ情報などお問い合わせもいただき、特に相坂氏には著書“播磨の昆虫”の序文をご依頼されたりして多くの方と交流できたことは感謝にたえない。先年“遊虫千年”という小冊子が送られてきて、同好会ができて20年経ったことを知った次第で、もうすこしお役に立てればとつくづく思った次第である。

筆者が調査に関わって歩いたところは、前述の大河内町以外に、地名を忘れた所もあるが、姫路市では増位山・広峰山付近と自然観察の森、赤穂市周辺、三日月町南端部などで、それぞれ忘れられない思い出はある。その他仁豊野のキマダラル

リツバメ探しや加西市のヒメハルゼミなど多くの虫と共にその自然環境が気になる所である。平成5(1993)年5月に“生物の多様性に関する条約”を締結しておきながら、日本の政治は条約に逆行するようなことがまかり通っているように思える。我々虫屋は昆虫を通して自然環境の保全と生物の多様性の温存を計りたいものである。

筆者が若い頃も同好会誌は盛んで、色々なものがあつたが、いわゆる3号誌が多くひどい場合は1号で終わってしまうものさえあり、割り切れない思いをさせられたものである。この時代は何といつても印刷費が高かつき、経済的な問題もあつたには違いない。今日ではコンピューターが扱えれば、素人でも安価に印刷ができるようになり先年は同好会誌にカラー印刷さえ現れ驚いた次第である。しかし、原稿を集めたり順序を考えたりは機械ではできないことで、編集者世話人の努力なしには会誌はできない。ガリ版紙姫昆サロンでつないで遂に“てんとうむし”の復刊にこぎつけたご努力に敬意を表する。

さらに播州は松村松年(1872~1960)・森 為三(1884~1962)などの昆虫学者や駒井 卓(1886~1972)・岡田 要(1891~1973)などの動物学者の育ったところであることを考えると、若い会員の中からこれらの諸先輩に勝るとも負けぬ大学者が生まれることを夢見ながら一言お祝い申し上げます。

(顧問 神戸大学名誉教授)

明治以前 日本で記録されたコガネムシ

高橋 寿郎

はじめに

江戸末期に洋学の知識が入ってくるとともに日本を訪れる欧米人も多くなり、各種の学問がこれら欧米人によって発展を始めた。

甲虫の分類研究も、まず日本にどのようなコガネムシがいるのかを調べることから始まり、明治までヨーロッパ人による日本のコガネムシの研究がおこなわれた。そこで、明治に至る迄のヨーロッパ人の日本のコガネムシの研究の経緯を所有文献によって眺めて見て、明治迄に日本のコガネムシで学名を与えられ記載されたものをまとめて見た。本文は貧弱な筆者の所有文献による報告であるから、重要な文献の脱落、浅学未熟故の大きな誤りがあるかも知れない。それらについて御叱正、御教示頂くことが出来れば幸いである。

また、日頃何かと御指導、御世話になっている次の諸氏に厚く御礼申しあげさせて頂く(敬称略, ABC順)。

石田正明, 三宅義一, 中根猛彦, 中村慎吾,
故野村 鎮, 大野正男, 淀江賢一郎。

尚、本文発表の機会を与えて下さった相坂耕作氏にも厚く御礼申しあげる。

概 説

日本産の昆虫に始めて学名を与えられたのは、江崎博士によると1775年(安永4年)から1776年(安永5年)まで、長崎へ来て江戸まで旅行した Carl Peter THUNBERG (1743~1828) が採集して持ち帰った昆虫を彼自身が発表したものであって、その最も古いものは *Dissertatis Entomologica-novas insectorum species 1781~1791* の中にあると、しかし残念ながらそれにはコガネムシは1種もない。

日本のコガネムシの研究は、MOTSCHULSKY により始めてまとまったものが発表されたと云ってよいのであるが、それ以前にも若干の報文発表がある。

日本のコガネムシで初めて学名の与えられたものはどの種であろうか。文献類で逆に探して見ると、1771年の LINNE' が記載した (*Mant. Plant. VI, p. 525*) ものとして、*Allomyrina dichotomus* LINNE' が Japan から記録されていることになる (W. JUNK, *Coleop. Cat. Pars. 156, p. 95, 1937*)。

そうすると、この種が一番古いことになる。ところで、江崎博士は"1775年 LINNE' によって命名された昆虫で日本に産するものは多数あるが、これは欧州或いはインド等と共通の種類であって、日本産の標本に基づいて名付けられた種は一つもない。また、その後彼の命名したものの中に日本産のものを見出すことは出来ない"(1952)として、初めに記したごとく THUNBERG の命名を一番古いとされた。もしこの LINNE' の記載が日本産であれば THUNBERG の記載より古いことになる。

もっとも、本種は朝鮮半島、中国、インドシナ半島に分布しているから、その辺の産地のもので記載されているのかも知れない。

しかしながら、反面カブトムシそのものは日本では普通にいる種だし、大きさも大きく日本人が古くから記述(日本産コガネムシに関する文献、明治以前。比婆科学 No. 165:35-46, 1995)し、ポピュラーなものであるから、当時渡来したヨーロッパ人が持ち帰り、何らかの経路で LINNE' が記載に使用したとしても別に不思議はない。中根博士も"日本を訪れた外国人によって欧州に持ち帰られた甲虫が専門家の手によって発表されだしたのは、1830年代に入ってからのもので——"と記しておられるので(1966)、やはりカブトムシの命名は日本産ではないように思われる。

LINNE の原記載にはタイプ標本の指定が無く、何処産のもので命名されたものかはわからない(石田正明, 1987)。石田によれば記載に用いた個体は中国南部産のものではないかとのことである。日本からカブトムシが記録されたのは、1866年の MOTSCHULSKY の「日本の甲虫目録」に出てくる *Xylotrupes dichotomus* FABRICIUS であると考えられる。次に W. JUNK の Coleopt. Cat. によると、1835年 FALDERMANN が *Eopileuruc chinensis* を日本から新種として記載しているよう取り扱っているが、原論文 (Coleopterorum ab. Illustrissimo bungio in China Borealis, Monoglia, et Monibus Altacis, Me'm. Acad. Petr. II, p. 370, t. 4, f. 2) によると、学名のごとく中国からの記載で日本からのものではない。もっとも本種は日本にも産する。

1835年に HOPE は Monograph on *Mimela*, a Genus of Coleopterous Insects なる論文を発表 (Trans. ent. Soc. London, I, pp. 108~117), その中で *Mimela lucidula* なる新種を日本から記載した(この種は De HAAN 教授が *lucidula* と名付けてくれた標本に基づいたものである)。この種は残念ながら中国原産の *Mimela splendens* GYL. (*Melolontha*) (in Schönh Syn. Ins. I, 3, p. 110, 1817) のシノニムで消える。この種の方が前に発表されていて HOPE は知らずに記載したのだと思う。但し、このコガネムシが日本産として始めて学名を与えられた種ということになる。

MOTSCHULSKY の研究の現れる迄の日本のコガネムシの研究は、僅かに HOPE (1839, 1941), NEWMANN (1841), BURMEISTER (1842, 1844, 1845) のものがある位である。

研究史

1835. F. W. HOPE. Monograph on *Mimela*, a Genus of Coleopterous Insects.

Trans. ent. Soc. London I, part. II: 108-117.

本論文は中国、日本、ネパール、東インド、ジャワ各地産の *Mimela* 属 3 既知種 10 新種の記載を発表されたものである。

p. 113-114 に *Mimela lucidula* HOPE なる新種を日本から記載されている (This beautiful insect received from De HAAN* under the name of *lucidula* とある)。この種が日本産コガネムシで始めて命名された種であるが、残念ながら中国原産の *Mimela splendens* GYLLENHAL, 1817 (*Melolontha* 属で記載) (in Schönh Syn. Ins. I, 3, p. 110, 1817) のシノニムである。尚、本論文に (p. 114) *Mimela splendens* なる新種が Nepal から記載されているが、この方は現在 *Mimela heterochropus* BLANCH. (Cat. Coll. Ent. Col. 1850, p. 196) のシノニムとされている。

* (Willem de HAAN 1805-1855 は Leyden 生まれの昆虫学者で、同地博物館で無脊椎動物を担当し、また Fauna Japonica の中の甲殻類を執筆した人である — 江崎, 1952)

1839. F. W. HOPE. A Monograph on Mr. William SHARP Mac Leay's Coleopterous Genus *Euchlora*

Proc. Zool. Soc. London, VII, pp. 65-75.

Euchlora 属 26 種 (*Euchlora* 属は現在 *Anomala* 属) の記載であり、うち 3 種が日本産である。

P. 70. *Euchlora albopilosa* HOPE = *Anomala* の日本からの記載。Leyden の友 De HAAN より送られた標本、産地は日本とのみ。

P. 72. *Ecchlora cuprea* HOPE = *Anomala* の日本からの記載がある。産地の記録はないが、Leyden の De HAAN 教授から受け取ったもので、SIEBOLD が *Cuprea* (銅色) と添付していたのでこの名をつけたと記している。

P. 73. 従来、中国原産として取り扱ってこられた (日本産としての記録は WATERHOUSE, 1975), *Euchlora costata* HOPE = *Anomala* が日本からの記載であることがわかった。本種も De HAAN 教授から送られたのものであると。"前胸

背の側縁黄色で上翅黄褐色，体下も同様，脚は黄色”で，多分これは未熟の標本であろうとしているが，この種は色彩変化多く，このような個体も採集出来る。未熟なるが故ではない。共に現在でも普通に得られる種である。

p. 75. *Mimela splendens* を日本から記録しているように，W. JUNK の Coleop. Cat. にはあるが，本論文を見ると中国からの記録である。(本論文では勿論，*Euchlora* 属となっているが，*Mimela* 属であろうと記している。1835年に自身が *splendens* と発表した種との関連については記していない)。

1841. F. W. HOPE. Description of some new Lamellicorn Coleoptera from Northern India. Trans. ent. Soc. London II:62-67.

表題のごとき論文であるが，p. 64に *Rhomborrhina japonica* HOPE なる新種が日本産で記載されている。産地は書いていないが，シーボルトが日本で得た標本で，Leyden の De HAAN 教授から送られたとある。現在，*Pseudotorynorrhina* 属に扱われている。

1841. NEWMANN. A descriptiv list of the Species of Popillia, in Cabinet of the Rey. F. W. HOPE.

Trans. ent. Soc. London, III:32-50.

W. JUNK の Coleopt. Cat. (Pars. 66, p. 134, 1916) によると，*Popilia japonica* の原記載は Ann. Mag. Nat. Hist. 2, II, p. 337, 1838 で，学名のごとく日本産での記載とある(中根博士もそのように記しておられる，1966)。岡山大学附属図書館農業生物研究所に上記原記載の Copy をお願いしたところ，その文献の該当頁にマメコガネの記載は無いむね返事があつた。後に C. O. WATERHOUSE の "On the Lamellicorn Coleoptera of Japan (Trans. ent. Soc. Part. I, pp. 71~116, pl. III, ref. p. 112, 1875)" の中でも G. KRAATZ の *Popillia* 属の総説 "Monographische Pevision der Ruteliden-Gattung Popillia Serville

(Deut. Ent. Zeit. Heft. II, p. 257, 1892)" でも本種の原記載はこの表記論文になっている。多くの *Popilia* 属の新種記載があるが，p. 43に *Popilia japonica*, Japonia (Nippon, Jesso, Nagasaki)が記載されている。さらに，GEMMINGER et HAROLD の Catalogus Coleopterorum Tome IV (p. 1211, 1869) でも上記論文になっている。

1842. BURMEISTER, H. Sechste Ordnung Coleoptera Zunft. Lamellicornia, Erste Familia Melitophila Gatt. Rhomborrhina, Gatt. Anthracophora.

Handbuch der Entomologie, Band. III, Berlin.

本書は BURMEISTER, H., 1842-1855: Handbuch der Entomologie, Band III-V, Berlin の中の3冊にわたって甲虫類の解説をされているものであり，個々の論文でなく単行本の中で鯉角類を属単位で説明してある。その中には新種の記載も含まれている。

本書では次の日本産新種の記載である。

p. 194. 4. *Phomborrhina opalina* 5. *Rhomborrhina clypeata* DUP. 共に Japan から記載されているが，現在の知見では *Pseudotorynorrhina japonica* (HOPE) カナブンのことである。

p. 624. *Anthracophora rusticola* BURMEISTER, Japan から新種記載。現在でも有効(アカマダラハナムグリ)。

1844. BURMEISTER, H. Sechste Ordnung Coleoptera

1. Zunft Lamellicornia, Dritte Familie Phyllopertha Gattung Anomala (Phyllopertha) Handbuch der Entomologie, Band. IV; Berlin.

p. 243. 15. *Phyllopertha 8-costata* BURMEISTER, Japan より新種として記載されている。現在は，*Anomala octiescostata* (BURMEISTER, 1844) ヒラタアオコガネになる。

1855. BURMEISTER, H. Sechste Ordnung Coleoptera

1. Zunft Lamellicornia, Dritte Familie Phyllophaga

Handbuch der Entomologie, Band. V, Berlin.

p. 420. *Melolontha japonica* BURMEISTER, ♂, Japan (コフキコガネ)新種記載である。

1857. V. I. MOTSCHULSKY. Insectes du Japon

Etud. Ent. tome 6, pp. 25-41.

MOTSCHULSKY は「日本の昆虫」と題して3篇の論文, 1篇の「日本産昆虫目録」を発表, 多くの新種の記載をされた。本篇はその一番始めの論文で鞘翅目24種の記載の他に, RADASCKOVSKI の *Vespa* 1種の記載を含み, 別に蝶蛾類数十種の目録である。この論文の材料は, 1854-1855年に下田へ来たPUTIATIN 提督と共に同地に滞留した GOSCHKEVITSCH の採集品であるとのこと(江崎, 1952)。

コガネムシは9種を新種として記載された。そのうち, 属名の変わるものはあるとしても1種がシノニムとされ, 1種が他種の form とされた。それ以外, 7種が現在でも有効である。

記録されているコガネムシを記しておく(和名も全種につけた)。

p. 29, 5. *Lucanus inclinatus* MOTSCHULSKY = *Prosopocoilus* ノコギリクワガタ

p. 29-30, 6. *Psalidostomus* (?) *rectus* MOTSCHULSKY = *Dorcus* コクワガタ

p. 31, 7. *Geotrupes auratus* MOTSCHULSKY = *Geotrupes* (*Chromogeotrupes*) オオセンチコガネ

p. 32, 8. *Geotrupes laevistriatus* MOTSCHULSKY = *Geotrupes* (*Eogeotrupes*) センチコガネ

9. *Mimela Gaschkevitchii* MOTSCHULSKY 本種は1871年 GYLLENHAL が中国から命名した (in Schönh. Syn. Ins. I, 3, append. p. 110) *Mimela splendens* GYLLENHAL (コガネムシ) のシノニムとされている。

P. 33, 10. *Heptophylla picea* MOTSCHULSKY ナガチャコガネ

11. *Serica orientalis* MOTSCHULSKY = *Malader* (s. str.) ヒメビロウドコガネ

12. *Hoplia obducta* MOTSCHULSKY = *Ectinhoplia* ヒメアシナガコガネ

p. 34, 13. *Hoplia subulicola* MOTSCHULSKY = *Hoplia obducta* MOTSCHULSKY (ヒメアシナガコガネ)

1860. V. I. MOTSCHULSKY. Insectes du Japon Etud. Ent. tome 9, pp. 4-39.

函館駐在のロシア領事 GOSCHKEVITSCH の夫人の採集品の目録で, 鞘翅目及び鱗翅目の多数が記録されている。主として, 函館産のもののようなのであるが, 一部下田又は江戸で採集されたと思われるものも含まれている。

コガネムシ類の記載されたのは新種9種で, これらも含め前回の新種も勿論含まれて, 25種が記録されている。

新種記載のうち, 3種はシノニムとして消える。他は属名の変わるものは多いが有効である。記録された種のうち, 日本に産しない種が3種含まれていて, どれも同定の誤りかとも思うし, 大体どの種か見当がつく。次に記録されているコガネムシ類をまとめてみる。

P. 13. *Phanaeus minutus* MOTSCHULSKY = *Liatongus phanaeoides* (WESTWOOD, 1844) ツノコガネ

本種はインド原産の *Onthophagus phanaeoides* WESTWOOD (Royle's Himalay, Ent. p. 55, pl. 9, f. 3, 1840) のシノニムと WATERHOUSE はした(1875, 後掲, なお属名は *Oniticellus* となっている)。後に ARROW は (Fauna British India, Col. Lam. III, p. 364, 1931) 属名を *Liatongus* とされた。

Copris acutidens MOTSCHULSKY = *Copris* (s. str.) ゴホンダイコクコガネ

Cantharsius ochus MOTSCHULSKY = *Copris* (s. str.) ダイコクコガネ

p. 14. *Geotrupes auratus* MOTSCHULSKY = *Geotrupes* (*Chromogeotrupes*) *auratus* MOTSCHULSKY, 1857 オオセンチコガネ

- Geotrupes splendidus* F. ヨーロッパに分布している種で日本産ではない。
- Geotrupes laevistriatus* Mus. St. P. = *Geotrupes* (*Eogeotrupes*) センチコガネ
- Trox opacotuberculatus* MOTSCHULSKY ヒメコブスジコガネ
- Popilia japonica* HOPE = *Popillia japonica* New-MANN, 1844 マメコガネ
- Phyllopertha horticola* L. というのが記録されているが、この種はヨーロッパ、コーカサス、シベリヤ、蒙古に分布する種で日本に産せず。*P. intermixta* のことをあやまって同定したようである。
- Phyllopertha octerestata* BURM. = *Anomala octiescostata* (BURMEISTER, 1844) ヒラタアオコガネ
- Anomala oblonga* F. というのもどうも同定の誤りで本種はヨーロッパ、コーカサス等に分布している。*A. dubia* Scop. の var. のことで、日本に産しない。次の種と同一種ではないだろうか。
- Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY ヒメコガネ
- Rhombonyx testaceipes* MOTSCHULSKY = *Anomala* スジコガネ
- D. 15. *Euchlora cuprea* HOPE = *Anomala* ドウガネ ブイブイ
- Mimela Gaschkevitchii* MOTSCHULSKY = *Mimela splendens* (GYLLENHAL, 1817) コガネムシ
- Serica japonica* MOTSCHULSKY = *Maladera* (S. St. P.) ピロウドコガネ
- Holotrichia transversa* MOTSCHULSKY = *Heptophylla picea* MOTSCHULSKY, 1857 ナガチャコガネ
- Hoplia obducta* MOTSCH. = *Ectinohoplia obducta* (MOTSCHULSKY, 1857) ヒメアシナガコガネ
- Hoplia subulicola* MOTSCH. = *Ectinohoplia obducta* (MOTSCHULSKY, 1857) 上記種と同じヒメアシナガコガネ
- Glycyphana pilifera* MOTSCHULSKY = *Eucetonia* ハナムグリ
- D. 16. *Rhomborhina clypeata* BURMEISTER = *Pseudotorynarrhina japonica* (HOPE, 1841)
- Rhomborhina clypeata* BURM. = *Pseudotorynarrhina japonica* (HOPE, 1841) カナブン
- Lucanus Cantori* HOPE はアッサム産で日本には産しない。MOTSCHULSKY の記載したのは、ミヤマクワガタの小型の♂ (*Lucanus macuifemoratus*) のことである(1971年, 中根博士はMOTSCHULSKY の collection を調べられた。1972, 1976)。
- Psalidostemus rectus* M. St. P. = *Dorcus rectus* (MOTSCHULSKY, 1857) コクワガタ
- Dorcus binervis* MOTSCHULSKY = *Dorcus rectus* (MOTSCHULSKY, 1857) コクワガタ
1861. V. I. MOTSCHULSKY. *Insects du Japan* Etud. Ent. tome 10 : 3-24.
- 日本の昆虫と題する論文の第3報となる。甲虫以外に半翅目の新種記載も含まれている。コガネムシ、クワガタムシについて次のような新属新種記載がある。
- D. 7. *Heteroplia multistriata* MOTSCH. = *Anomala* ハンノヒメコガネ
- D. 8 *Granida alboineata* MOTSCH. と新種記載種をタイプに *Granida* 新属も設けている。現在は *Polyphylla* (*Granida*) に扱う。シロスジコガネ
- Rhomborhina unicolor* MOTSCH. 新種記載。アオカナブン
- D. 9-10. *Lucanus macurifemoratus* MOTSCHULSKY, ♂♀ ミヤマクワガタ
- D. 11-12. *Serrogathus* 属を創設。タイプは次の *S. castanicolor*
- D. 12-13. *Serrogathus castanicolor* MOTSCHULSKY, ♂ ツシマヒラタクワガタ
- 現在では *Dorcus titanus castanicolor* MOTSCHULSKY ヒラタクワガタの亜種に扱われている。

- p. 13-14. *Psalidognathus inclinatus* MOTSCHULSKY,
♂ ノコギリクワガタ = *Prosopocoilus*
- p. 16. *Macrodorcus rectus*, 新種の記載でなく,
1857年に発表した時は♂の標本であったが,
ここに♀の記載をされた(尤も前回は属名を
Psalidostomus ? としていた). 標本はアカア
シクワガタ (*Dorcus rubrofemoratus*) の♀で
あると(中根, 1972, 1976)
- p. 16-17. *Macrodorcus rugipennis* MOTSCHULSKY,
♂ 新種の記載であるが, やや小型のコクワ
ガタ *Dorcus rectus* であるとのこと.
- p. 17. *Macrodorcus striati* MOTSCHULSKY, ♂♀ ス
ジクワガタ = *Dorcus*
- p. 17-18. *Macrodorcus cribellatus* MOTSCHULSKY,
♂ 小型のスジクワガタ *Dorcus striatipennis*
であると.
- p. 18-19. *Dorcus binervis* MOTSCHULSKY, ♀ コク
ワガタ *Dorcus rectus* であるとのこと(中根,
1972, 1976).

1861. SNELLEN VAN VOLLENHOVEN: Beschrijving
var eenige nieuwe soorten van Lucanidae.
Tijdschr. v. Entom. IV : 101-115.

次のように日本産クワガタムシの新種記載がある。

- p. 103. *Lucanus sericanus* SNELLEN VAN VOLLENHO-
VEN
現在 *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY
ミヤマクワガタのシノニムとされている。実
際にタイプ標本はミヤマクワガタの小型の♂
であると(中根, 1979)
- p. 112, pl. 6, fig. 4. *Dorcus pilifer* SNELLEN VAN
VOLLENHOVEN 現在はヒラタクワガタ *Dorcus*
titanus (BOISDUVAL) の日本亜種とされている。
タイプは2♂(中根, 1979).
- p. 113, t. 7, f. 2. *Dorcus niponensis* SNELLEN VAN
VOLLENHOVEN 産地は Japan とのみあるとの
こと。この記載と図はコクワガタ *Dorcus re-*
ctus MOTSCHULSKY の小型の♂である(中根,

1976, 1979)。

1861. HAROLD, E. V. Beitrag zur Kenntnis ei-
niger coprophagen Lamellicorninen, II.
Stück

Berl. Ent. Zeitschr. V : 92-115.

本報文は一連の上記表題による食糞類の研究論
文で(主として *Aphodius* が多い), 世界各地から
の糞虫類に就いての記載があり, 多くの新種記載
が出ているが, 日本産は全体を通じて3種しか記
載されていない。

本論文はその第二篇に当たる。13種の *Aphodi-*
us の解説であるが, この中にpp. 96-97に日本か
らの新種 *Aphodius apicalis* HAROLD の記載がある。

本種は現在, *Aphodius (Colobopterus) haroldia-*
us BALTHASAR として取扱われている(オオマグソ
コガネ)。

フォーチュン (ROBERT FORTUNE 1813-1880)

フォーチュンが日本に来た時(万延元年, 1860)
の見聞を記した "Yedo and Peking, 1863" (Yedo
and Peking. A Narrative of a Journey to the
Capitalis of Japan and China. With Notices of
the Natural Productions, Agriculture, Horti-
culture and the Trade of Those Countries,
and Other Things Met with by the way, London,
1863, 江崎, 新昆虫, 1952, 江戸と北京, 三宅訳,
広川書店版, 1969)を見ると, 1861年(文久元年)
一度日本から中国に行き, 再び帰ってきた時の昆
虫採集の記事に(場所は神奈川, 横浜附近と考え
られる), "在来種のカブトムシは何千というくら
い木の葉や花から振って落とされる。ロンドン
(Bloomsbung street) のスチーブンス氏 (STE-
VENS) の手紙といて二種類のクワガタ (*Lucani*)
とオジカカブトムシ, カブトムシ (*Dynastes di-*
chotoma = *Allomyrina dictotoma*) (中国産のもの
と同一と注釈されている)等々が採集されている"
ことが紹介されている。

1862. THOMSON, T. Catalogue des Lucanides de la collection de M. JAMES THOMSON, suivi d'un appendix renfermant la description des coapes génériques et spécifiques nouvelles.

Ann. Soc. Ent. France (4) II : 389-436.

p. 417. *Cladognathus mandibularis* THOMSON なる新種記載が Japan よりされているが、後に PARRY (1864) が訂正したように現在では *Prosopocoilus indinatus* (MOTSCHULSKY) とすべき種である(ノコギリクワガタ)。

1862. HAROLD, E. V. Beitrag zur Kenntnis einiger coprophagen Lamellicornien V. Stück Berl. Ent. Zeitschr. VII : 327-329.

本報文では, *Aphodius* 35種(番号51~85)についての記載で9新種, 26既知種の記載である。

p. 344~345に *Aphodius elegans* ALLIBERT が日本より記録されている(Japan und das nördliche China). オオフタホシマグソコガネ

1864. SNELLEN VAN VOLLENHOVEN. Tijdsch. Ent. Nederl. XVII.

本論文所有していないので詳しい内容不明。次の種の記載がある。

p. 158. *Euryomia sieboldi* SNELLEN VAN VOLLENHOVEN の記載。現在の知見では *Glycyphana fulvistema* MOTSCHULSKY, 1860 のシノニム(クコハナムグリ)。

p. 159. *Trichius septemdecimguttatus* SNELLEN VAN VOLLENHOVEN, Japan の記載。現在 *Paratrichius* 属 ジュウシチホシハナムグリ

1864. PARRY, F. A Catalogue of Lucanid Coleoptera; with illustrations and descriptions of various new and interesting species.

Trans. Ent. Soc. London, ser. 3, 2(1) : 1-113, 12pls.

99種に及ぶ新種(45新種, 1新属)並びに稀種の

記載であり(学名変更もあり), 図版も12pls. についており, その当時での世界のクワガタムシ科の目録も発表されており, なかなかの大著である。

日本産については, 次の2種について解説がされている(日本産新種記載なし)。

p. 9. *Lucanus HOPEI* ♂, PARRY (♀ ignota) (pl. VI, fig 2) として Ind. Or., and Archipel Malay を分布として解説されている。

その図は明らかに *L. maculifemoratus* にて現在 *f. hopei* として取扱われる。 *L. Hopei* の原記載は PARRY(1862) である(Proc. Ent. Soc. London, ♂. 産地は東印度)。

p. 10. *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY

L. sericanus (De HAAN, M. S.) VOLL. と同種であるとされ(?を付してある), MISEECH と PARRY のコレクションとしてライデン博物館に♂♀の日本産があると。 S. VAN VOLLENHOVEN によりジャワから *L. sericanus* と書かれたのは(1861)誤りで, 多分 *L. maculifemoratus* の小形変種であろうとされており, さらにジャワ産 *L. hircus* の比較については何等報告できるものはないとされている(*L. sericanus* のタイプ標本を検された中根博士が *L. maculifemoratus* の小形の♂であると確認しておられる, 1979)。

1864. PARRY, F. A few Remarks upon Mr. James THOMSON'S Catalogue of Lucanidae, published in the "Annales de la Société Entomologique de France, 1862"

Trans. ent. Soc. London, III (1) : 442-452.

表題のごとく THOMSON の1862年に発表されたクワガタムシ科のカタログの中に含まれている35種について, 著者の所見をのべたものである。

その中で, P. 447に THOMSON が *Cladognathus mandibularis* (p. 417) として日本から新種発表している種は, *L. inclinatus* MOTSCHULSKY であろうと記されている。そして最近, フォーチュンの日本からの採集品の何頭かが S. STEVENS の所に送

られてきていると。

この種は現在では *Prosopocoilus inclinatus* (Mots.)
として取扱われている。

1865. SNELLEN VAN VOLLENHOVEN. Sur Quelques
Lucanides du Muséum Royal d'Historie Natu-
relle a Leide.

Tijdschr. V. Ent., Nederl. VIII : 137-156.

p. 152. t. 2, f. 1, 2 に日本より *Eurytrachelus
rubrofemoratus* SNELLEN VAN VOLLENHOVEN の新種
記載あり。現在 *Dorcus* 属 (このタイプ標本は
Leyden の自然史博物館にあり, これを検された
中根猛彦博士は間違いなくアカアシクワガタのみ
であったと。中根, 1979)。

1866. V. I. MOTSCHULSKY. Catalogue de Insects
reçus du Japan.

Bull. Soc. Imp. Nat. Moscou 39(1) : 163-
200.

日本産の昆虫目録で一番古いものの一つである
と考えられる。著者 MOTSCHULSKY 自身は日本に
来たことは無く, 日本の昆虫に関して4つの論文
は, いずれも下田へ来た PUTIATIN 提督と共に同
地に滞留した GOSCHKEVITSCH の採集品と, 後に
函館のロシア領事になった GOSCHKEVITSCH 夫人
の採集品からなっている。この論文は表題のごと
く日本産昆虫(鞘翅目, 直翅目, 膜翅目, 双翅目,
同翅目, 半翅目, 鱗翅目)の目録であり, 多くの
新種の記載を含んでいる。コガネムシは7新種を
含み46種が記録されている。新種以外はこれまで
の MOTSCHULSKY が発表した論文に出ている種で
ある。新種として記載された種の学名の属名は,
現在の知見では全部変わる。他種のシノニムの種
もある。とにかく, 日本のコガネムシの目録が世
に示された初めてのものであることは間違い無い
と思われる。大変粗雑なものであるが, 当時の知
見からして止むを得なかったと考えられる。記録
されている種を一応全部示す。

P. 7. *Phanaeus minutus* MOTSCH. = *Liatongus pha-
naeoides* (WESTWOOD, 1840) ツノコガネ

Copris acutidens MOTSCH. = *Copris* (s. str.)

ゴホンダイコクコガネ

Cantharsius Ochus MOTSCH. = *Copris* (s. str.)

ochus (MOTSCHULSKY, 1860) ダイコクコガ
ネ

Geotrupes auratus MOTSCH. = *Geotrupes* (*Chro-
mogeotrupes*) *auratus* MOTSCHULSKY, 1857 オ
オセンチコガネ

Geotrupes splendidus F. よくわからない種。多
分上記オオセンチコガネと同一種と考える。

Geotrupes laevistriatus MOTSCH. = *Geotrupes* (*Eo-
geotrupes*) *laevistriatus* MOTSCHULSKY, 1857
センチコガネ

Calamosternus rectus MOTSCHULSKY = *Aphodius*
(*Phaeophodius*) マグソコガネ

P. 8. *Calamosternus brevisculus* MOTSCHULSKY =
Aphodius (*Agrilinus*) スバタママグソコガネ

Chilothorax vitta MOTSCHULSKY = *Aphodius* (*Phae-
ophodius*) *rectus* MOTSCHULSKY マグソコガネ

Melinopterus nigrotessellatus MOTSCHULSKY = *A-
phodius* (*Chilothorax*) セマダラマグソコガネ

Trox opacotuberculatus MOTSCH. ヒメコブスジ
コガネ

Xylotrupes dichotomus F. = *Allomyrina dichoto-
mus septentrionalis* (KONO, 1931) カブトム
シ

Popilia japonica HOPE = *Popillia japonica* NEW-
MANN, 1844 マメコガネ

Phyllopertha horticola L. = *Phyllopertha intermix-
ta* (ARROW, 1913) アオウスチャコガネ

Phyllopertha octocostata BURM. = *Anomala octies-
costata* (BURMEISTER, 1844) ヒラタアオコ
ガネ

P. 9. *Rhombonyx lucidulus* MOTSCHULSKY = *Anomala*
lucens BALLION, 1871 ツヤコガネ

Rhombonyx testaceipes MOTSCHULSKY = *Anomala*
スジコガネ

Rhinoplia geniculata MOTSCH. = *Anomala* ヒメ
サクラコガネ

- Anomala oblonga* F. = W. JUNK の Col. Cat. を見ると (pars. 66, p. 71), ヨーロッパに広く分布している *Anomala dubia* SCOPE の var. のようで, イタリアあたりに分布している種のように日本産ではない.
- Anomala rufocuprea* MOTSCH. ヒメコガネ
- Euchlora cuprea* HOPE = *Anomala* ドウガネブイブイ
- Heteroplia multistriatus* MOTSCH. = *Anomala albopilosa* (HOPE, 1939) アオドウガネ
- Mimela Gaschkewitchii* MENERTR. = *Mimela splendens* (GYLLENHAL, 1817) コガネムシ
- Serica japonica* MOTSCH. = *Maladera* (s. str.) ビロウドコガネ
- Serica orientalis* MOTSCH. = *Maladera* (s. str.) ヒメビロウドコガネ
- Serica? gricea* MOTSCHULSKY = *Paraseria* ハイイロビロウドコガネ
- p. 10. *Holotrichia transversa* MOTSCH. = *Heptophylla picea* MOTSCHULSKY, 1857 ナガチャコガネ
- Heptophylla picea* MOTSCH. ナガチャコガネ
- Granida albolineata* MOTSCH. = *Polyphylla (Granida) albolineata* (MOTSCHULSKY, 1861) シロスジコガネ
- Hoplia obducta* MOTSCH. = *Ectinohoplia* ヒメアシナガコガネ
- Hoplia sublicola* MOTSCH. = *Ectinohoplia obducta* (MOTSCHULSKY, 1857) ヒメアシナガコガネ
- Rhomborrhina unicolor* MOTSCH. アオカナブン
- Rhomborrhina japonica* HOPE = *Pseudotorynorrhina japonica* HOPE, 1841 カナブン
- Rhomborrhina clypeata* BURM. 前種と同じ. カナブンのこと
- Glycyphana pilifera* MOTSCH. = *Eucetonia pilifer* (MOTSCHULSKY, 1860) ハナムグリ
- Glycyphana albosetosa* MOTSCH. = *Gametis jucunda* (FALDERMANN, 1835) コアオハナムグリ
- Cetonia speculifera* SCHWABE = *Protaetia orientalis submarmorea* (BURMEISTER, 1842) シロテンハナムグリ
- Lucanus maculifemoratus* MOTSCH. ミヤマクワガタ
- Lucanus Cantori* HOPE = *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY, 1861 ミヤマクワガタ
- Prismognathus dauricus* MOTSCH. キンオニクワガタ. 日本では対馬に記録がある種で, 恐らく *Prismognathus angularis* WATERHOUSE, 1874 オニクワガタのことであろう.
- Serrognaethus castanicolor* MOTSCH. = *Serrognaethus titanus castanicolor* MOTSCHULSKY, 1861 ツシマヒラタクワガタ
- Psalidoremus inclinatus* MOTSCH. = *Prosopocoilus* ノコギリクワガタ
- Macrodorcas rectus* MOTSCH. = *Dorcus* コクワガタ
- Macrodorcas rugipennis* MOTSCH. = *Dorcus rectus* (MOTSCHULSKY, 1857) コクワガタ
- Macrodorcas striatipennis* MOTSCH. = *Dorcus* スジクワガタ
- Macrodorcas cribellatus* MOTSCH. = *Dorcus striatipennis* MOTSCHULSKY, 1861 スジクワガタ
- Macrodorcas binervis* MOTSCH. = *Dorcus rectus* (MOTSCHULSKY, 1857) コクワガタ
1867. HAROLD, E. V. Die Arten der Gattung *Caccobius*.
Coleopterolog Heft. II : 1-16.
- p. 10. に *Caccobius jessoensis* HAROLD (Japan) マエカドコエンマコガネの新種記載あり.
1868. GEMMINGER et B. de HAROLD. Catalogus Coleopterorum Tom III (London)
当時の世界産甲虫目録で, この目録は1868~1876年の間に Vol. 1~12, XXVI, 3822pp. が出版されている. この第3巻にはクワガタムシ科が含まれている (p. 941-978). 日本産としては10種収録されているが, シノニムのものであるので, 実際には6種が記録されている. MOTSCHULSKY の論

文によるものがその大部分で、分布は総て "Japonia" となっている。なお、第4巻にはコガネムシが収録されている。出版年から云うと明治2年の出版になるが、便宜的に此处に収録次記しておく。

1969. GEMMINGER et B. de HAROLD. *Catalogus Coleopterorum Tome IV* (London)

コガネムシ科の目録で、日本産としては(総て分布は Japonia となっている)26種が記録されているが、MOTSCHULSKY の論文に出てきたものが大部分である。

以上で、明治以前日本で記録されたコガネムシの研究史を文献によって説明してきた。最後に明治迄に日本で記録されたコガネムシ類を現在の学名で次にまとめておく。

明治迄に日本で記録されたコガネムシ主科一覧表(学名は現在使用のものにしてある)

Superfamily Scarabaeoidea コガネムシ主科

Family Lucanidae クワガタムシ科

- 1.* *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY, 1861
ミヤマクワガタ
2. *Prismognathus dauricus* MOTSCHULSKY, 1861
キンオニクワガタ
3. *Prosopocoilus inclinatus* (MOTSCHULSKY, 1857)
ノコギリクワガタ
4. *Dorcus hopei* (E. SAUNDERS, 1854)
オオクワガタ
5. *Dorcus rubrofemoratus* (SNELLEN VAN VOLLENHOVEN, 1865) アカアシクワガタ

* 番号は便宜的につけたものである。

6. *Dorcus rectus* (MOTSCHULSKY, 1857)
コクワガタ
7. *Dorcus striatipennis* MOTSCHULSKY, 1861
スジクワガタ
8. *Dorcus titanus castanicolor* MOTSCHULSKY, 1861
ツシマヒラタクワガタ
9. *Dorcus titanus pilifer* (SNELLEN VAN VOLLENHOVEN, 1861) ヒラタクワガタ

Family Torogidae コブスジコガネ科

1. *Trox opacotuberculatus* MOTSCHULSKY, 1860
ヒメコブスジコガネ

Family Geotrupidae センチコガネ科

1. *Geotrupes (Chromogeotrupes) auratus* MOTSCHULSKY, 1857 オオセンチコガネ
2. *Geotrupes (Eogeotrupes) laevistriatus* MOTSCHULSKY, 1857 センチコガネ

Family Scarabaeidae コガネムシ科

1. *Copris* (s. str.) *acutidens* MOTSCHULSKY, 1860
ゴホンダイコクコガネ
2. *Copris* (s. str.) *ochus* (MOTSCHULSKY, 1860)
ダイコクコガネ
3. *Caccobius jessoensis* HAROLD, 1867
マエカドエンマコガネ
4. *Liatongus phanaeoides* (WESTWOOD, 1840)
ツノコガネ
5. *Aphodius (Colobopterus) haroldianus* BALTHASAR, 1932 オオマグソコガネ
6. *Aphodius (Chilothorax) nigrotessellatus* (MOTSCHULSKY, 1866) セマダラマグソコガネ
7. *Aphodius (Phaeaphodius) rectus* (MOTSCHULSKY, 1866) マグソコガネ

8. *Aphodius* (s. str.) *elegans* ALLIBERT, 1847
オオフタホシマガソコガネ
9. *Aphodius* (*Agrilinus*) *breviusculus* (MOTSCHULSKY, 1866) ヌバタママグソコガネ
10. *Ectinohoplia obducta* (MOTSCHULSKY, 1857)
ヒメアシナゴコガネ
11. *Maladera* (s. str.) *japonica* (MOTSCHULSKY, 1860) ピロウドコガネ
12. *Maladera* (s. str.) *orientalis* (MOTSCHULSKY, 1857) ヒメピロウドコガネ
13. *Paraserica gricea* (MOTSCHULSKY, 1866)
ハイイロピロウドコガネ
14. *Heptophylla picea* MOTSCHULSKY, 1857
ナガチャコガネ
15. *Melontha japonica* BURMEISTER, 1855
コフキコガネ
16. *Polyphylla* (*Granida*) *albolineata* (MOTSCHULSKY, 1861) シロスジコガネ
17. *Popillia japonica* NEWMANN, 1844
マメコガネ
18. *Phyllopertha intermixta* (ARROW, 1813)
アオウスチャコガネ
19. *Mimela splendens* (GYLLENHAL, 1817)
コガネムシ
20. *Anomala albopilosa* (HOPE, 1839)
アオドウガネ
21. *Anomala costata* (HOPE, 1839)
オオスジコガネ
22. *Anomala cuprea* (HOPE, 1839)
ドウガネブイブイ
23. *Anomala geniculata* (MOTSCHULSKY, 1866)
ヒメサクラコガネ
24. *Anomala multistriata* MOTSCHULSKY, 1861
ハンノヒメコガネ
25. *Anomala octiescostata* (BURMEISTER, 1844)
ヒラタアオコガネ
26. *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY, 1860
ヒメコガネ
27. *Anomala testaceipes* (MOTSCHULSKY, 1860)
スジコガネ
28. *Allomyrina dichotoma septentrionalis* (KONO, 1931) カブトムシ
29. *Eophileuruc chinensis* (FALDERMANN, 1835)
コカブトムシ
30. *Rhomborrhina* (s. str.) *unicolor* MOTSCHULSKY, 1861
アオカナブン
31. *Pseudotorynorhina japonica* HOPE, 1841
カナブン
32. *Eucetonia pilifera* MOTSCHULSKY, 1860
ハナムグリ
33. *Anthracophora rusticula* BURMEISTER, 1842
アカマダラハナムグリ
34. *Glycyphana fulvistemma* MOTSCHULSKY, 1860
クロハナムグリ
35. *Protaetia orientalis submarmorea* (BURMEISTER, 1842)
シロテンハナムグリ
36. *Gametis jucunda* (FALDERMANN, 1835)
コアオハナムグリ
37. *Paratrichius septendecimguttatus* (SNELLEN VAN VOLLENHOVEN, 1864)
ジュウシチホシハナムグリ

以上、明治迄に日本産で学名の与え記録されているものは、4科49種ということになる。

現在(1996)の日本産コガネムシ主科の種は8科426種176亜種が知られているのだから、この時点では11%位が日本から記録されていることになる。当時の日本は、まだまだ自然状態は良好で、未開の地を多く残していた。記録されているものは、比較的一般に見られるものが主体であるが、現在でもわりと分布が限られていると考えられる種も含んでいる。

なにぶんにも採集調査する人がいなく、限られた範囲で限られたヨーロッパ人の採集の結果からすれば止むを得ない状況だと考えられる。

兵庫県におけるウスバシロチョウの分布の変遷

広畑 政巳

1. はじめに

北海道や青森県ではオオモンシロチョウの発生が報告されたり、与那国島ではキシタアゲハやコモタイマイが採集されるなど分布の拡大が近年話題になっている。

特に暖地性の蝶においてはツمامラサキマダラ、マルパネリマダラ、ホリシャルリマダラ、ミナミコモンマダラその他多くの種が南西諸島で採集されるなど枚挙にいとまがない。

県下においても、ナガサキアゲハ、イシガケチョウ、クロコノマチョウなど分布の拡大は目を見はるものがある。一方、オオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキ、ウスイロヒョウモンモドキなど草原性の蝶は衰退の一途をたどり、近年その姿さえ見られない状況になっている。

変わりゆく環境の変化にどう適応していくかが種の存続と繁栄のための重要なファクターとなるが、その内容はともかくとして、近年採集記録が多く報告されている種にウスバシロチョウがある。

これまで生息していたが発見されていなかったのか、分布を拡大しているのか定かではないが、これまでに報告された文献や、当時の状況を聞きながら、年代別採集地別に記録を整理し、どのように分布域が変化していったかを地図上に表示し、筆者なりの考えを付記した。

本稿を草するに当たり、堀 紳二氏からは多数の採集記録をご提供いただき、木下賢司氏、永幡嘉之氏、近藤伸一氏からは但馬の状況についてご教示をいただいた。また、相坂耕作、石井為久、岩村 巖、尾崎 勇、小野克巳、佐々木薫、唐土洋一、原 聖樹、森下泰治の諸氏からも資料や採集記録のご提供をいただいた。ここに記してお礼を申し上げます。

2. 県下における分布の概要

山本(1969. a)によると、県下で本種が最初に発見されたのは80数年前の1908年5月11日である。その採集地は西庄村(今の上月町)の西大島と小日山の両部落の山裾のようで、井口宗平氏によって発見されたと記されている。

その後暫くは他の地域からの採集記録は出なかったようであるが、1940年代から1960年代にかけては多くの産地が見つかり、その数は40数カ所に及んでいる。

さらに、1980年代に入ると足立義弘氏、木下賢司氏、堀 紳二氏、永幡嘉之氏、小野克巳氏などが市町別の精力的な調査により、その採集地は約290カ所にも広がり、地図上に表示できないほど多く発見されている。

表1, 2は年代別、市町別に採集地を表にしているが、この表をご覧いただければ、その様子がおわかりいただけると思う。これまでに判明している採集記録は、30市町356カ所にもなっている。

この中で、浜坂町田谷¹⁾があるが、田谷という地名は見当らず、田君谷²⁾のことと思われるが、そのまま田谷で表示している。また、広畑・近藤(1989)の香住町八日市は香住町七日市の間違いでお詫びし訂正しておきたい。その他の訂正した記録としては、美方町畑ヶ平¹⁾は温泉町畑ヶ平に、千種町齋木³⁾も波賀町齋木にしている。温泉町和光¹⁾も表には明記しているが、和光という地名は見当らない。

六甲山の記録は、山本(1969. a)によれば、矢野文彦が昭和12年から13年頃にかかり採集されたようで、その場所は阪急六甲から土橋を經由する篠原町一帯であることをご本人から聞かれているようであるが、矢野氏以外の方が確認はされておらず疑問視されている。

神戸市の記録としては他に有馬町¹²⁾、箕谷¹²⁾、淡河¹²⁾もあるが、加藤(1981)では偶産種とした扱いになっているので地図上には表示していない。

表示した地名の中には同一場所であるが大字と小字で地名が違うため重複して表示している所や同一場所であるが、別名になっている所もあると思われるがそのまま表示している。

いずれにせよ、1970年以前は分布域の比較的小さい種ではあったが、その後20数年間経過した現在ではよく調査がされ、但馬地域の西部、播磨地域の北西部では普通に見られる種となっている。

3. 県外の分布拡大の報告から

白水(1989)によれば愛知県矢作川における分布拡大(田中 蕃、佳香蝶39(149):6, 1987)、岐阜市内の分布拡大(飯田逸博、佳香蝶39(150):23-24, 1987)、広島県下の分布拡大(落合武夫、備後の蝶(4):25-26, 1987)、松山市周辺地域の分布拡大(楠博幸、蝶と花(14):1-10, 1987)その他各地でこの現象が現れているようである。白水(1994)では1972年から1992年の20年間に山梨県富士吉田から静岡県御殿場まで分布を拡大したことが(清 邦彦、駿河の昆虫(164):4656-4667, 1993)に報告されているようである。

嵯峨井(1987)においても金沢市北部地域で過去何度となくシーズンに訪れた地域で、1カ所しか発見できなかったところから、その後6カ所の産地が発見されている。

原 聖樹(1989)では神奈川県での分布拡大の状況が報告されており、分布拡大の要因は、分布を拡大したと思われる年代の生息場所とその環境から、休耕畑、耕作放棄地の出現と下草を刈り取り環境が保たれるクリ・ウメ園の増加を挙げている。

そもそも本種は分散・移動性が比較的小さく、定住性が強い種とされており、渡辺(1984)が富士五湖の1つ西湖周辺で行ったマーキング調査では、山越えて1.4kmも移動した個体が3頭もあったことが伝えられているものの、北原(1986)や足立

(1983)のように同じマーキング調査でも、あまり長距離移動はせず400m以内の移動がある程度で、調査結果では定住性が強いという例が多い。しかし、分布拡大の現象はある特定の地域だけの特異なものではなく、前記の他にも多くの地域でこの現象が見られるのはまぎれもない事実である。

4. 県下における分布拡大について

県下における分布の中心は中国山地東端の扇ノ山(1310m)、須賀ノ山(1510m)、三室山(1358m)、日名倉山(1047m)の東側の地域となり、和田山町、但東町以外は円山川と市川を結ぶ線の西側地域に限られる。

以前から生息していながら発見できていなかったのか、そこには生息していなかったのか明確ではないが、これまでの文献の記述によると、山本(1969. a)では夢前町河原谷では当時は本種は見られないとなっているが、ここではそれ以降に発見

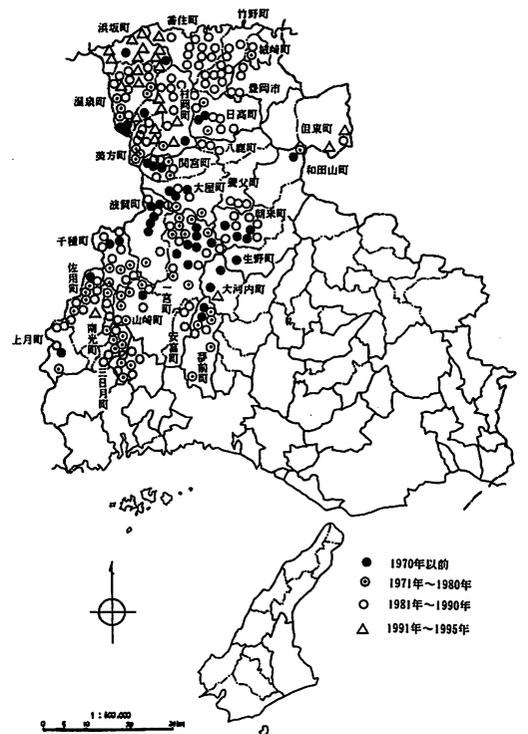


図1 兵庫県におけるウスバシロチョウの年代別採集地

されている。また、石井村(佐用町)や船越山麓の採集記録はなく、平福、豊福にはいないとなっているが、佐用町石井や平福、豊福に隣接する延吉、淀、亀ヶ途ではその後生息が確認されている。

松野(1970)によると、県下北部では発見の可能性はあるが、南部では探しつくされたかと思われているのでかなり調査はされていると判断すると、南部の現状は分布は拡大していると言えるのではないだろうか。

南部の状況を見ると夢前町の雪彦山から南へそして安富町に向って、佐用町日名倉山周辺から南に南光町、三日月町、新宮町、上月町へ、千種町から山崎町にかけて、一宮町の中心部から周辺に向って分布を拡大したのではないかと推測できる採集記録が1970年以降の1980年～1990年にかけて多く見られる。

北部については朝来町の田路、神子畑から養父町に向って、日高町金谷から周辺に向って、関宮町福定、大久保から美方町、村岡町にかけて、温泉町扇ノ山付近から北の方向になど1970年以前にない場所からの採集記録が多くあり、その傾向から分布の広がりが感じられる。

また、浜坂町、香住町はこれまで田君谷²⁹⁾、池の平²⁹⁾の記録が1970年以前にはあっただけであるが近年は採集記録も多く海岸近くまで分布を広げていることは興味深い。尚、永幡氏よりの私信によれば、浜坂町の諸寄は1960年代からいたようであるが鳥取の同好者の標本箱の中にその標本が納まっているとのことである。

このように但馬地域では新しい記録の中には以前から生息していた所が多く含まれていることが考えられるが、竹野町、城崎町、豊岡市など分布の先端の地域で豊岡市などよく調査が行き届いていた地域の記録は分布が広がってきたものと思われる。

市川・円山川ラインの東側の産地で和田山町、但東町の産地は中国山地東端の地域からのつながりでなく、京都府の夜久野町や福知山市から分散

してきたものと推測できる。和田山町竹の内は1967年に発見され、同町床ノ尾山は1978年に発見されている。竹の内は隣接する夜久野町から、そして床ノ尾山と広がっていったのではないかと考えている。但東町では1981年の大河内が初記録である。その後、1995年には同町薬王寺と小坂でも発見されている。これらは福知山市の生息地である下野条、上佐々木等からの拡散と思われる。

5. おわりに

年代別に採集記録を整理すると分布の拡大の傾向がつかめると確信して採集記録を集めてみたものの、まとめてみると、これまでの調査では分布を拡大していると断言できるまで至らない結果となった。従って推測ばかりの取り留めのない報告になってしまったことをお許し願いたい。しかし、採集記録は以前と比較にならないほど多くなり、その範囲も想像以上に広がっていること、夢前町、新宮町、佐用町、朝来町、但東町などこれまでいかなかったと言われているところで発見されていることなどから分布は拡大していると思われる。

今後この資料を参考にさせていただき、これまで確認されている産地周辺、また水系ごとと谷ごとに年を追って系統的に行うことを望むところである。

この度は採集記録を市町別年代別に表と図に表すことと多少の考えを述べたにとどめ問題提起とさせていただいた。今後は分布拡大の要因も併せ、この問題への同好諸氏の研究成果を期待したい。

<参考文献>

- 1) 山本広一(1969. a)兵庫県下のウスバシロチョウについて(1) 兵庫生物6(1):39-42
- 2) 山本広一(1978)兵庫県のウスバシロチョウ 昆虫と自然13(7):30-33
- 3) 広畑政巳・近藤伸一(1989)兵庫県産蝶類分布資料(5) ひろおび(8):1-8
- 4) 原 聖樹(1989)神奈川県におけるウスバシロチョウの分布拡大 神奈川虫報(90):87-97

- 5) 渡辺通人(1986)ウスバシロチョウの分散について 蝶と蛾34(4):175
- 6) 北原正彦(1986)ウスバシロチョウの個体群の生態 昆虫と自然21(7):26-31
- 7) 足立義弘(1983)神鍋のウスバシロチョウの分布調査II IRATSUME(7):7-13
- 8) 白水 隆(1994)1993年の昆虫界をふりかえって -蝶界- 月刊むし(277):7-8
- 9) 小野克巳(1995. a)1991・1992・1993年度ウスバシロチョウの調査報告 杉峠(17):1-7
- 10) 小野克巳(1995. b)1994年度ウスバシロチョウの調査記録 杉峠(17):9-11
- 11) 環境庁(1980)日本の重要な昆虫類 近畿版 東京
- 12) 加藤昌宏・武衛晴雄(1981)神戸の蝶 神戸市立教育研究所 神戸
- 13) 足立義弘・谷角素彦(1982)神鍋のウスバシロチョウの分布調査1 IRATSUME(6):1-4
- 14) 木下賢司(1982)但馬におけるウスバシロチョウの新産地 IRATSUME(6):8-9
- 15) 足立義弘(1985)神鍋のウスバシロチョウ分布調査3 IRATSUME(8/9):17-24
- 16) 木下賢司他(1986)但馬地域の蝶類目録 IRATSUME(10):55-95
- 17) 京都大学蝶類研究会(1987)日本産蝶類239種類の記録(上) SUP INNDA(2):2-40
- 18) 白水 隆(1989)1988年の昆虫界をふりかえって -蝶界- 月刊むし(216):25-39
- 19) 黒井和之(1993)ウスバシロチョウ1993年 混虫図鑑(39):7
- 20) 永幡嘉之(1994)ウスバシロチョウの分布調査 IRATSUME(18):46-47
- 21) 永幡嘉之(1995)ウスバシロチョウの分布調査IV IRATSUME(19):11-12
- 22) 黒井和之(1995)美方郡のウスバシロチョウ IRATSUME(19):13-15
- 23) 宮垣友洋(1995)奈佐森林公園における蝶・トンボの記録 IRATSUME(19):22-25
- 24) 永幡嘉之(1993)ウスバシロチョウの分布調査I IRATSUME(17):31-32
- 25) 永幡嘉之(1993)ウスバシロチョウの分布調査II IRATSUME(17):33-34
- 26) 松野 宏(1970)近畿北部-中国地方におけるウスバシロチョウの分布 すずむし20(1):1-10
- 27) 岩村 巖(1968)西播の蝶分布資料(6) みのう1(1):5-8
- 28) 嵯峨井淳郎(1987)金沢市北部地域におけるウスバシロチョウ 翔(65):3
- 29) 山本広一(1969. b)統兵庫県下のウスバシロチョウ MDK NEWS20(2):16-21
- 30) 黒井和之(1993)美方郡西部のウスバシロチョウの新産地の知見 IRATSUME(17):28-30
- 31) 唐土洋一(1979)西播におけるウスバシロチョウについて てんとうむし(5):12-13
- 32) 岩村 巖(1980)西播の蝶分布資料 ひろおび(5):2-9
- 33) 広畑政巳(1995)兵庫県南西部におけるウスバシロチョウの採集記録2例 てんとうむし特別号遊蟲千年:119
- 34) 杠 隆史(1993)兵庫・鳥取ウスバシロチョウ調査記 のせ22(7):1510-1511
- 35) 木下賢司(1983)但馬におけるウスバシロチョウの新産地II IRATSUME(7):15-18
- 36) 足立義弘・谷角素彦(1982)神鍋のウスバシロチョウの分布調査 IRATSUME(6):1-4
- 37) 島田真輔(1982)美方町の蝶 IRATSUME(6):25-29
- 38) 杠 隆史(1987)兵庫県神崎郡、朝来町における採集記録 のせ(149):42
- 39) 堀 紳二(1987)ウスバシロチョウの採集 きべりはむし15(2):49-50
- 40) 木下賢司他(1996)但馬地方蝶類目録II IRATSUME(20):66-86
- 41) 竹内 亮(1993)鳥取県東部のウスバシロチョウ すかしば(39/40):19-23

表1 ウスパシロチョウの市町別、年代別採集地

	1970年以前	1971年～1980年	1981年～1990年	1991年～1995年
新宮町		下藤原 ²⁾ , 相坂 ^{3 1)} , 二橋 ^{3 1)}	田幸, 角亀, 上藤原, 麦子口, 福原	
三日月町		三日月 ²⁾ , 春哉 ²⁾ , 本郷 ²⁾ , 添谷 ²⁾	小原, 湯浅, 中村, 鎌倉, 金山, 弦谷, 三原	
南光町		船越 ²⁾ , 西下野 ²⁾	下三河, 門前, 青木, 名目津輪	
上月町	西大島 ¹⁾	上秋里 ^{3 1)}	稗田, 樺坂, 桜山	
佐用町	日名倉山 ¹⁾	大島 ²⁾ , 下石井, 上石井, 下村, 奥海	大島王子, 中山, 末包中山, 末包本村, 淡, 亀ヶ池, 鴨尾, 奥海桑村, 若洲, 奥海奥土居, 水根羽蔵, 高野, 海内土居, 菫畑	延吉 ^{3 3)}
夢前町	雪彦山 ¹⁾ , 坂根 ¹⁾	熊部 ²⁾ , 佐中 ²⁾ , 東馬頭 ^{3 1)} , 河原谷 ^{3 1)} , 菅生淵 ²⁾ , 馬頭 ^{3 1)}	小畑, 寺河内, 我孫子	
安富町			関, 栃原, 大河川中流	
山崎町	蕎沢 ^{2 7)}	龜山 ^{3 2)} , 上の上 ^{3 2)} , 土万 ^{3 2)} 上の下 ^{3 2)} , 段 ^{3 2)} , 小茅野 ^{3 2)} 大沢 ^{3 2)}	八重谷峠, 宮ノ元, 野々住原	
一宮町	高野 ¹⁾ , 上岸田, 横山 ¹⁾ , 千町 ¹⁾ 東公文 ^{2 7)} , 倉床 ¹⁾ , 福知 ²⁾	黒原 ²⁾ , 阿舍利, 小原, 深河谷 ⁷⁾ , 公文, 西公文, 富士野, 志倉, 東河内 ^{3 2)}	東河内福田, 奥福知, 白口, 池西内, 草木, 下千町, 溝谷, 西公文和田, 鶴屋, 桑垣, 黒原奥組, 上千町	福中 ⁹⁾ , 百千家満 ^{3 3)}
千種町	河内 ¹⁾ , 西河内 ¹⁾	千種 ²⁾ , 岩野辺 ²⁾ , 荒尾, 奥西山	室の木, 川井, 西河内中野, 戸井の元, 天児屋, 黒土, 河内中村, 三笠高原口, 内海, 藤ノ巣	
波賀町	引原 ¹⁾ , 赤西 ¹⁾ , 音水 ¹⁾ , 原 ¹⁾ , 戸倉 ¹⁾ , 道谷 ^{2 9)}	斎木, 流田	下水谷, 日ノ原, 平桑, 石亀, 尾, 若杉峠, 鹿伏	
大河内町	川上 ¹⁾ , 上小田 ¹⁾			上小田小原 ^{3 3)} , 峰山口 ^{3 3)} , 高倉 ^{3 3)}
生野町	栃原谷 ²⁾			
朝来町	神子畑 ¹⁾ , 新井 ¹⁾ , 田路 ¹⁾ , 奥田路		神子畑鏡鉄橋, 八代 ⁶⁾ , 笠杉峠, 神子畑中島, 神子畑原ヶ谷, 佐中安定, 上八代 ^{3 5)} , 口田路, 中田路, 佐中	
和田山町	竹ノ内 ¹⁾	床ノ尾山 ²⁾		
但東町			大河内 ^{1 4)}	小坂 ^{1 0)} , 薬王寺 ^{1 0)}
大屋町	栗ノ下〜横行 ¹⁾ , 佐治谷 ¹⁾	若杉 ²⁾ , 明延 ²⁾	筏, 中間 ^{1 6)}	
関宮町	福定 ¹⁾ , 丹戸 ¹⁾ , 大久保 ¹⁾ , 外野	葛畑 ²⁾ , 轟 ²⁾	川原場, 草出, 鞆縄, 別宮, 布滝付近, 杉ノ沢高原, 米ノ山山麓スギノ場	
養父町			唐川, 餅耕地 ^{1 6)} , 長野 ^{1 6)} , 井之坪 ^{3 5)}	
八鹿町			石原 ^{1 6)} , 日畑 ^{1 6)} , 妙見 ^{3 5)} , 加瀬尾 ^{1 6)}	

	1970年以前	1971年～1980年	1981年～1990年	1991年～1995年
豊岡市			辻 ¹⁶⁾ 、伊賀谷 ¹⁶⁾ 、 江野 ¹⁶⁾ 、目坂 ¹⁶⁾	奈佐森林公園 ²³⁾
日高町	阿瀬溪谷 ¹⁶⁾ 、金谷 ¹⁶⁾	東河内 ¹⁶⁾ 、分尾 ²⁾ 若林麿村 ¹⁶⁾	万却 ³⁶⁾ 、万場 ³⁶⁾ 、金山 ²⁾ 、 山田 ³⁶⁾ 、水口 ³⁶⁾ 、名色 ¹⁶⁾ 、 栗野 ¹⁶⁾ 、石井 ³⁶⁾ 、山宮 ³⁶⁾ 橋本 ³⁶⁾ 、籠葉 ³⁶⁾ 、久田谷	
城崎町		来日 ²⁾	雲光寺 ¹⁶⁾	
竹野町			東大谷 ¹⁴⁾ 、金原 ¹⁴⁾ 、河内 ¹⁴⁾ 門谷 ¹⁴⁾ 、桑野本 ¹⁴⁾ 、三原 ¹⁴⁾ 二ツ家 ¹⁴⁾ 、床瀬 ¹⁶⁾ 、下村 ¹⁶⁾ 、河南谷 ¹⁴⁾ 、森本 ¹⁶⁾ 、須野谷、 坊岡 ¹⁶⁾ 、鬼神谷 ¹⁶⁾ 、熊谷 ¹⁶⁾	
香住町			土生 ¹⁴⁾ 、本見塚 ¹⁴⁾ 、畑 ¹⁴⁾ 、 大木尾 ¹⁴⁾ 、三川 ¹⁴⁾ 、守柄 ¹⁶⁾ 大谷 ¹⁶⁾ 、浅井 ¹⁶⁾ 、小原 ¹⁶⁾ 、 三谷 ¹⁶⁾ 、八原 ¹⁶⁾ 、境 ¹⁶⁾ 、 山田 ¹⁶⁾ 、七日市 ³⁾ 、鏡 ³⁾	余部 ¹⁴⁾
村岡町	熊波 ²⁹⁾ 、作山 ²⁹⁾	大笹 ²⁾	三川山 ¹⁶⁾ 、蘇武 ³⁾ 、 山田 ³⁾ 、味取 ³⁾ 、 和佐父 ³⁾ 、用野 ³⁾ 、 萩山 ³⁾ 、宮神 ³⁾	丸味 ²⁴⁾ 、長坂 ²⁴⁾ 、高坂 ¹⁹⁾ 、 森脇 ¹⁹⁾ 、桐岡 ¹⁹⁾ 、池ヶ平 ¹⁹⁾ 、 根岡 ¹⁹⁾ 、根岡大池 ¹⁹⁾ 、 相田 ¹⁹⁾ 、神坂 ¹⁹⁾ 、村岡 ¹⁹⁾ 、 小城 ¹⁹⁾
浜坂町	田君谷 ²⁹⁾ 、田谷 ¹⁾ 、 池ヶ平 ²⁹⁾	西ノ谷 ²¹⁾ 、宮谷 ²¹⁾ 、 任-ツ谷 ²¹⁾		諸客 ³⁰⁾ 、久斗山 ³⁰⁾ 、境 ²⁴⁾ 、 大滝 ²⁴⁾ 、藤尾 ²⁴⁾ 、用土 ²⁴⁾ 、 正法庵 ²⁴⁾ 、三尾間庵 ²¹⁾ 、 本谷 ²⁵⁾ 、奥諸客 ²¹⁾ 、和田 ²¹⁾ 、 京屋二又川上流 ²¹⁾ 、大味 ²¹⁾ 、 中小屋 ²¹⁾ 、久谷桃崎 ²¹⁾ 、橋谷、 藤尾鹿間谷 ²¹⁾
温泉町	扇ノ山 ¹⁾ 、菅原 ¹⁾ 、 和光 ¹⁾ 、畑ヶ平 ²⁹⁾	春来 ¹¹⁾ 、霧ヶ滝 ¹⁶⁾ 、 海上 ¹⁶⁾ 、檜尾 ¹⁶⁾ 、 上山 ¹⁶⁾ 、青下 ²⁾	鐘尾 ³⁰⁾ 、井土 ³⁰⁾ 、 伊角 ³⁾ 、中辻 ³⁾ 、 田中 ³⁾ 、千谷 ³⁾ 、 肥前畑 ³⁾ 、湯 ³⁰⁾ 、 熊谷 ³⁾	花口 ²⁴⁾ 、丹戸 ¹⁹⁾ 、多子 ¹⁹⁾ 、 宮脇 ¹⁹⁾ 、竹田 ¹⁹⁾ 、切畑 ¹⁹⁾ 、 後山 ³⁰⁾ 、高山 ³⁰⁾ 、金屋口 ³⁰⁾ 、 仁達寺 ²⁵⁾ 、湯谷 ²⁴⁾ 、越坂 ²⁵⁾ 、 八日市 ²⁴⁾ 、内山 ²⁵⁾ 、前 ²⁵⁾
美方町		熱田 ²⁾ 、美方高原 ²⁾	神水 ³⁷⁾ 、石寺 ³⁾ 、 小代スキ一場 ³⁷⁾ 、 貫田 ³⁾ 、秋岡 ³⁾ 、 新屋 ³⁾ 、忠宮 ³⁾ 、 大谷 ³⁾ 、久須部 ³⁾	奥八子スキ一場 ¹⁹⁾ 、大照林道 ¹⁹⁾ 、 一二峠 ¹⁹⁾ 、神場 ¹⁹⁾ 、東垣 ²⁴⁾ 、 鍛冶屋 ²⁴⁾ 、佐方 ²⁴⁾ 、茅野 ²⁴⁾ 、 平野 ²⁴⁾ 、美山 ²⁴⁾ 、野間谷 ²⁴⁾ 、 広井 ²⁴⁾ 、城山 ²⁴⁾ 、備 ¹⁹⁾
神戸市	六甲山 ¹⁾	有馬町 ¹²⁾ 、箕谷 ¹²⁾ 、 淡河 ¹²⁾		

播磨地方の長翅目

大貝 秀雄

播磨地方の長翅目 (Mecoptera) といえ、この地を基産地とする種が存在するにもかかわらず従来あまり注意して調べられたことがなかったようである。日本全体では3科4属40種余りが既知で、まだかなりの数の未記載種が残されているのが現状である。その内訳はシリアゲムシ科 (*Panorpidae*) ではシリアゲムシ属 (*Panorpa*) 30種2亜種、南西諸島のみに産する *Neopanorpa* 属1種、シリアゲモドキ科 (*Panorpididae*) シリアゲモドキ属 (*Panorpodes*) 3種、そしてガガンボモドキ科 (*Bittacidae*) のガガンボモドキ属 (*Bittacus*) 10種である(以上、疑問種も含む)。筆者はこれらのうちシリアゲモドキ属1種 (*Panorpodes paradoxus* M'Lachlan) とシリアゲムシ属の6種 (*Panorpa flavicaudaria* Miyake, *Panorpa multifasciaria* Miyake, *Panorpa pryeri* M'Lachlan, *Panorpa japonica* Thunberg, *Panorpa trizonata* Miyake, *Panorpa takenouchii* Miyake) を播磨地方のシリアゲムシ科として確認した。これは兵庫県に分布し得る既知種のうちキバネシリアゲ (*Panorpa ochraceopennis* Miyake) ただ1種を除く全種を網羅している。また、これらとは別に *P.pryeri* に近縁の未記載種1種と *P.japonica* に近縁で未記載の数種が今回あらたに見出された。前者は鳥取県大山などでも採集されており近く命名されると思われるのに対し、後者はまだほとんど実態が不明で今後の大きな研究課題となる。さらに既知種の中でも *P.pryeri* には疑問点があり、将来別亜種または別種に分けられる可能性がある。以下、播磨地方で確認されたシリアゲムシ科について筆者の観察記録を中心に各論を述べたい。

なお、ガガンボモドキ属も播磨地方で少なくとも3種の分布を認めている。しかし、いずれの種も問題点が残されているため今回は詳述を避ける。

1種はイッシキガガンボモドキ (*Bittacus issikii* Miyamoto) と考えられるが雄が未見で確定できていない。2種目はトガリバガガンボモドキ (*Bittacus mastrillii* Navas) に近縁な未記載種である。最後はクロヒメガガンボモドキ群の *Bittacus tarsalis* Miyamoto またはそれに近縁な未記載種で、これも成熟雄の材料がなく同定は留保される。

キシタトゲシリアゲ (*Panorpa fulvicaudaria* Miyake)

小型、黒色で雌雄とも第六腹節以降が黄褐色。翅は大部分が無色透明で縁紋から斜め内側に走る細い1黒条を持つ(図1-a)。雄の第六腹節には上向きの小さな棘があり、本種を含むトゲシリアゲ群の特徴となる。本種は原色昆虫大圖鑑Ⅲ(北隆館)でキシマシリアゲ (*Panorpa kirishimaensis* Issiki) として解説されているものと同一種である。はじめ播磨・上高地・霧島から得られた材料が別々に記載され、後に同種と認められて表記の学名が採用されることになった。その基産地は播磨であり、おそらく播州高原から千種高原の間のいずれかであったろうと推測される。

本種の分布は東北地方の南半から四国・九州と広い。従来はかなり標高の高いところに生息地が限られるとされていたが、播磨地方では局地的ながら標高100m程度の丘陵地にまで生息している。千種高原では5月下旬から7月上旬まで、相生市では4月下旬から5月末頃まで見られる。明るいところを好む性質が強いらしく、日当たりの良いマント群落上を活発に飛び回ることが多い。

余談になるが本種は筆者がシリアゲに引き込まれるきっかけとなった記念すべき種である。1994年に相生市で最初の試料を得たとき北隆館の図鑑に示されていた産地が九州の山地だけであったこ

とに驚き、朝比奈正二郎博士から福岡市の宮本正一博士を御紹介いただいた。それ以来筆者からは次々と標本を御送りし、そのたびに宮本博士からは懇切な御指導をいただき今に至っている。

[採集地]

相生市矢野瓜生(100m) : 1♂1♀ 7-V-1994, 1♂3♀ 3-V-1995, 1♀ 4-V-1995, 3♂♂ 7-V-1995, 1♂1♀ 20-V-1995, 南光町西下野(200m) : 2♂♂3♀ 25-V-1996, 南光町船越(200-300m) : 1♀ 25-V-1996, 千種町西河内(800m) : 2♂♂1♀ 27-V-1995, 2♂♂1♀ 17-VI-1995, 千種町三室山(1,100-1,300m) : 2♂♂3♀ 24-VI-1995。

ホソマダラシリアゲ (*Panorpa multifasciaria* Miyake)

プライヤシリアゲ (*Panorpa pryeri* M' Lachlan) に近縁な種であり体は軟弱で小型。翅斑も基本的には *P.pryeri* と類似のパターンを呈するが断片化して細かいまだら模様となる(図1-b)。

本種はキシタトゲシリアゲ (*Panorpa fulvicaudaria* Miyake) とは対照的に日陰を好む性質が強く、下草の中に潜んでいる場合も多い。また播磨産のほかのシリアゲにはみられない行動であるが葉裏に隠れている姿もしばしば観察される。静止時には翅を立てぎみに体側にぴったりつけているため一見ただけではシリアゲとは気づきにくい。さらに雄でも腹側は静止時に翅の下に隠れて見えない。

本種の分布域は北陸以西の本州に限られ、九州・四国・近畿南部から中部地方などに各々近縁の別種が分布する。播磨地方では低山地から高地までかなり普遍的に見られ垂直分布が厚い。相生・上郡では4月下旬から6月末まで、千種町の高地では5月下旬から7月中旬まで見られる。

[採集地]

相生市矢野釜出(150-200m) : 2♂♂1♀ 5-VI-1994, 1♂ 20-V-1995, 相生市矢野瓜生(100m)

: 1♀ 3-V-1995, 2♂♂ 4-V-1995, 1♂ 6-V-1995, 上郡町行頭(120m) : 1♀ 28-V-1994, 上郡町野桑(100-120m) : 1♂1♀ (テネラル) 30-IV-1995, 1♂ 3-V-1996, 南光町西下野(200m) : 1♀ 25-V-1996, 南光町船越(200-300m) : 2♂♂ 25-V-1996, 千種町河内(400m) : 1♀ 25-V-1996, 千種町西河内(800m) : 1♂ 27-V-1995, 千種町三室山(1,100-1,300m) 3♂♂3♀ 24-VI-1995。

プライヤシリアゲ (*Panorpa pryeri* M' Lachlan)

体は大型だが軟弱。体色は黒く、胸側と肢などは黄色。口吻の両側にも先端に向かい細くなる黄条を持つ。腹部の結合膜は鮮やかな淡黄色で雄の生殖節は淡黄褐色。翅には特有の黒斑を現す(図1-c)。播磨地方では4月下旬から6月末頃にかけて出現し、低山地の山裾で小流沿いによく見られる。

以上の特徴から本種は留保つきで *P.pryeri* と判断される。これは北海道の低地から四国・九州の山地まで広く分布し、翅斑や体色にはかなりの変化がみられるとされているものである。しかしながらそれらの変異はヤマトシリアゲ (*Panorpa japonica* Thunberg) にみられるような同一産地での個体差ではなく、一定の圏内では非常に安定した形質が表現されているようである。筆者がこれまでに検することのできたのは播磨産のほかに徳島・栃木・山形・北海道の標本のみであるが、これらはそれぞれに固有の体色・翅斑を持つのみならず雄生殖節の外観にも若干の相違点が観察された。今後より広範に試料を入手して詳細な検討をする必要があるが、本種は将来いくつかの亜種または種に分割される可能性がある。例えば、これまで200m以下の低地でしか確認されていない播磨産と1,100m以上の高地でのみ見られる徳島産の間に亜種レベル以下の差しかないとするのは不自然であろう。当面の課題では、播磨の低地性群と関東-中部の高地性群の分布域が不連続かどうかを確かめることにある。

[採集地]

相生市矢野釜出(150-200m) : 1♀ 5-VI-1994, 相生市矢野瓜生(100m) : 1♂ 20-V-1995, 上郡町佐用谷(100-150m) : 1♀ 29-IV-1994, 上郡町柏野(60m) : 1♀ 2-V-1994, 上郡町旭日(200m) : 1♀ 5-V-1994, 1♂ 3-V-1996, 上郡町野桑(100-120m) : 1♀ 21-V-1994, 1♂ 22-V-1994, 1♀ (目撃) 30-IV-1995, 4♂♂3♀♀ 3-V-1996, 5♂♂3♀♀ 26-V-1996, 南光町西下野(200m) : 3♀♀ 25-V-1996.

Panorpa sp.

形態、翅斑ともプライヤシリアゲ (*Panorpa pryeri* M'Lachlan) と酷似しており、従来は *P. pryeri* の一地方型と考えられてきた(図1-d)。生態的にも *P. pryeri* との類似性が高いと思われ、他の地方で高地性の *P. pryeri* が見られる環境と同様、付近に緩流のある林道沿いで発見されている。

本種の識別点は前後翅の前縁に基部から縁紋の手前に至る太い黒条を有することである。ことに前縁室 (costal space) の全体におよぶ着色は *P. pryeri* とは明確に異なる特徴である。雄ゲニタリアの構造にも *P. pryeri* との相異点が認められる(宮本正一、私信)。しかしながら、播磨で唯一得られた雄の標本は宮本博士のもとにあり、ここでは紹介することができない。千種町西河内のほかに本種の分布が間違いないもしくは間違いなかったと思われるのは鳥取県大山とかつての音水国有林である。音水産は1958年に採集された雄の標本写真がプライヤシリアゲ南方型として保育社の原色日本昆虫図鑑(日浦、1977)に示されている。さらにごく最近、長野県でも本種と思われる試料が採られたとの情報を得た。

[採集地]

千種町西河内(800m) : 1♀ (テネラル; 目撃記録) 27-V-1995, 1♂1♀ 17-VI-1995, 1♀ 24-VI-1995.

ヤマトシリアゲ (*Panorpa japonica* Thunberg)

本種は北海道南端部・本州・四国・九州の平地から低山地に最も普通な種である。江戸時代、1775年8月から1776年11月まで日本に滞在したスウェーデン人 C. P. Thunberg により1784年に記載された種で、日本から報告された最初の長翅目昆虫である。本種の分布状況から推定して長崎の出島で彼自身が採集した標本に基づき記載された可能性が高い。しかし彼は1776年にオランダ商館長の江戸参府に随行して途中多くの植物を採集記載していることから、その際に本種が採集された可能性も否定できない。

本種の翅斑や体色には様々な変異があるとされており、播磨においても例外ではない。相生市・上郡町などでは4月下旬から6月下旬まで雌雄とも肢を除いて全身黒色のものが現れ、7月中旬から9月中下旬までは *f. klugi* として区別される雄の体色が赤みがあった黄褐色のものが出現する。前者は翅斑の変化が著しく体長も大小様々である。その両極のものを写真に示しておいた(図2-a, b)。後者では翅斑・体長ともあまり変化がない。これら二型は年二化の季節型とみなされているが、このことは完全に証明されているという訳ではないようである。

一方、千種町西河内や波賀町氷ノ山などの高地には7月から9月に外見的には本種との区別が難しい種々のタイプの黒いシリアゲが出現する(図2-c, d)。ところがこれら雄の陰茎を調べてみると全く異なる複数の未知種が同所的に発生しているらしいことがわかってきた。図4に、それらのうち典型的な4タイプの陰茎の略図を示した。図示した以外にも更にいくつかのタイプが観察されている。同一地域に産する個体間で陰茎の構造が互いに明らかに異なるならばそれぞれが独立種であると認めざるを得ないであろう。しかしながら今のところ余りにも例数が限られていることと雌雄の対応が全く不明であることから実態の解明には時間を要すると思われる。ただ少なくともひとつ

のタイプ(図4-d)は *P.japonica* の標準的な個体と同様の翅斑を持ち陰茎もよく似ているので *P.japonica* と同定してもよいだろう。一方で、これと寸分違わぬ翅斑を持ちながら陰茎が全く異なる例もある。図2-dは *P.japonica* との翅斑の違いが比較的はっきりした標本である。なお、播磨地方は近縁種であるキバネシリアゲ (*Panorpa ochraceopennis* Miyake) の分布域に含まれているが、その基産地のひとつである日光産の雄標本と比較して一致した特徴を示すものは見出されていない。

[採集地] (*P.japonica*)

相生市矢野町小河(50-100m) : 1♀ (f. klugi) 11-IX-1993, 10♂♂3♀♀ (f. klugi) 25-VIII-1996, 相生市矢野瓜生(100m) : 1♀ (テネラル) 7-V-1994, 1♂ (テネラル) 3-V-1995, 1♂ 4-V-1995, 1♀ (テネラル) 6-V-1995, 2♂♂ 7-V-1995, 1♂2♀♀ 20-V-1995, 上郡町金出地(150-200m) : 2♂♂ (f. klugi) 12-IX-1993, 1♂ (f. klugi) 17-VII-1994, 上郡町岩木(100m) : 1♀ (f. klugi) 15-IX-1993, 1♂ 5-V-1994, 上郡町山野里(50-100m) : 1♀ (テネラル) 30-IV-1994, 上郡町高桑(100-120m) : 1♀ (f. klugi) 3-IX-1995, 上郡町高山(100m) : 1♂1♀ (f. klugi) 3-IX-1995, 小野市福匂(50-100m) : 1♂1♀ 6-V-1994, 南光町西下野(200m) : 2♂♂1♀ 25-V-1996。

[採集地] (不明群)

千種町西河内(800m) : 2♂♂4♀♀ 15-VII-1995, 3♀♀ 2-IX-1995, 2♂♂1♀ 13-VII-1996, 4♂♂1♀ 3-VIII-1996, 4♂♂1♀ 24-VIII-1996, 波賀町(氷ノ山, 1,000m) : 1♂1♀ 10-VIII-1996。

ミスジシリアゲ (*Panorpa trizonata* Miyake)

ヤマトシリアゲ (*Panorpa japonica* Thunberg) と同じグループに属するが外観はかなり異なる(図3-a)。体も翅も *P.japonica* に比べて細く、特に雄の腹部第七節が第八節と同様に細長い点特徴的である。翅にはその名が示す通り雌雄とも3本の明瞭な黒帯を有する。播磨産のテネラルな雄

は頭胸部背面が黒褐色になるほかは全身が鮮黄色である。成熟個体は黒褐色になり肢のみ黄褐色。

本種の分布は広く本州の大部分と九州で700-1,800m程度の山地に7月から9月まで出現するとされている。播磨でも標高800mの千種町西河内などで7月に未熟個体が、8月から9月に成熟個体が観察されている。

[採集地]

千種町西河内(800m) : 2♂♂ (テネラル) 5-VII-1995, 1♂ (テネラル) 22-VII-1995, 1♂3♀♀ 2-IX-1995, 1♂ 3-VIII-1996, 波賀町(氷ノ山, 1,000m) : 3♂♂1♀ 10-VIII-1996。

ホシシリアゲ (*Panorpa takenouchii* Miyake)

雄は第三腹節背板が後方へ棒状に著しく伸びて特異であり、それに伴い腹節の外形も特徴的となる。翅斑は雌雄とも同属の他種とはかなり異なり、前後縁に沿って不連続な黒紋が並ぶ(図3-b)。体色は雄では複眼などの一部を除いて全体鮮黄色を示し、雌では黒味が強い。本種は本州西部と四国の山地に見られる。本州中部、北陸地方の一部、九州と本州西端部にはそれぞれ別種が分布する。本種の基産地(土佐)に近い徳島の個体と比べると播磨産の個体は少し小型で翅斑にも減少・単純化の傾向が認められる。

文献上は本種の成虫は5月下旬から8月まで300m以上の山地で出現するとされている。しかし筆者が播磨地方で確認できたのは下記の例のみであり、標高800m前後において8月上旬から9月上旬に限定されている。

[採集地]

千種町西河内(800m) : 1♀ 2-IX-1995, 1♂2♀♀ 3-VIII-1996, 1♂ 24-VIII-1996。

スカシシリアゲモドキ (*Panorpodes paradoxus* M' Lachlan)

本種は播磨に分布する他のシリアゲ類とは異なりシリアゲモドキ属 (*Panorpodes*) に分類される。

Panorpes は腹部第六節が背板と腹板に分離すること、翅脈の相違、幼虫時における腹節の違いなどでシリアゲ属 (genus *Panorpa*, *Panorpiinae*) とは明瞭に区別され別亜科 (*Panorpodinae*) に配置されてきた。しかし近年、海外での研究により、日本と朝鮮半島に局在する本属と北アメリカに分布する別属のために独立した科 (*Panorpodidae*) が設けられたようである。本州・四国・九州に広く分布する本種には多くの地方変異や多型が知られ、特に雌の翅斑は多様である。播磨産の雄は体色が黄褐色、翅は橙黄色で美しく縁紋のみが不透明となる(図3-c)。雌は体背面の大部分が黒色で、翅は雄と同様のものからホシシリアゲ (*Panorpa takenouchii* Miyake) とプライヤシリアゲ (*Panorpa pryeri* M'Lachlan) の中間的な顕著な斑紋をもつものまであり種々の中間型が見出されている (*f. decorata*)。ただし、南光町では採集品以外にもかなり多数の雌を観察したが100%が翅に黒斑の発達したタイプであった(図3-d)。翅斑の表現型が何らかの外的要因に支配されている可能性も示唆され興味深い。千種町での出現期は5月下旬から7月上旬までである。中部高地などから知られている短翅型雌や、徳島県剣山に分布する全身黄褐色の雌、滋賀県・徳島県など各地に低い頻度で出現する端紋型(ツマグロ型 *f. apicalis*) の雌などは今のところ播磨地方では確認できていない。

[採集地]

千種町西河内(800m) : 3♂♂1♀ 27-V-1995, 1♀ 17-VI-1995, 2♀ 24-VI-1995, 千種町三室山(1,200-1,300m) : 2♂♂3♀♀ 24-VI-1995, 南光町船越山(200-300m) : 3♂♂4♀♀ 25-V-1996。

<後記>

筆者は1996年3月より徳島に転居し、その後は引き続き四国の長翅目を調査しはじめている。播磨地方のシリアゲムシ科については不十分な点が多いながらも、ひとつの区切りと考えて今回の報告をまとめることにした。しかしながらまだまだ

知識と材料の不足が否めない。特に播磨につづく中国地方と北近畿から中部地方にかけての試料は極めて重要度が高いにもかかわらず、まだほとんど持ち合わせていない。姫昆会員諸兄からの御援助がいただけるならば、このうえない幸せである(三角紙包みの乾燥標本で十分ですのでぜひよろしく願いいたします)。

最後になったが、この報告をまとめるにあたり同定の労をとっていただき終始貴重な御指導をたまわるとともに本稿を御校閲いただいた宮本正一博士に深く感謝する。また宮本博士を筆者に紹介して下さった朝比奈正二郎博士に御礼申し上げる。

<引用文献>

- 岩崎 靖(1994) "シリアゲムシ類" 動物たちの地球Ⅲ 昆虫, pp. 118-119 朝日新聞社。
- 環境庁編(1995) "シリアゲムシ目" 日本産野生生物目録、無脊椎動物編Ⅱ, pp. 417-418 自然環境研究センター
- 木村陽二郎(1994) "ツンベリー" 朝日日本歴史人物事典1994 pp. 1, 100-1, 101 朝日新聞社
- 日浦 勇(1977) "シリアゲムシ目(長翅目)" 原色日本昆虫図鑑(下)全改訂版 pp. 175-177, 1pl. 保育社
- M'Lachlan, R(1875) "A sketch of our present knowledge of the Neuropterous fauna of Japan (excluding Odonata and Trichoptera)" Trans. Ent. Soc. London (part II, Sept.), 183-190.
- Miyake, T. (1913) "Studies of Mecoptera in Japan" J. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo 4 265-400.
- Miyamoto, S. (1978) "Geographical forms in the *leukopectera*-group of the genus *Panorpa* Linnaeus (2)" J. Chikushi Jogakuen Jun. Coll. (13) 37-44.
- Miyamoto, S. (1979) "New species of the Mecoptera in Japan"

J. Chikushi Jogakuen Jun. Coll. (14)29-41.
Miyamoto, S. (1984) "New species and subspecies of the Mecoptera in Japan"

J. Chikushi Jogakuen Jun. Coll. (19)1-16.
宮本正一(1965) 原色昆虫大圖鑑第3巻 pp. 48-49

and 155-156, 1pl., 北隆館

宮本正一(1979) "新潟県の長翅目" 新潟県の昆虫 (越佐昆虫同好会会報50号慶祝論文集) pp. 231-246

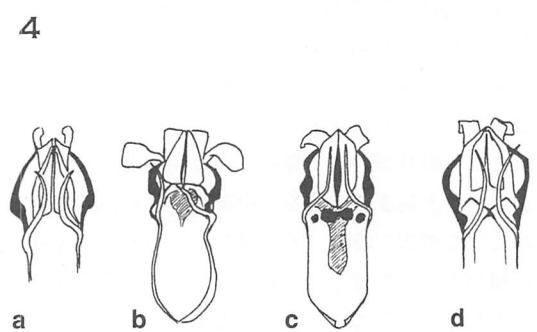
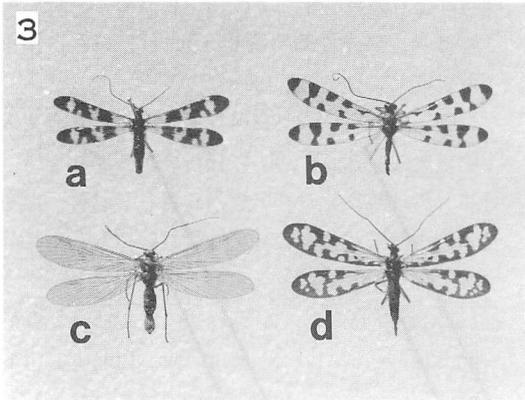
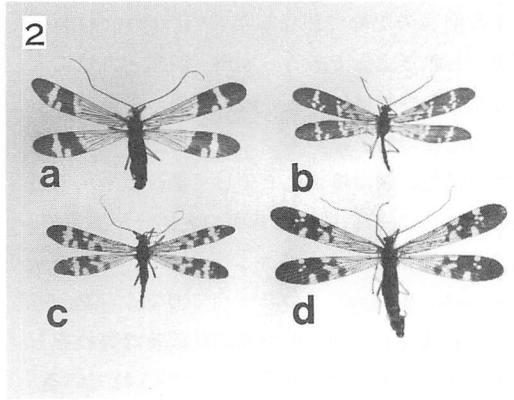
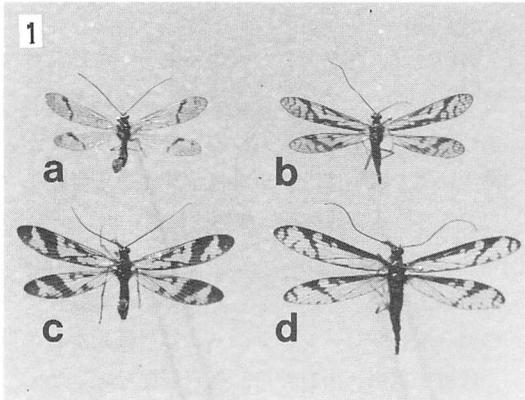


図1
a: *Panorpa fluvicaudaria* Miyake ♂ (矢野瓜生産)
b: *Panorpa multifasciaria* Miyake ♀ (矢野釜出産)
c: *Panorpa pryeri* M' Lachlan ♂ (野桑産)
d: *Panorpa* sp. ♀ (西河内産)

図2
Panorpa japonica Thunberg および近縁な不明種
a: *Panorpa japonica* Thunberg ♂ (岩木産)
b: *Panorpa japonica* Thunberg ♀ (矢野瓜生産)
c: *Panorpa* sp. ♀ (西河内産)

d: *Panorpa* sp. ♂ (西河内産)

図3
a: *Panorpa trizonata* Miyake ♂ (西河内産)
b: *Panorpa takenouchii* Miyake ♀ (西河内産)
c: *Panorpodes paradoxus* M' Lachlan ♂ (西河内産)
d: *Panorpodes paradoxus* M' Lachlan ♀ (船越産)

図4
Panorpa japonica Thunberg 関連の不明種群4個体の陰茎略図。すべて西河内産。

南 国 採 集 記

花 岡 正

<与那国編>

1995年1月4,5日、1996年1月3~5日の2回採集に与那国へ渡った。2回共、石垣島の採集とかけもちだったので短い急がしい行程だったが、カミキリがそこそこ採集、羽脱し成果が上った。南国で気温も高くツマベニの姿がそこそこ見られ仲々気持ち良かった。宇良部岳、テンダバナ、祖内部落、西崎公園、満田原林道で採集、宇良部岳頂上までは車で上れるが、道路から少しそれると足が仲々進まないブッシュの状態。中腹から頂上にかけてハゼ、アカメガシワ、ガジュマルがあちこちに見られる。ガジュマルの根元の草の上でキボシの成虫をゲット、成虫はこれだけ採集したのみ。

ハゼはキマダラヒメミヤマのホストなのであちこち見て廻るが、枯れ枝、倒木はほとんど無く、新しい倒木はダメ、古くなるとウスイロフトだったり結局1頭羽脱したのみ。いろいろの人の話や、2回の採集からハゼの折れた枝の幹側の部分が良い様でT氏はガジュマルの同じ様な状態の部分から羽脱させたとの話を聞いた。ウスイロフト、ノブオフト共に頂上付近のハゼ、アカメガシワ、スタジイから少しずつ羽脱、ガジュマルからキボシ、サキシマトゲムネ、ヨナグニゴマフが、麓のニッケイからイリオモテトラが羽脱。アコウ、ガジュマル共にヨナグニジュウジクロは羽脱しなかった。

祖内部落のフクギの倒木からキボシを割り出す。この木からヨツスジトラ、ムモンアカネトラ、イツホシシロ、ヨナグニゴマフが羽脱。テンダバナの竹を見て廻ると、10^m/m前後のカミキリの羽脱孔が有る。サビアヤかもと適当に持ち帰るが結局羽脱せず、ササの頂上からウスアヤを採集、幼虫もかなり見つけたがこれ又羽脱せず、石垣、オモト岳のゴダケザサも2回オモトウスアヤをと思いい持ち帰ったがこれも羽脱せず、石垣満田林道のタケからサビアヤを羽脱させた位で水分の為か仲々難しい。ピン類に水をさし、この中にタケを入

れ持ち帰ればあるいは羽脱するかも。満田原林道ではスタジイ、アカメガシワからノブオフト、ウスイロフト、ヤノヤハズ、ニッケイからハッタアメクロが羽脱。ヨツスジカミキリのホスト、クロツグは西崎公園、宇良部岳、祖内と比川間の道路沿いに有り、羽脱口が見られた。成虫は2年間に渡り羽脱、乾燥に強い様子。

他にフトガタヒメ、ワモンサビ、ゴマフサビ、ハヤシサビ、フタホシサビなど。ヨナグニジュウジクロはN氏がホスト不明だが10頭余り羽脱させた。幼虫の割に成虫になり羽脱する個体が少なく、できるだけ乾燥に留意、工夫しなければ、ノブオ、ウスイロは数が少ない。

蝶ではツマベニ以外にクロテンシロ、タイワンモンシロ、タイワンシロ、スジグロカバマダラ、オオゴマダラなどがマントの辺りや、マントの間の細い道沿いの花に見られた。タテハモドキも西崎公園で、その中でもコモンタイマイが一番のニュースらしい。1月だと言うのに成虫で採集されたのは1996年が初めてらしい。例年だと11月位で成虫は見られなくなるらしい。ポイントはアオスジアゲハと同じ様な行動らしく、高所を飛び廻り、時々マントの辺りに降りてくるのでこれを採集するとの話で、満田原林道の少しテンダバナ寄りの細い道の足場の良い所が良いらしい。T氏もゲット、短期間でも与那国は良い島だ。

キマダラヒメミヤマ	1996. 4. 26	宇良部岳
		ホスト ハゼ
ノブオフト	1996. 6. 15	満田原林道
		ホスト スタジイ
ウスイロフト	1996. 7. 9	宇良部岳
		ホスト アカメガシワ
ヨツスジ	1996. 7. 8	宇良部岳
		ホスト クロツグ
ハッタアメイロ	1996. 7. 12	満田原林道
		ホスト ニッケイ
イリオモテトラ	1996. 6. 22	宇良部岳

ホスト ニッケイ

<石垣編>

1990年、1992年、1995年、1996年の1月ばかりに採集に行った。カミキリは約50種、タマムシは10種弱、蝶も少々採集。採集地は、バナナ岳附近、オモト岳から嵩田林道附近、ウラオモトの附近、平久保など、やはりカミキリが主な採集目的で、主な物で

タイワンツツサビ 1990. 5. 14, 1992. 5. 28

平久保

イシガキフト 1990. 5. 24 オモト岳

ホスト スダジイ

ヤエヤマホソバネ 1996. 5. 27 米原

ホスト アカメガシワ

オオバヤシトゲヒゲトラ 1996. 6. 9 オモト

サキシマトゲヒゲトラ 1996. 6. 22 ウラバナナ

公園 ホスト スダジイ

イリオモテトラ 1996. 7. 4 吉原

ホスト タブ

オガサワラチャクロ 1996. 7. 13 吉原

ホスト タブ

ムネマダラトラ 1992. 5. 28 米原

ホスト キリ的一种(タイワンギリ?)

コゲチャフタモン 1996. 6. 24 オモト岳

サキシマコブヒゲナガ 1992. 6. 1 オモト岳

チュウジョウトラ 1990. 7. 5 オモト

イシガキトガリバサビ 1996 etc.

バナナ岳からウラバナナ公園の辺りのモチ、ニッケイetc. からニッポンモモブト(多)、シイ類からサキシマトゲヒゲトラ、ヤエヤマフト、アカメガシワからヤエヤマホソバネが、ピワの細枝からリュウキュウヒメアメクロが羽脱。オモト部落からオモト岳にかけてところどころにポイントが有る。墓地の辺りはチュウジョウトラが確実に採集出来るのは石垣でもこの辺りだけと言う話だ。偶然、1990年に墓地の入り口の倒木の枝を折ると成虫が見られ、この木の枝を持ち帰ったが数はあまり多くなかった。その後も石垣に来る毎にこの辺りでチュウジョウをねらうが数はやはり多く無い。

墓地から畑の中を歩いていく辺りにカラスウリ

が見られるが、花が咲いていて枯れツルがほとんど無いが、タイワンシラホシサビを1頭羽脱させた。ここから少しオモト寄りにアカメガシワが少し有りヤエヤマホソバネとオモトピロードのポイントだ。オモトピロードは樹の幹に荒い食い後を出しているのがこれが目撃した。このポイントからオモト岳下の広場までと、嵩田林道にはカラスザンショウが多く、シロアラゲ、リュウキュウヒメアメクロ、キボシ、タイワンメダカが羽脱した。

オモト岳の中腹までは、木も高く原生林という感じだ。イシガキフト、サキシマフト、キマダラヒメヒゲナガ、ヤノヤハズ、ヒロオビオオゴマフ、ニッポンモモブト、ケルシュウムが羽脱。毎回ヤンバルアワブキを持ち帰るがムモンウスアオは姿を見せない。やはり枝では無く根元に根に入ると言う話が本当らしい。頂上はアサヒナキマダラセセリのいるゴダケザサの笹原が広がりこの下までは、バリバリ、ニッケイ、エゴノキなどが混る。バリバリは枯れ枝が少なく、Y氏がイシガキイトヒゲを1頭羽脱させたが私はアメクロが羽脱したのみ。1996年にエゴの先の無い1m余りの株を見つける。樹皮にカミキリの荒い喰いあと、木を切断するとミカンを輪切り状態に3cm位のカミキリの幼虫が見られた。穴を少しつめ持ち帰った所やはり思った通りにフトヒゲウスバとコゲチャフタモンが羽脱。同日に材箱の右側にフトヒゲウスバ、左側にコゲチャフタモンを見つけたときの興奮、仲々こんな機会は無いものだ。エゴを持ち帰った少し下辺りでW氏が樹種不明だがトゲウスバを羽脱させたとの話。四国、沖縄でもモチから羽脱させた話を伝え聞いたり、R氏の採集した枝を見せてもらいバナナ岳、嵩田林道でモチを探す、食い入っている様子は見られなかった。北側の尾根筋のモチが良いらしいが、一度採集に行きたいものだ。R氏は他にもニッケイのマツダクスベニの材も採集されていた。同じポイントとの話。尾根筋まで登るらしいので体力勝負の様子。吉原では、仲筋御嶽の林でクロヨナからフタツメイエ、ムネコブゴマフ、オキナワゴマフ、ムネモンアカトラ、タブからオガサワラチャイロ、ムネスジウ

スバ、米原キャンプ場はオオハマボウ、クロヨナが多く、ヤエヤマケシ、オキナワゴマフが多い。

ヤエヤマヤシ園の入り口のキリ、アカメガシワ混りの藪からY氏がムネマダラトラを見つけた。

7~8mから16ミリ前後の個体まで羽脱して来て模様も美しく数多く採集したいものだ。

アカメガシワからはヤエヤマホソバネが羽脱、せまいポイントだが毎回石垣に来ると採集に必ず向かいたい所だ。平久保ではカズラからタイワンツツサビ、ヘクソカズラからイシガキトガリバサビ、クサギからカスリドウボソ、ウスバ、イシガキゴマフ、他にY氏がヤエヤマフトを羽脱させている。

タマムシは名蔵のリウシジからキボシフナガタタマ(1992. 6. 3など)、アヤムネスジタマ、リュウキュウヒラタタマ、ミドリナガボソタマ、オキナワムツボシタマなど、クワガタはサキシマヒラタクワガタをクスノハエノキの樹液に来ている個体やこの木の根元の土の中から1992. 1. 2から3日に採集、N氏もアカメガシワの樹液に来ている個体を採集している。

蝶はバンナ岳からウラボンナ公園でクロコノマ、タイワンシロ、ナミエシロ、ツマベニ、オオゴマダラ等や、オモト部落から嵩田林道でツマムラサキマダラやヤエヤマムラサキ、ヤエヤマイチモンジ、タテハモドキなどが見られ採集者も時々見かけた。米原のヤエヤマヤシ園でタイワンクロボシシジミも採集、平久保ではカバタテハも飛んでいた。

吉原でも蝶は多く、アオタテハモドキ、タテハモドキ、シロチョウ類、シジミ類が多い。林の中の少し空間になっている所で、1996年1月2日、晴天に7~8m位いの木の上から下まで、幹から枝先までスジグロカバマダラがビッシリ。反対側の同じ位いの大きさの木にはリュウキュウアサギがこれと同じ状況。何年前かにテレビで中南米、たしかメキシコ辺りの山中の蝶の越冬状況の放送を見たのとスケールは全く違うが同じ様子。空間には少し蝶が飛んではいたが、混り合わないのが不思議で、カメラを持っていなかったのが残念だった。

ツマムラサキマダラ	1996. 1. 2	嵩田林道
ヤエヤマムラサキ	1996. 1. 2	〃
	1995. 1. 2	〃
タイワンクロボシ	1990. 1. 2	米原
カバタテハ	1996. 1. 2	平久保

<奄美編>

奄美へは1988年1月24, 25日、1991年1月13~15日、1994年1月1~4日、7月1~3日の4回採集に出かけた。行く毎に道路事情が良くなり空港から宇検村まで車で行く時間が半分位になった様に思われる。

本勝峠、名瀬附近から中央林道、南川林道、湯湾から福元、赤土山附近、油井岳附近で採集。

本勝峠 アカマツからコブバネゴマフ、ニイタカハナ、クサギからケプトハナ、マメガキからサツマヒメコバネ。

名瀬附近 アカマツからニイタカハナ、マツノマダラ、ミミズバイからオオシマホソハナ、マルオカホソハナ(マルオカのメインホストはアマシバと思う)、他にカギモンミドリホソトラ。7月の成虫ではニッポンモモブトが多い。

中央林道 この道は名瀬から北部山中を通り宇検村までの道で、所どころ伐採された所や、伐採後数年過ぎた所、吹き上げの尾根筋がポイントになっている。イジュ、ホルトノキ、アデクの花にはオオシマミドリ、オオシマホソハナ、ニッポンモモブト、ヨツスジホソハナ、アマミトゲヒゲトラなどが採集出来た。1996年7月4日にW氏がフェリエベニボシが頭上のシイの枝に止まった物を採集。同行者全員の目の前で採集したあ後の約束を早く果たして下さい。アマミネキには少し遅かった様子で6月中~下旬が良い様子。イスノキからオオシマドウボソ、リュウブモモブト、他にキュウシュウチビトラ、アカカワシロヘリトラetc.

南川林道 入り口の川沿いの道にアマシバが少し見られマルオカホソハナが多い。少し入った所でタブの切りカブを見つけノコで切断。ものすごいカミキリの食孔。持ち帰ったらムネスジウスバが2年に渡り羽脱。他にこの木からコウノ

ゴマフ、ニッポンモモブトが羽脱した。

宇検村から湯灣・湯灣から福元 カラスザンショウ、ニッケイ、カゴ、アマシバ、ハイノキ類、ヤンバルアワブキがあちこちに見られる。カラスザンショウからコバルトヒゲナガコバネ、シバタヒゲナガコガネ、シバタアラゲサビ。コバルトは皮のついている幹や枝、シバタアラゲサビは皮の無い枝が良い様子。カゴからアマミルリホソヒゲナガ、ヤンバルアワブキは福元に多くキイロイトヒゲのポイントとの話。アマシバからアマミアカハネ、ヒゲナガホソハナ、オオシマホソハナ、ツヤアラゲサビ、マルオカホソハナなど。ニッケイからタケウチヒゲナガコバネ、シバタヒゲナガコバネ、他にオオシマミドリ、フーケントラ、オキナワトビイロ。

赤土山附近 成虫でオオシマゴマダラ、センノキ、この峠から少し南に入った所に伐採地が有り、ここが奄美で一番良い採集地になっている様だ。

材でイスからリョウブモモブト、アマミズマル、7月のナイターでキイロミヤマ、トゲウスバ、ムネスジウスバ、キマダラヤマなど。甲虫でタイワンカブトムシ……これは奄美未記録とのこと。成虫採集ではオキナワトビイロ、ウスグロトラ、アマミトゲヒゲトラ、オオシマミドリ、ウスシロなど。他にフェリエベニボシ、ヨツオビハレギ、アマミネキ、ムモンチャイロホソバネが1995年から1996年にかけて採集されたニュースが入ってきた。

油井岳 ここはモリヤシロオビチビがマツの枯れ枝から採集でき、材からも羽脱する。食コンが小判形をしているので他の種類と見分け易い。他にウスグロホソバネ。

ヤエヤマトラは住用、新村のミカン島の附近、ミカンの枯れ木に見られた。他にキイロアラゲは海岸沿いのカラスザンショウに多いが、コバルトは少ない様子。中央林道のアカメガシワからオオハナノミが羽脱した。

蝶ではアカホシゴマダラのことを少し。同行のT氏が名瀬の拝山で7月1、2日に20頭位採集。

私も住用の新村の道路上、赤土山の伐採地、福元で夕方テリトリーを張っている個体や、赤

土山の伐採地の道路沿いの50センチ位のエノキにいる幼虫を見かけた。島のあちこちに居る様で飛び方はウスバシロの様に流れる様にゆっくり少し高所を飛ぶ様だ。それと驚いたことをもう一つ。中央林道の尾根筋で7月2日6時位いから7時位いカミキリを待っていると樹上にもものすごい数のアオバセセリが飛び廻っているのを見た。これが皆アマミネキならなと何度思ったことやら。

- アラカワシロヘリトラ 1992. 5. 5 中央林道
1991年の材より羽脱
- キュウシュウチビトラ 1994. 7. 6 第二油井岳
羽脱
- カギモンミドリホソトラ " . 6. 29 名瀬近郊
- オキナワトビイロ " . 6. 6 第二油井岳
ホスト タブ
- モリヤシロオビチビ " . 5. 21 油井岳
ホスト アカマツ
- トラフホソバネ(ウスグロホソバネ) " . 5. 31
油井岳 ホスト アカメガシワ
- ニイタカハナ " . 5. 21 名瀬市
ホスト アカマツ
- リョウブモモブトヒメコバネ " . 5. 11 第二油
井岳 ホスト イス
- マルオカホソハナ " . 5. 12 名瀬市
ホスト ミミズバイ
- フーケントラ " . 4. 25 福元 羽脱
ホスト カラスザンショウ
- コバルト " . 4. 13 福元 羽脱
ホスト カラスザンショウ
- シバタアラゲサビ " . 4. 13 福元 羽脱
ホスト カラスザンショウ
- アマミルリホソヒゲナガ 1991. 7. 10 赤土山
羽脱 ホスト カゴ
- 他にタイワンクリイロシロホシ、コブスジサビ、ヨツボシシラホシサビ、リュウキュウルリボシ
etc. 約40種余りが羽脱。
- 同行したN. Y. T. R. W. I氏などの記録も勝手に載せましたが御容赦を。

兵庫県相生市における蝶類の記録より

唐土 洋一

草原性蝶類の衰退がいちじるしい昨今、南方系蝶類の分布拡大には目をみはるものがある。モンキアゲハ、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、クロコノマチョウ、そしてイシガケチョウと続く。更に、アオスジアゲハ、ホシミスジといったところも増えているようだ。反面、ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモンといったヒョウモン類の仲間に出会う機会は少なくなってしまった。

岡山県ではナガサキアゲハの台頭で、クロアゲハが少なくなったと言われている。いづれ兵庫県でも同じような現象が生じるかもしれない。

三濃山一帯にしか記録のなかったクロヒカゲモドキも採集されたという噂はないし、クロシジミ、シルビアシジミも同様である。アカシジミ、ウラナミアカシジミ等のゼフィルスもめっきり減ってしまった。これまで、相生市より記録されている蝶類は8科、96種(うち迷蝶4種を含む)にのぼり、日本産(土着種)232種として約4割が生息していたことになる。

<内 訳>

*印を付したものは自宅に飛んできた蝶を示す。末尾の指数(1~5)は採りによる自然度調査(兵庫県)資料によるもので、参考として付した。

1. アゲハチョウ科: 10種

- * 1) ジャコウアゲハ (3)
- * 2) アオスジアゲハ (1)
- * 3) キアゲハ (2)
- * 4) ナミアゲハ (1)
- * 5) モンキアゲハ (3)
- * 6) クロアゲハ (3)
- 7) オナガアゲハ (4)
- * 8) ナガサキアゲハ (2)
- * 9) カラスアゲハ (4)
- * 10) ミヤマカラスアゲハ (4)

注) ギフチョウについては、過去に何回か報告されているが確実なデータ等が残っていないし、かつ、放蝶等の疑いもあるので省いた。

2. シロチョウ科: 8種

- 1) モンキチョウ (2)
- 2) ツマグロキチョウ (4)
- * 3) キチョウ (1)
- 4) スジボソヤマキチョウ (5)
- 5) エソスジグロシロチョウ (5)
- * 6) スジグロシロチョウ (3)
- * 7) モンシロチョウ (1)
- * 8) ツマキチョウ (3)

3. シジミチョウ科: 24種

- * 1) ムラサキシジミ (2)
- 2) ムラサキツバメ (5)
- 3) ウラゴマダラシジミ (4)
- 4) ウラキンシジミ (5)
- 5) アカシジミ (4)
- 6) ウラナミアカシジミ (4)
- 7) ウラミスジシジミ (4)
- 8) ミズイロオナガシジミ (4)
- 9) ウスイロオナガシジミ (4)
- 10) ミドリシジミ (4)
- 11) ウラジロミドリシジミ (5)
- 12) オオミドリシジミ (4)
- 13) ヒロオビミドリシジミ (5)
- * 14) トラフシジミ (4)
- 15) コツバメ (4)
- * 16) ベニシジミ (2)
- 17) ゴイシジミ (4)
- 18) クロシジミ (5)
- 19) ウラナミシジミ (2)
- * 20) ヤマトシジミ (1)
- 21) シルビアシジミ (5)
- * 22) ルリシジミ (2)

*23) ツバメシジミ (2)

*24) ウラギンシジミ (2)

4. テングチョウ科: 1種

* 1) テングチョウ (3)

5. マダラチョウ科: 1種

1) アサギマダラ (4)

6. タテハチョウ科: 23種

1) ウラギンスジヒョウモン (4)

2) オオウラギンスジヒョウモン (4)

* 3) メスグロヒョウモン (4)

4) クモガタヒョウモン (4)

5) ミドリヒョウモン (4)

6) ウラギンヒョウモン (4)

* 7) ツマグロヒョウモン (3)

8) アサマイチモンジ (4)

* 9) イチモンジチョウ (4)

10) コミスジ (3)

11) ミスジチョウ (5)

*12) ホシミスジ (2)

13) サカハチチョウ (4)

*14) キタテハ (3)

*15) ヒオドシチョウ (4)

*16) ルリタテハ (3)

17) ヒメアカタテハ (2)

*18) アカタテハ (3)

19) イシガケチョウ (4)

20) スミナガシ (4)

*21) コムラサキ (2)

*22) ゴマダラチョウ (2)

23) オオムラサキ (5)

7. ジャノメチョウ科: 13種

* 1) ヒメウラナミジャノメ (3)

* 2) ウラナミジャノメ (5)

* 3) ジャノメチョウ (4)

4) ヒメキマダラヒカゲ (4)

1981. 7. 19 1♂ 矢野町三濃山 Col. 入江照夫

5) キマダラモドキ (5)

1980. 8. 1 1♀ 矢野町三濃山 Col. 唐土洋一

6) クロヒカゲ (4)

* 7) ヒカゲチョウ (4)

8) クロヒカゲモドキ (5)

* 9) サトキマダラヒカゲ (4)

*10) ヒメジャノメ (3)

*11) コジャノメ (4)

12) ヒメヒカゲ (5)

13) クロコノマチョウ (4)

注) ヤマキマダラヒカゲの記録もあるが、未確認につき省いた。

8. セセリチョウ科: 12種

1) ミヤマセセリ (4)

* 2) ダイミョウセセリ (4)

3) アオバセセリ (4)

* 4) コチャバネセセリ (4)

5) ヘリグロチャバネセセリ

6) ヒメキマダラセセリ (4)

* 7) キマダラセセリ (4)

* 8) ホソバセセリ (4)

9) オオチャバネセセリ (4)

10) ミヤマチャバネセセリ (5)

*11) チャバネセセリ (3)

*12) イチモンジセセリ (1)

9. 迷蝶: 4種

1) メスアカムラサキ

1966. 8. 25 1♀ 川原町 Col. 石井満補

2) リュウキュウムラサキ

1967. 11. 3 1♂ 川原町 Col. 松尾一

3) ヤエヤマムラサキ

1971. 8. 12 1♂ 川原町 Col. 石井満補

4) ウスイロコノマチョウ

19XX. XX. XX 1? 相生(鍋浜) Col. 浜中義則

<参 考>

近隣地区において、未発見の蝶

1) ギフチョウ … 揖保川町

2) ウスパアゲハ … 新宮町

3) キマダラルリツバメ … 龍野市

4) クロツバメシジミ … 上郡町/赤穂市/龍

野市

5) ホシチャバネセセリ … 上郡町

2. 兵庫県版レッドデータブックによる貴重性評価区分

Aランク…日本版レッドデータブックの絶滅危惧種に相当

兵庫県内において絶滅の危機に瀕している種等、緊急の保全対策、厳重な保全対策の必要な種

Bランク…日本版レッドデータブックの危急種に相当

兵庫県内において絶滅の危険が増大している種等、極力、生息環境、自生地等の保全が必要な種

Cランク…日本版レッドデータブックの希少種に相当

特殊な環境に生息・生育する種、個体数の極めて少ない種、分布域が極限している種等、兵庫県内において存続基盤が脆弱な種

要注目種…最近減少の著しい種、優れた自然環境の指標となる種、特殊な分布をする種等の貴重種に準ずる種

今みられない…兵庫県内での確認記録、標本がある等、かつては生息・生育していたと考えられるが、現在は見られなくなり、生息・生育の可能性がないと考えられる種

地域限定貴重種…兵庫県全域で見ると貴重とはいえないが、兵庫県内の特定の地域においてはA, B, C, 要注目のいずれかのランクに該当する程度の貴重性を有する種

未確認貴重種…兵庫県内での生息・生育の可能性が相当あるが、現在のところ確認されていない種で、県内で確認されればA, B, C, 要注目種のいずれかにランクづけされる種

要調査種…本県での生息・生育の実態がほとんどわからないこと等により、現在の知見では貴重性の評価ができないが、今後の調査によっては貴重種となる可能性のある種

相生市に分布する蝶類を上記に基づき分類してみると、

Aランク(絶滅危惧種) 該当なし

Bランク(危急種) ムラサキツバメ・ヒロオビミドリシジミ・オオムラサキ・キマダラモドキ・クロヒカゲモドキの5種

Cランク(希少種) シルビアシジミ・ミスジチョウ・ヒメヒカゲ・ヘリグロチャバネセセリの4種

要注目種 スジボソヤマキチョウ・エゾスジグロシロチョウ・ウラキンシジミ・ウラナミジャノメ・ミヤマチャバネセセリの5種

上記以外 78種 + 迷蝶(4種)

3. 最近、観察記録がないものとしては

ヒメキマダラヒカゲ、キマダラモドキ、クロヒカゲモドキ、ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ヒロオビミドリシジミ、ウスイロオナガシジミ、ウラジロミドリシジミ、クロシジミ、シルビアシジミの10種である。

兵庫県版レッドデータブックに記載のある蝶としては、キマダラモドキ、クロヒカゲモドキ、ヒロオビミドリシジミがランクB、シルビアシジミがランクCといったところであるが、減少している蝶等についての評価は国や県、地域レベルにより相違してくるので、今後はより詳しい分布調査により地域限定貴重種の枠を広げていく必要がある。

蝶類が減少していった原因としては、

①山村の過疎化により、田畑等が放置され山林の手入れも滞り、下草として生えていた食草類は衰退していった。…キマダラモドキ、クロヒカゲモドキ、ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモン

②ナラガシワ等の樹木は雑木として伐採され跡地は放置されるか、植林されてもスギ、ヒノキである。…ヒロオビミドリシジミ、ウラジロミドリシジミ

③伐採からまぬがれたとしても、樹木が高木化し蝶の産卵に適さない状態になってきた。…ヒロ

オビミドリシジミ、クロシジミ

④ほ場整備工事により、田畑の畦に生えていた植物に変化が生じた。……シルビアシジミ

⑤生息環境が開発等で変わってしまった。……ヒロオビミドリシジミ、ウスヒロオナガシジミ、クロシジミ

⑥要因不明……ヒメキマダラヒカゲ

以上の6項目が考えられるが、反面、休耕田の増加により食草が豊富になりモンキチョウ、キアゲハ等は増えている。キマダラモドキ、ヒメキマダラヒカゲは過去に1例のみの記録であり、偶産的要素もありうる。

4. 勢力を拡大してきた蝶

①文献によれば、モンキアゲハは1900年～1906年にかけて非常に珍蝶であったそうで、気候の変遷で県下全土に分布するようになったとある。

1950年代、相生中学校の裏山で毎夏1～2頭飛翔しているのを観察出来たが、ネットインまでしばらく時間がかかったと記憶している。

②ツマグロヒョウモンも、秋に1～2頭見ることが出来たという程度で、年によっては、全くお目にかかれなかったこともあった。最近では、幼虫越冬も確認され、街路のスミレからも幼虫が見出される。

③クロコノマチョウは、1971年頃から採集され始め、1990年に入って定着が確認された。今では、卵～成虫までの全ステージが観察出来る。

④イシガケチョウも、1971年頃より採集されており、現時点では定着している可能性もある。

⑤ムラサキツバメも、公園、墓地等に植栽されたマテバシイに偶産したことがあるが、定着までには至っていない(注：市域のシリブカガシの自生地には、1976年に発見されてから今日まで生息が確認されている)。

⑥アオスジアゲハは食樹であるクスノキ、タブノキ等が街路、公園等に多く用いられ、それと共に数多く見られるようになった。

⑦ホシミスジも山地性で産地が限られていたが、

栽培種であるユキヤナギ、コデマリ等が人家の庭に植えられることが多くなり、住宅地の中でもよく見られるようになった。

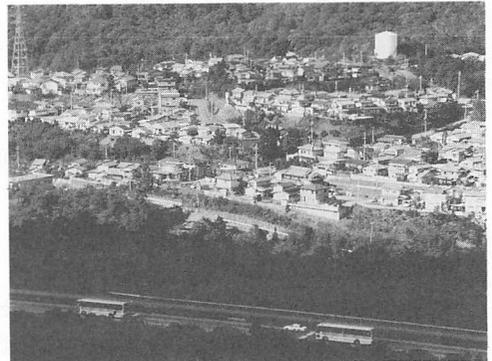
5. 自宅の庭に飛んできた蝶

私の住んでいるところは相生市青葉台、約400戸ばかりの住宅地です。当初は、環境もよくヒメヒカゲ(危急種)の発生地もありましたが、山陽自動車道が開通したため生息地も破壊され、今では騒音に悩まされるといった状況です。それでも、自宅の庭に蝶の好む食樹(草)を植えたところ、現在までに44種の蝶が観察出来たことは驚きです。更に、蜜源となる草花等を植えておくことにより以上の蝶類が観察出来るのではなかろうか。

6. 植えている食樹・食草……(鉢植え)も含む。

食樹：エノキ、エゾエノキ、コバノクロウメモドキ、キビノクロウメモドキ、アワブキ、アベマキ、クヌギ、カシワ、(ナラカシワ)、(ミズナラ)、(ツクバネガシ)、シリブカガシ、(マテバシイ)、(シラカシ)、アカガシ、ウラジロガシ、イチイガシ、(アラカシ)、ウバメガシ、(コナラ)、ブナ、イロハカエデ、イボタノキ、カラタチ、サンショウ、フユザンショウ、カラスザンショウ、ウンシュウミカン、スダチ、キハダ、コクサギ、ユキヤナギ、(イヌビワ)

食草：ウマノスズクサ、ミヤコアオイ、ヒメカンアオイ、サンインカンアオイ、(コシノカンア)



相生市青葉台の環境
(1996. 11. 3 撮影)

オイ)、(サンヨウアオイ)、スズカカンアオイ、(カントウカンアオイ)、タマノカンアオイ、(ランヨウアオイ)、ウスバサイシン、フタバアオイ、ミツバ、キジョラン、スマレ、アリアケスマレ、タチツボスマレ、ピオラ・パピレオナセア(北米原産)、ホトトギス、ジュズダマ、ヤマノイモ

7. ここ数年、継続的に幼虫が発見出来るものとしては、モンキアゲハ、ナガサキアゲハ、キアゲハ、アゲハ、クロアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、ゴマダラチョウ、テングチョウといったところです。ホシミスジは近所のユキヤナギより5月・7月・9月に発生し、自宅に飛んでくる。今年始めて自宅のユキヤナギに蛹がついていたと家内が見つけた(7月17日に1♂が羽化した)。ジャコウアゲハは定着し5月・7月・9月に家のまわりを優雅に飛翔している。最近ではキハダよりルリシジミが、自生しているカタバミからはヤマトシジミも発生している。

8. 今年(1996年度)の珍事

ギフチョウが自然交尾し、卵を産んだことです。今年は天候が不順で発生がダラダラと続いた。やむなく蛹のいくつかを放置しておいたところ、羽化したものが交尾(1ペア)していたと家内より聞いた。4月17日、庭のヒメカンアオイに産卵しているのを目撃。念のため、庭のカンアオイ類を調べてみたところ、何と123卵もみつかった。

(内訳)

ヒメカンアオイ(地植え)	1 卵塊 5卵
	2 卵塊 8卵
	3 卵塊 10卵
	4 卵塊 10卵
	5 卵塊 15卵
ミヤコアオイ (地植え)	1 卵塊 10卵
	2 卵塊 8卵
	3 卵塊 8卵
	4 卵塊 12卵
(鉢植え)	5 卵塊 10卵

サンインカンアオイ(鉢植え) 1 卵塊 10卵
2 卵塊 9卵

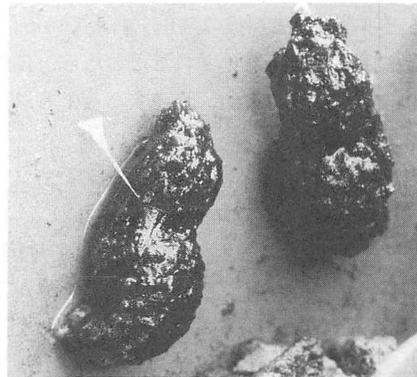
スズカカンアオイ(鉢植え) 1 卵塊 8卵

どういう訳か、コシノカンアオイ、タマノカンアオイ、カントウカンアオイ、ウスバサイシン、フタバアオイには産みつけられていなかった。

6月2日、何気なく庭のタマノカンアオイをみたところ、葉がなくなっている。

あれ、水をやるのを忘れて枯れてしまった？あわてて、周囲のカンアオイ類(ヒメカンアオイ、スズカカンアオイ、タマノカンアオイ等)をみてみると無い、殆ど無いではないか。残っているミヤコアオイをかき分けてみると、終齢幼虫6頭が発見出来た。庭のあっちこちを探したところ、計10頭の終齢幼虫を発見したので、鉢および発泡スチロール製の箱に植えているヒメカンアオイに移して、蛹化させた。

現在9頭が蛹で越年中、自然状態で過ごせるものか蛹化時の状態のまま放置している。蛹化は地上部スレスレ、上向きで鉢および発泡スチロールの壁に取りついていた。



ギフチョウの蛹
〈 1996. 12. 7 撮影 〉

あとがき

「私が蝶採集を始めたのは、中学2年生の夏休みのときであった。そのとき採集した蝶の数は確か30種だったと記憶している。そして、あくる年より採集を続行し、始めて接触する蝶の姿に歓喜

したものである。蝶を求めて山野を駆けめぐりつつあるうちに、自ずから山歩きの方へと魅力が転嫁していった。それと同時に家庭の事情等も含め蝶採集から段々と離れて行き、ときおり山歩きの途中で可憐な彼女等の姿をカメラに収めたりする方向へと移行していった。

1976年4月ひさびさに多可郡黒田庄町へギフチョウの観察に行く機会を得、数年振りに彼女等と対面した。彼女等も歓迎の意を示してくれたのか念願の野外での撮影にも成功し何ともいえない気持ちであった。ところで、昨今の農業散布、森林伐採、道路、ダム工事および宅地造成等による自然環境の激変により、昆虫相もかなり変化してきた。我々蝶類愛好家は大自然の驚異に感嘆するのみでなく、生命の畏敬を尊び、自らの手で自然を破壊するようなことは厳に慎み、蝶類の保護に努めるよう努力したいものである」……(1976年4月に姫路昆虫同好会発足時に寄稿したものより引用)

20年を経た今日、周囲を取り囲む自然環境には厳しいものがある。一部のナチュラリストは昆虫類が絶滅、減少するのは“採集庄”によること大であると叫び、昆虫採集の禁止を唱えている。今、仮に昆虫採集が全面禁止されたとしたら、自然界に昆虫は帰ってき、増加、繁殖するとでも思っているのだろうか。

特定地域の特定昆虫(例えば、ギフチョウ〈危急種〉)は、確かにコレクターに狙われている。しかし、それ以上に国土の環境破壊(宅地造成、道路工事等)の方が早く、余りにも早く進んで行き、地域の固有種を絶滅させてきた。

昆虫愛好家の数はたかがしれている。そして悪質なコレクターは極ほんの一握りであり、こういった傾向はどの世界にでもあることではなかろうか。

欲する昆虫の数は毎年減って行く傾向にあるが、すべてが採集庄で減っている訳ではない。危急種とされているギフチョウは開発により絶滅、あるいはスギ、ヒノキ等の植林により減少への道をたどってきた。たまたまそういった生き残りの地に

おいてネットを振ると白い目で見られるというのが今日の姿ではなかろうか。また、一部の地域では、開発における贖罪の意味合いからか、保護という名でヒメカンアオイを移植し、新たな生息地作りに挑戦しているところもある。ひどいになるとギフチョウ可愛さのあまりか、幼虫または蛹を各地のヒメカンアオイ生育地にバラマキ廻り、遺伝子汚染……生態系の破壊をしていることにも気づかず得意気になっているナチュラリストもいると聞く。岡山県しかり、兵庫県でも宝塚より東条湖辺りまでの中国自動車道沿線及び加古川産のギフチョウは放蝶による影響を受けているとの噂もある。

「捕らないで観察しましょう」といわれるが、観察するよりも捕ることにより昆虫に親しむ度合いも増し、愛着もわく。俗に、アゲハチョウと呼ばれているものには10数種がいる。あれはクロアゲハ、そしてナミアゲハも、いやキアゲハかなといったふうに正しい名前で呼んでやると蝶たちも喜んでいるのではなかろうか。今年の姫路市美術展で「ジャコウアゲハ」という題の写真が展示されていた。よくみるとなんと蝶はシロオビアゲハではないか。ジャコウアゲハと言えば、平成元年に「姫路市の蝶」に指定されている。かかる場所でかかる過ちに気づかずに平気で展示している無神経さに、あきれやら情けない思いがしたのは自分一人だけだったのだろうか。

補 足：

多可郡黒田庄町の生息地は開発等で様変わりし、一部は東はりま日時計の丘公園となっている。かつての、ギフチョウ生息地辺りは「ギフチョウの森」として公園内に一部残したということであるが、ほんの申し訳程度でとても「ギフチョウの森」とはいえない。

<参考資料>

- 1) 橋本一彦(1957) 相生市とその付近の蝶目録 吸蜜(3):6-7
- 2) 八木典世(1960) 相生市付近の蝶類一覧 自刊 1-8

- 3) 岩村 巖(1965) 西播におけるヒロオビミドリシジミの分布に関して 兵庫生物 5(1):24-25
- 4) 唐土洋一(1966) 相生市周辺におけるセセリチョウ2題の採集例 昆虫と自然 1(8):12
- 5) 米村和繁(1966) 相生市におけるムラサキツバメの採集例 昆虫と自然 1(8):12
- 6) 唐土洋一(1966) 相生市におけるホシミスジについて 昆虫と自然 1(9):32
- 7) 唐土洋一(1966) 相生市におけるゴイシジミの知見 昆虫と自然 1(9):32
- 8) 唐土洋一(1967) 相生市周辺におけるダイセンシジミの新産地 昆虫と自然 1(8):12
- 9) 唐土洋一(1967) 兵庫県赤穂郡および竜野市におけるクロツバメシジミの採集例 昆虫と自然 1(8):12
- 10) 岩村 巖(1968) 西播の蝶分布資料(5) 赤相の蝶類 兵庫生物 5(5):386-397
- 11) 唐土洋一(1968) 三濃山のミヤマカラスアゲハ みのう 1(1):9
- 12) 山本広一(1971) 兵庫県の蝶相 月刊むし (3):2-19
- 13) 広畑政巳(1977) ウラミスジシジミとその食樹に関する知見 てんとうむし (4):3
- 14) 高田忠彦他(1978) 兵庫県産蝶類調査報告書 [I] MDK NEWS 28(78):1-69
- 15) 米村和繁(1979) 相生市の迷蝶 てんとうむし (5):14
- 16) 佐々木薫(1979) ヤナギを食べたモンキアゲハ ひろおび (4):20
- 17) 岩村 巖(1979) 兵庫県西部のヒロオビミドリシジミの分布に関して ひろおび (4):23-24
- 18) 川崎悟良(1979) 相生市の蝶 ひろおび (4):24-25
- 19) 広畑政巳(1980) 兵庫県のシルビアシジミ てんとうむし (6):5-9
- 20) 米村和繁(1980) 相生市のナガサキアゲハについて てんとうむし (6):22
- 21) 唐土洋一(1980) 三濃山へクロヒカゲモドキをたずねて てんとうむし (6):25
- 22) 唐土洋一(1980) 分布を広げるナガサキアゲハ てんとうむし (6):33
- 23) 広畑政巳(1980) 兵庫県のナガサキアゲハ ひろおび (5):10-18
- 24) 広畑政巳(1980) エゾスジグロシロチョウの採集記録数例 ひろおび (5):22
- 25) 尾崎 勇(1980) 兵庫県の蝶(I) 千種川水系の蝶相 ひろおび (5):24-30
- 26) 広畑政巳(1981) 兵庫県に於けるウラナミジヤノメの分布と生活史 てんとうむし (7):1-5
- 27) 唐土洋一(1981) カラスザンショウを食べるキアゲハ てんとうむし (7):24
- 28) 広畑政巳(1981) 兵庫県産蝶類分布資料(1) てんとうむし (7):30-34
- 29) 広畑政巳(1982) 兵庫県産蝶類分布資料(2) てんとうむし (8):30-40
- 30) 木村三郎(1982) 兵庫県におけるヒメヒカゲについて てんとうむし (8):46-47
- 31) 唐土洋一(1982) 西播のミヤマカラスアゲハ採集例 てんとうむし (8):49
- 32) 広畑政巳(1982) 兵庫県に於けるヒメキマダラヒカゲの分布と化性について ひろおび (6):31-34
- 33) 川崎悟良(1982) クロコノマチョウを相生市で採集 ひろおび (6):37
- 34) 苦木隆幸(1982) 夏期採集大会 夏の三濃山で行う ひろおび (6):39
- 35) 広畑政巳(1984) 兵庫県産蝶類分布資料(3) てんとうむし (9):18-24
- 36) 近藤伸一(1984) 兵庫県におけるヒメアカタテハについて ひろおび (7):1-14
- 37) 広畑政巳(1984) ナガサキアゲハ雌の黒化型 ひろおび (7):15
- 38) 広畑政巳(1987) 兵庫県産蝶類分布資料(4) てんとうむし (10):11-22
- 39) 広畑政巳・近藤伸一(1994) 兵庫県産蝶類分布資料(6) 姫昆サロンニュース100号記念特別号「遊蟲千年」:1-12
- 40) 唐土洋一(1994) 相生市のクロコノマチョウ(その1) 姫昆サロンニュース100号記念特別号「遊蟲千年」:30

- 41) 唐土洋一(1994) 兵庫県南西部におけるムラサキツバメの現況(1) 姫昆サロンニュース100号記念 特別号「遊蟲千年」:32-35
- 42) 唐土洋一(1995) 兵庫県南西部におけるムラサキツバメの現況(2) 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:3
- 43) 唐土洋一(1995) 相生市のクロコノマチョウ(その2) 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:35-36
- 44) 大貝秀雄(1995) 赤相地区の蝶3種の記録 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:60-61
- 45) 広畑政巳(1995) 兵庫県に於けるアサギマダラの越冬の記録 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:118
- 46) 広畑政巳(1995) 県下に於けるオオムラサキの新産地 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:119
- 47) 唐土洋一(1995) 兵庫県南西部におけるムラサキツバメの現況(1)の補足と訂正 姫昆結成20周年記念 てんとうむし特別号「遊蟲千年」:124-125
- 48) 広畑政巳(1996) 兵庫県のスジボソヤマキチョウ きべりはむし 24(1):14-18
- 49) 奥本大三郎(1988) 当世蝶類憐みの令を憂う 中央公論 (1235):311-317
- 50) 浜口哲一(1991) 昆虫採集復権の動きに思う 日本自然保護協会 (354):4-5
- 51) 小岩屋敏(1992) 昆虫採集は本当にいけないことか 日本自然保護協会 (357):8-9
- 52) 岩村 巖(1969) 相生市三濃山のチョウ 続・兵庫県の自然 のじぎく文庫 神戸
- 53) 日浦 勇(1973) 海をわたる蝶 蒼樹書房 東京
- 54) 神戸新聞社学芸部(1974) 兵庫探検・自然編 神戸新聞社 神戸
- 55) 室井 緯(1974) 公害・兵庫県の生物 道明武彦 神戸
- 56) 日浦 勇(1978) 蝶のきた道 蒼樹書房 東京
- 57) 日浦 勇(1982) チョウはどのように生きているか 大阪市立自然史博物館 大阪
- 58) 宮武頼夫(1985) 大阪市内の蝶 大阪市立自然史博物館 大阪
- 59) 浅沼昌平他(1986) 岡山県のチョウ 倉敷市立自然史博物館 倉敷
- 60) 西多摩昆虫同好会(1991) 東京都の蝶 けやき出版 東京
- 61) 矢田 脩 他(1993) 日本産蝶類の衰亡と保護・第2集 日本鱗翅学会/日本自然保護協会 広島
- 62) 兵庫県生活文化部(1995) 兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドデータブック— 兵庫県環境科学技術センター 神戸
- 63) 中山周平他(1983) 日本のチョウ 小学館 東京
- 64) 守山 弘(1988) 自然を守るとはどういうことか 農山漁村文化協会 東京
- 65) 石井 実 他(1993) 里山の自然をまもる 築地書館 東京
- 66) 朝比奈正二郎 他(1993) 滅びゆく日本の昆虫50種 築地書館 東京
- 67) 難波通孝(1994) "1994"イシガケチョウの飛翔 自刊 岡山
- 68) 難波通孝(1996) 岡山の蝶 山陽新聞社 岡山
- 69) 兵庫県生活文化部(1996) チョウによる自然度調査 兵庫県 神戸
- 70) 近藤伸一(1996) 兵庫県で見られるチョウについて(前編) 兵庫県環境政策課/林務課 (34):4-5
- 71) 近藤伸一(1996) 兵庫県で見られるチョウについて(中編) 兵庫県環境政策課/林務課 (35):4
- 72) 神戸新聞 1990. 8. 21 付 '南国の舞姫、相生に定着'
- 73) 神戸新聞 1994. 8. 18 付 'チョウさえすめぬ国ニッポン 生息地域や個体数激減'
- 74) 神戸新聞 1994. 10. 18 付 'チョウの分布、北へ広がる'

西播磨地方におけるキリガ類の採集記録

姫路市立飾磨高等学校 稲田 和久

古い記録になるが、1981～1985年の早春を中心に採集したキリガ類を報告する。キリガ類はヤガ科に属し晩秋に羽化し早春に活動するグループである。活動期が低温期のこともあり報告例が少ないが、筆者自身も蛾に関する知見が少ないので、記録のみの報告を行う。採集はおもに糖蜜採集により行い、一部灯火採集も行った。糖蜜採集は、日暮れ前に樹木の幹などに糖蜜を塗り、日暮れ後1時間ほどたってから見回り吸蜜に集まった蛾を採集した。採集した標本は筆者が保存している。

1. ホソバキリガ *Orthosia augustipennis*

1983. III. 5	御津町室津赤崎	1♀
1983. III. 9	御津町室津赤崎	1♀
1983. III. 17	御津町稲富	2♀
1983. III. 26	姫路市白国広峰神社	1♂
1985. II. 25	御津町室津赤崎	5♂1♀

2. クロテンキリガ *Orthosia fausta*

1981. III. 16	御津町室津賀茂神社	1♂
1981. III. 17	御津町稲富	1♀
1983. III. 19	香寺町中村	4♂3♀
1983. III. 24	相生市瓜生三濃山	1♀
1983. III. 26	姫路市白国広峰神社	2♀
1984. III. 18	姫路市豊富町神谷	1♂

3. クロミミキリガ *Orthosia lizetta*

1982. IV. 27	波賀町引原ダム	1♀
1983. III. 19	香寺町中村	1♀
1983. III. 26	姫路市白国広峰神社	2♀
1985. II. 25	御津町室津赤崎	1♂
1985. III. 22	御津町室津赤崎	3♀

4. ブナキリガ *Orthosia paromoea*

1985. III. 5	御津町室津赤崎	5♀
5. シロヘリキリガ <i>Orthosia limbata</i>		
1983. III. 24	相生市瓜生三濃山	1♀
1983. III. 26	姫路市白国広峰神社	1♀
1983. IV. 4	波賀町引原ダム	1♂
1983. IV. 27	波賀町引原ダム	1♀
1985. III. 5	御津町室津赤崎	1♂3♀

6. スモモキリガ *Orthosia munda*

1982. IV. 18	波賀町引原ダム	1ex.
1983. II. 17	御津町室津赤崎	1♂
1983. III. 5	御津町室津赤崎	1♂
1983. III. 9	御津町室津赤崎	1♂
1983. III. 17	御津町稲富	1♀
1983. IV. 4	波賀町引原ダム	2♀
1983. IV. 27	波賀町引原ダム	1♂

7. チャイロキリガ *Orthosia odiosa*

1982. IV. 18	波賀町引原ダム	1ex.
1983. IV. 4	波賀町引原ダム	1♀

8. カシワキリガ *Orthosia gothica*

1981. III. 12	御津町室津賀茂神社	1♂
1983. III. 17	御津町稲富	1♀

9. アカバキリガ *Orthosia carnipennis*

1982. III. 16	御津町室津賀茂神社	1♂
1982. IV. 18	波賀町引原ダム	1♂
1982. IV. 27	波賀町引原ダム	1♂1♀
1983. IV. 4	波賀町引原ダム	1♂
1985. III. 22	御津町室津赤崎	1♂3♀

10. スギタニキリガ *Perigrapha hoenei*

1983. III. 19	香寺町中村	1♀
---------------	-------	----

11. キンイロキリガ *Clavipalpus aurariae*
 1981. V. 22 波賀町引原ダム 1♀
 1981. VI. 7 波賀町引原ダム 1♀
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 1♀
 1983. IV. 4 波賀町引原ダム 1♂2♀
12. ケンモンキリガ *Egria saxea*
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 1♂1♀
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 2exs.
 1982. IV. 27 波賀町引原ダム 2♂2♀
 1983. V. 4 波賀町引原ダム 2♀
13. マツキリガ *Panolis japonica*
 1981. V. 2 波賀町引原ダム 1♂
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 1♂
 1983. IV. 4 波賀町引原ダム 1♂
14. キバラモクメキリガ *Xylena formosa*
 1981. III. 12 御津町室津賀茂神社 1♀
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 3exs.
 1983. III. 3 御津町室津賀茂神社 2♀
 1983. III. 5 御津町室津赤崎 2♀
 1983. III. 17 御津町稲富 1♀
 1983. III. 26 姫路市白国広峰神社 1♂
 1984. II. 26 御津町稲富 1♂
15. アヤモクメキリガ *Xylena fumosa*
 1984. II. 26 御津町稲富 5♂1♀
 1984. III. 18 姫路市豊富町神谷 1♀
16. ハネナガモクメキリガ *Xylena niponica*
 1982. III. 10 御津町室津赤崎 1♂
 1983. II. 17 御津町室津赤崎 2♂
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 1♂
 1983. III. 17 御津町稲富 4♀
 1983. III. 19 香寺町中村 1♂
 1983. III. 24 相生市瓜生三濃山 1♀
 1983. III. 26 姫路市白国広峰神社 1♀
17. ウスアオキリガ *Lithophane venusta*
 1982. IV. 18 波賀町引原ダム 1♂
18. カシワキボシキリガ *Lithophane pruinosa*
 1981. III. 16 御津町室津賀茂神社 1♂
 1983. III. 5 御津町室津赤崎 2♀
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 1♂2♀
 1983. III. 24 相生市瓜生三濃山 1♀
19. ハンノキリガ *Lithophane ustulata*
 1981. III. 12 御津町室津賀茂神社 1ex.
 1981. III. 16 御津町室津賀茂神社 5exs.
 1982. III. 14 御津町室津賀茂神社 1♀
 1983. III. 5 御津町室津赤崎 1♀
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 2♀
 1983. III. 17 御津町稲富 1♀
 1983. IV. 4 波賀町引原ダム 1♀
20. ミツボシキリガ *Eupsilia tripunctata*
 1984. II. 26 御津町稲富 1♂
21. ヨスジノコメキリガ *Eupsilia quadrilinea*
 1982. III. 16 御津町室津賀茂神社 1♀
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 3♀
 1983. III. 12 御津町室津赤崎 1♀
 1983. III. 17 御津町稲富 1♀
 1984. II. 4 御津町稲富 1♂
 1984. III. 3 御津町室津赤崎 1♀
22. ヨスジキリガ *Eupsilia strigifera*
 1981. IX. 22 波賀町引原ダム 2♂
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 3♀
23. クロチャマダラキリガ *Rhynchaglaea fuscipennis*
 1983. III. 3 御津町室津賀茂神社 3♂2♀
 1983. III. 5 御津町室津赤崎 3♂2♀
 1983. III. 9 御津町室津赤崎 2♂2♀

- | | | | | | |
|---|-----------|------|---|-----------|--------|
| 1984. III. 3 | 御津町室津赤崎 | 2♂4♀ | 1984. III. 18 | 姫路市豊富町神谷 | 5♂ |
| 1984. III. 18 | 姫路市豊富町神谷 | 1♂ | | | |
| 1985. III. 5 | 御津町室津赤崎 | 1♀ | | | |
| 24. チャマダラキリガ <i>Rhynchaglaea scitula</i> | | | | | |
| 1983. III. 3 | 御津町室津賀茂神社 | 1♂ | 30. カシワオビキリガ <i>Conistra aradescens</i> | | |
| 1983. III. 5 | 御津町室津赤崎 | 1♂ | 1984. II. 26 | 御津町稲富 | 2♂ |
| 1983. III. 17 | 御津町稲富 | 2♀ | | | |
| 1983. III. 26 | 姫路市白国広峰神社 | 2♂ | 31. ウスミモンキリガ <i>Eupsilia contracta</i> | | |
| 1984. II. 26 | 御津町稲富 | 1♀ | 1983. III. 26 | 姫路市白国広峰神社 | 1♀ |
| 1984. III. 18 | 姫路市豊富町神谷 | 4♂ | 1985. III. 5 | 御津町室津赤崎 | 1♀ |
| 25. スギタニモンキリガ <i>Sugitania lepida</i> | | | | | |
| 1983. III. 26 | 姫路市白国広峰神社 | 1♂2♀ | 32. ミスジキリガ <i>Jodia sericea</i> | | |
| 1984. II. 4 | 御津町稲富 | 1♀ | 1982. III. 10 | 御津町室津賀茂神社 | 1♀ |
| 26. フサヒゲオビキリガ <i>Agrochola evelina</i> | | | | | |
| 1983. III. 5 | 御津町室津赤崎 | 2♀ | 1983. III. 9 | 御津町室津赤崎 | 4♀ |
| 1983. III. 9 | 御津町室津赤崎 | 2♀ | 33. ヤクシマキリガ <i>Mesorhynchaglaea pacifica</i> | | |
| 1983. III. 17 | 御津町稲富 | 1♀ | 1981. III. 12 | 御津町室津賀茂神社 | 3exs. |
| 1984. II. 26 | 御津町稲富 | 1♂ | 1981. III. 16 | 御津町室津賀茂神社 | 25exs. |
| 1984. III. 3 | 御津町室津赤崎 | 5♀ | 1982. III. 14 | 御津町室津賀茂神社 | 1♀ |
| 27. ツチイロキリガ <i>Agrochola vnlpecula</i> | | | | | |
| 1981. X. 31 | 波賀町引原ダム | 2♂ | 1983. III. 3 | 御津町室津賀茂神社 | 10♂5♀ |
| 28. ナワキリガ <i>Conistra nawae</i> | | | | | |
| 1983. III. 17 | 御津町稲富 | 2♀ | 1983. III. 5 | 御津町室津赤崎 | 10♂5♀ |
| 1983. III. 26 | 姫路市白国広峰神社 | 5♂1♀ | 1983. III. 9 | 御津町室津赤崎 | 2♀ |
| 1984. III. 18 | 姫路市豊富町神谷 | 8♂ | 1984. III. 3 | 御津町室津赤崎 | 1♀ |
| 29. ホシオビキリガ <i>Conistra albipuncta</i> | | | | | |
| 1981. III. 10 | 姫路市広畑区下野 | 1♀ | 1984. III. 4 | 御津町室津赤崎 | 1♀ |
| 1983. III. 3 | 御津町室津賀茂神社 | 1♀ | 34. ノコメトガリキリガ <i>Telorta divergens</i> | | |
| 1983. III. 9 | 御津町室津赤崎 | 3♂7♀ | 1981. X. 31 | 波賀町引原ダム | 1♂ |
| 1983. III. 17 | 御津町稲富 | 1♀ | 35. キトガリキリガ <i>Telorta edentata</i> | | |
| 1983. III. 24 | 相生市瓜生三濃山 | 2♀ | 1981. X. 31 | 波賀町引原ダム | 1♂ |
| 1983. III. 26 | 姫路市白国広峰神社 | 2♂ | 計 15属35種 | | |
| <参考文献> | | | | | |
| 井上 寛他(1982)日本産蛾類大図鑑 講談社 | | | | | |
| 江崎悌三他(1977)原色日本蛾類図鑑(下) 保育社 | | | | | |

高砂で採集した蛾

岡本 清

本報文は昭和38年から昭和48年(1963-1973)の間に高砂市曾根町の松陽高等学校校舎に飛来した蛾、及び昭和38年から昭和57年(1963-1982)の間に高砂市米田町の自宅に飛来した蛾をまとめたものである。

<凡 例>

5-VI-1960(2) [羽化] (食草-クズ)

(2)は採集数を示し、(1)は省略する。

[羽化]は食草から幼虫を採集して成虫を羽化させたのを示す。(食草-クズ)は幼虫の食草とその和名を示す。

マダラガ科 ZYGAENIDAE

<ホタルガ亜科 CHALOCOSIINAE>

ホタルガ *Pidorus atratus* Butler

24-VI-1965.

<マダラガ亜科 ZYGAENINAE>

タケノクロホソバ *Balataea funeralis* (Butler)

6-IX-1970(3).

イラガ科 LIMACODIDAE

イラガ *Monema flavescens* Walker

庭のカキ、モミジに幼虫が多数見られる。

テングイラガ *Microleon longipalpis* Butler

2-VI-1965, 11-IX-1969.

アオイイラガ *Parasa consocia* (Walker)

庭のカキ、モミジに多数の幼虫が見られる。

マドガ科 THYRIDIDAE

<マダラマドガ亜科 SICULINAE>

ギンスジオオマドガ *Herdonia margarita* Inoue

2-VII-1961, 9-VI-1963.

メイガ科 PYRALIDAE

<オオメイガ亜科 SCHOENOBIINAE>

ヒトスジオオメイガ *Scirpophaga lineata* (Butler)

25-VI-1963(3), 11-VI-1964, 13-VI-1964.

Scirpophaga sp.

12-VIII-1965.

<ツトガ亜科 CRAMBINAE>

ハイイロエグリツトガ *Pareromene exsectella* (Christoph) 30-VIII-1976.

ニカメイガモドキ *Chilo hyrax* Bleszynski 29-IV-1967(2).

スジツトガ *Chilo sacchariphagus* (Bojer) 22-VIII-1976.

マエキツトガ *Pseudocatharylla simplex* (Zeller) 14-VI-1963, 18-VII-1970.

サツマツトガ *Calamotropha okanoi* Bleszynski 3-VIII-1963, 25-VIII-1976, 10-IX-1976.

イツトガ *Calamotroph shichito* (Marumo) 20~28-VIII-1976(3), 10-IX-1976.

ヒメキスジツトガ *Calamotropha brebistrigella* (Caradja) 11-VII-1962, 13-VI-1964.

ナカグロツトガ *Crambus virgatellus* Wileman 26-V-1968, 10-V-1969.

クロフタオビツトガ *Neopediasia mixtalis* (Walker) 17-VI-1968, 12-IX-1969, 10-IX-1970, 1-IX-1975(2).

シバツトガ *Parapediasia teterrella* (Zeller) 4-IX-1975(5), 25-VIII-1976, 7-IX-1976, 5-VII-1983.

ツトガ *Ancylolomis japonica* (Zeller) 3-VII-1959, 18-VII-1960, 8~13-IX-1960(4), 26-VIII-1969, 19-VIII-1976, 22-VIII-1976, 14-IX-1976.

<ノメイガ亜科 PYRAUSTINAE>

モンキシロノメイガ *Cirrhochrist brizoalis* (Walker) 23-VII-1964, 13-IX-1964.

モンキノメイガ *Pelena sericea* (Butler) 20-V-1962, 1~28-VI-1964(8), 2-VII-1964, 10-VI-1965.

- シロオビノメイガ *Hymenia recuralis* (Fabricius)
5-VII-1965, 12-IX-1970.
- アヤナミノメイガ *Eurrhyarodes accessalis*
(Walker) 17-V-1964, 2-VII-1964, 17-VIII-
1971, 22-VIII-1976.
- コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis* (Guenée)
15-IX-1967, 31-VIII-1969(2), 6-IX-1970, 12-
IX-1970, 20-VIII-1971, 26-VIII-1971, 11-VIII-
1975, 6-IX-1975, 1-X-1975.
- イネハカジノメイガ *Marasmia exigua* (Butler)
24-VI-1965.
- ハカジモドキノメイガ *Marasmia limbalis* Wile-
man 27-V-1964.
- シロモンノメイガ *Bocchoris inspersalis* (Zeller)
28-VIII-1975.
- シロマダラノメイガ *Chabula onychinalis* (Gue-
née) 2-V-1965, 16-VIII-1970, 8-IX-1974, 30
-VIII-1977.
- モモノゴマダラノメイガ *Conogethes punctiferalis*
(Guenée) 21-VIII-1976, 31-VIII-1976, 6-IX-
1976(2).
- カクモンノメイガ *Rehimena surusalis* (Walker)
3-IX-1962, 1-IV-1965(5) [羽化], 22-X-1967
[羽化] (食草—ムクゲの果実), 31-VIII-1969, 6-
IX-1976(2).
- シロテンキノメイガ *Nacoleia commixta* (Butler)
28-VIII-1976.
- ヒメクロミスジノメイガ *Hedylepta misera* (But-
ler) 14-VI-1963, 10-VII-1963, 27-VIII-1963,
20-IX-1964.
- キバラノメイガ *Carema noctescens* Moore
1-V-1971 [羽化] (食草—クズ).
- クロヘリキノメイガ *Goniorhynchus butyrosa*
(Butler) 20-VIII-1963.
- オオキノメイガ *Botyodes principalis* Leech
14-IX-1965.
- クロスジキンノメイガ *Pleuroptya balteata* (Fab-
ricius) X-1971(11) [羽化] (食草—ヌルデ).
- ホソミスジノメイガ *Pleuroptya chlorophanta*
(Butler) 9-VI-1963.
- ワタノメイガ *Notarcha derogata* (Fabricius)
9-VI-1963, 20-VIII-1976(3).
- マエアスカカシノメイガ *Palpita nigropunctalis*
(Bremer) 15-IX-1967, 24-IX-1970.
- ヒメシロノメイガ *Palpita inusitata* (Butler)
5-VII-1965, 25-VIII-1966, 22-VIII-1976.
- ワタヘリクロノメイガ *Diaphania indica* (Saun-
der) 9-IX-1963, 10-XI-1967.
- ワモンノメイガ *Nomophila noctuella* (Denis &
Schiffer.) 4-IX-1964, 21-X-1965, 3-IX-
1970, 24-X-1970, 17-VIII-1971.
- マエキノメイガ *Herpetogramma rudis* (Warren)
20-VII-1963, 28-VII-1963 [羽化] (食草—ヒナタ
イノコズチ), 15-VIII-1963, 10-X-1963 [羽化].
- イノモトソウノメイガ *Herpetogramma okamotoi*
Yamanaka 23-VII-1963 [羽化], 27-VIII-1963 [羽
化], 18-V-1964 [羽化] (食草—イノモトソウ).
- モンキクロノメイガ *Herpetogramma lutosalis*
(Guenée) 20-VII-1963, 27-VII-1963 [羽化] (食
草—ノブドウ), 20-VIII-1976, 8-IX-1976.
- シロアヤヒメノメイガ *Diasemia litterata* (Sco-
poli) 27-V-1964, 6-IX-1976.
- キアヤヒメノメイガ *Diasemia accalis* (Walker)
3-IX-1967, 27-VIII-1976, 4-IX-1976, 9-IX-
1976.
- ウラジロキノメイガ *Uresiphita gracilis* (Butler)
12-V-1963.
- タテシマノメイガ *Sclerocona acutella* (Evers-
mann) 20-V-1964, 18-IX-1964, 8-VI-1970.
- マエウスモンキノメイガ *Paliga ochrealis* (Wile-
man) 23-VIII-1968 [羽化], 29-V-1970 [羽化],
5-VIII~2-IX-1970(15) [羽化] (食草—キリの葉).
- ユウグモノメイガ *Ostrinia palustralis* (Hübner)
15-VIII-1961, 10-IX-1961, 4-VII-1963, 17-IX-
1967, 5-IX-1976, 10-IX-1976.
- アワノメイガ *Ostrinia furnacalis* (Guenée)
19-VIII-1969 [羽化], 20-VIII-1971(3) [羽化] (食草
—トウモロコシ), 27-VIII-1971, 31-VIII-1971,
16-VIII-1972, 28-VIII-1972, 4-IX-1972(4), 1-IX
-1975, 15-VIII-1976, 19-VIII-1976.

- フキノメイガ *Ostrinia sucupalalis* (Walker)
20-V-1963, 9-VI-1963, 4-VII-1963, 13-IX-1963, 5-IX-1964, 23-VIII-1968, 9-IX-1968, 6-IX-1970.
- フチムラサキノメイガ *Aurorobotys aurorina* (Butler) 3-IX-1977.
- クロモンキノメイガ *Udea testacea* (Butler) 20-VIII-1971.
- ウドノメイガ *Udonomeiga vicinalis* (South) 12~15-VII-1975(9) [羽化] (食草-ウド).
- ベニフキノメイガ *Pyrausta panopealis* (Walker) 1-IX-1975, 27-VIII-1976, 29-VIII-1976(3), 30-VIII-1976(2), 2-IX-1976(2).
- ウスオビキノメイガ *Microsyega jessica* (Butler) 14-VI-1963.
- ヒメトガリノメイガ *Ananis verbascalis* (Denis & Schiffermüller) 20-V-1963(2), 27-V-1974.
- <ツツリガ亜科 GALLERINAE>
- アカフツツリガ *Lamoria glaucalis* Caradja 7-VII-1964, 10-VII-1964, 12-X-1964, 21-VI-1969 [羽化] (食草-枯草), 15-VII-1970.
- <フトメイガ亜科 EPIPASCHINAE>
- アオフトメイガ *Orthaga olivacea* (Warren) 30-VIII-1976(2).
- <シマメイガ亜科 PYRALINAE>
- コメシマメイガ *Aglossa dimidiata* (Haworth) 9-VI-1963, 3-IX-1977(2).
- モモイロシマメイガ *Hypsopygia mauritialis* (Boisduval) 7-IX-1976.
- フタスジシマメイガ *Orthopygia glaucinalis* (Linnaeus) 2-VI-1965, 25-VII-1965.
- アカシマメイガ *Herculia pelasgalis* (Walker) 10-VII-1963, 23-VII-1963(2), 8-VII-1965, 17-VII-1965, 15-VII-1970, 18-VII-1970, 14-VII-1974, 10-IX-1978.
- オオクシヒゲシマメイガ *Datanoides fasciata* Butler 1-VI-1964 [羽化], 5-VI-1964 [羽化], 6-VI-1964 [羽化] (食草-ムクノキ).
- ツマグロシマメイガ *Arippara indicator* Walker 4-VII-1963, 25-VII-1965, 18-VII-1968, 21-VII-1968, 16-VII-1969(2), 15-VII-1970.
- カバイロトガリメイガ *Endotricha theonalis* (Walker) 25-VIII-1966, 15-VIII-1968, 26~30-IV-1968(6♂2♀) [羽化], 12~18-VIII-1968(6♂5♀) [羽化] (食草-枯草).
- キモントガリメイガ *Endotricha kuznetzovi* Whalley 10-VII-1963, 3-IX-1967, 3-VII-1968 [羽化], 4-VII-1968 [羽化] (食草-枯草), 31-VIII-1969(4), 11-IX-1969, 7-VII-1970(2), 2-IX-1970(3), 25-VIII-1976, 31-VIII-1976, 7-IX-1976.
- キオビトガリメイガ *Endotricha flavofascilis* (Bremer) 17-VIII-1966, 31-VIII-1969, 31-VIII-1976.
- オオウスベニトガリメイガ *Endotricha icelusalis* (Walker) 3-IX-1967(2), 7-VII-1970.
- <マダラメイガ亜科 PHYCITINAE>
- ノシメマダラメイガ *Plodia interpunctella* (Hübner) 15-IX-1963, 4-IX-1976(2), 9-IX-1976, 10-IX-1976(3).
- ヒメアカマダラメイガ *Nephoterix adelphella* (Fischer & Roslerstamm) 16-VI-1965.
- アカマダラメイガ *Salebria semirubella* (Scopoli) 25-VIII-1966, 18-VIII-1976.
- ツツマダラメイガ *Acrobasis tokiella* (Ragonot) 17-VI-1965.
- フタグロマダラメイガ *Eurhodope dichromella* Ragonot 4-VI-1964.
- マエジロマダラメイガ *Edulicodes inoueellus* Rosler 23-V-1972, 5-VI-1972, 15-VI-1972, 16-VI-1972.
- カギバガ科 DREPANIDAE
- <カギバガ亜科 DREPANINAE>
- ウコンカギバ *Tridrepana crocea* (Leech) 5-XI-1974.
- シャクガ科 GEOMETRIDAE
- <アオシャク亜科 GEOMETRINAE>
- カギバアオシャク *Tanaorhinus reciprocata* (Walker) 14-VI-1966.

ヨツメアオシヤク *Thetidia albocostaria* (Bremer)
22~24-VI-1968(3) [羽化], 30-VI-1968 [羽化]
(食草-ヨモギ).

<ヒメシヤク亜科 STERRHINAE>

ウンモンオオシロヒメシヤク *Somatina indicata-*
ria (Walker) 26-V-1963, 11-IX-1968.

<ナミシヤク亜科 LARENTIINAE>

ツマキナカジロナミシヤク *Dysstroma citrata*
(Linnaeus) 10-X-1964.

ハラキカバナミシヤク *Eupithecia tabidaria* Ino-
ue 11-VIII-1975.

<エダシヤク亜科 ENNOMINAE>

ユウマダラエダシヤク *Abraxas miranda* Butler
20-IX-1973.

クロモンオエダシヤク *Oxymacaria temeraria*
(Swinhoe) 25-IX-1965.

ナカウスエダシヤク *Alcis angulifera* (Inoue)
14-X-1968.

ミヤマツバメエダシヤク *Thinopteryx delectans*
(Butler) 13-VIII-1964.

シロフブユエダシヤク *Agroipis dira* (Butler)
19-III-1965.

エグリツマエダシヤク *Odontopera arida* (But-
ler) 2-XI-1967.

カレハガ科 LASIOCAMPIDAE

マツカレハ *Dendrolimus superans* (Butler)
10-VII-1964, 6-IX-1970.

ヤママユガ科 SATURNIIDAE

シンジュサン *Samia cynthia* (Drury)
幼虫はシンジュ、ニガキの葉上によく見られる。

スズメガ科 SPHINGIDAE

<スズメガ亜科 SPHINGINAE>

エビガラスズメ *Agrius convolvuli* (Linnaeus)
29-VIII-1964, 21-IX-1967.

モモスズメ *Marumba gaschkewitschii* (Bremer &
Grey) 10-V-1972(2).

<ホウジャク亜科 MACROGLOSSINAE>

オオスカシバ *Cephonodes hylas* (Linnaeus)
8-VIII-1970. 幼虫は庭のクチナシの葉を食害す
る。

ホシヒメホウジャク *Neogurelca himachala* (But-
ler) 25-VII-1965.

ホシホウジャク *Macroglossum pyrrhosticta* But-
ler 25-IX-1967, 18-IX-1970, 5-IX-1975.

キイロスズメ *Theretra nessus* (Drury)
26-VIII-1970(2).

コスズメ *Theretra japonica* (Boisduval)
9-VI-1965, 5-IX-1975.

セスジスズメ *Theretra oldenlandiae* (Fabricius)
18-IX-1965.

シャチホコガ科 NOTODONTIDAE

モンクロシャチホコ *Phalera flavescens* (Bremer
& Grey) 19-VIII-1965.

キシヤチホコ *Torigea stramonea* (Moore)
25-V-1967.

セグロシャチホコ *Clostera anastomosis* (Butler)
3-X-1968.

ドクガ科 LYMANTRIIDAE

ヒメシロモンドクガ *Orgyia thyellina* Butler
22-X-1964(食草-フジ).

スゲドクガ *Laelia coenosa* (Hübner)
12-VII-1965.

スゲオオドクガ *Laelia gigantea* Butler
8-VII-1965, 13-VII-1965, 1-X-1970.

マイマイガ *Lymantria dispar* (Linnaeus)
1-VII-1980.

ウチジロマイマイ *Parocneria furva* (Leech)
6-IX-1976, 20-IX-1977.

チャドクガ *Euproctis pseudoconspersa* (Strand)
IX-1959. サザンカの葉上に多くの幼虫が見ら
れる。

カノコガ科 CTENUCHIDAE

カノコガ *Amata fortunei* (Orza)
6-IX-1970(2).

トラガ科 AGARISTIDAE

トビイロトラガ *Sarbanissa subflava* (Moore)
10-V-1966(2).

ヤガ科 NOCTUIDAE

<ケンモンヤガ亜科 ACRONICTINAE>

サクラケンモン *Hyboma adauca* (Warren)
17-VIII-1966, 4-VI-1977.

シロハラケンモン *Plataplecta pulverosa* (Hamp-
son) 10-VI-1965.

リングケンモン *Triaena intermedia* Hampson
28-IX-1962, 26-VIII-1963, 15-IX-1965, IX-
1982(2).

シマケンモン *Craniphora fasciata* (Moore)
16-VI-1965.

<キノコヨトウ亜科 BRYOPHILINAE>

イチモンジキノコヨトウ *Byromoia granitalis*
(Butler) 28-VIII-1976.

<モンヤガ亜科 NOCTUINAE>

マエキヤガ *Xestia stupenda* (Butler)
30-X-1964.

ウスチャヤガ *Xestia dilatata* (Butler)
20-X-1964.

クロギシギシヤガ *Naenia contaminata* (Walker)
30-V-1968.

<ヨトウガ亜科 HADENINAE>

ヨトウガ *Mamestra brassicae* (Linnaeus)
20-IX-1967, 6-IX-1970.

ヒメムラサキヨトウ *Sideridis unica* (Leech)
22-IX-1965.

*編集者注：少ない種で、県下では他に摩耶山で
得られているだけである。

マメチャイロキヨトウ *Aletia consanguis* (Guenée)
29-X-1963.

クサシロキヨトウ *Acantholeucania loreyi* (Du-
ponchel) 1-XI-1965(5).

<セダカモクメ亜科 CUCULLIINAE>

アオギンモンセダカモクメ *Cucullia argentea*
(Hufnagel) 21-IX-1963(稀少種).

*編集者注：全国的にみても局地的な珍しい種で

兵庫県下での採集記録はあまり聞かない。

キクセダカモクメ *Cucullia elongata* (Butler)
26-VIII-1976.

<カラスヨトウ亜科 AMPHIPYRINAE>

クサビヨトウ *Oligia ophiogramma* (Espar)
9-VI-1963.

ウスアオヨトウ *Polyphaenis subviridis* (Butler)
16-VI-1965.

ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* (Fabricius)
1-XI-1967(3).

スジキリヨトウ *Spodoptera depravata* (Butler)
15-V-1963.

クロテンヨトウ *Athetis cinerascens* (Motschulsky)
4-VIII-1962.

チャオビヨトウ *Niphonyx segragata* (Butler)
1-V-1980.

ヒメツマキリヨトウ *Callopietria duplicans* Wal-
ker 14-IX-1967, 3-IX-1974.

<キノカワガ亜科 SARROTHRIPINAE>

シンジュキノカワガ *Eligma narcissus* (Gramer)
6-IX-1965(稀少種).

マエシロモンキノカワガ *Nycteola costalis* Sugi
24-IX-1964.

<コブガ亜科 NOLINAE>

リングコブガ *Evonima mandschuriana* (Oberthür)
26-VIII-1963.

<リング亜科 CHLOEPHORINAE>

ベニモンアオリンガ *Earias roseifera* Butler
30-VII-1971.

<コヤガ亜科 ACONTIINAE>

キスジコヤガ *Enispa lutefascialis* (Leech)
8-VI-1971.

シロスジシマコヤガ *Corgatha dictaria* (Walker)
13-VI-1972(2).

ネジロコヤガ *Maliattha chalcogramma* (Bryk)
26-VIII-1963, 4-VI-1964.

ヨモギコヤガ *Phyllophila obliterata* Rambur
3-IX-1969.

ホシコヤガ *Ozarba punctigera* Walker
29-V-1965.

- フタオビコヤガ *Naranga genescens* Moore
19-VIII-1976.
- フタトガリコヤガ *Xanthodes transversa* Guenée
25-IX-1961, 27-VII-1972, 31-VIII-1976. 幼虫
は庭のフヨウの葉上に毎年みとめられる。
- <キンウバ亜科 PLUSIINAE>
- ユミガタマダラウワバ *Abrostola abrostorina*
(Butler) 20-VIII-1968, 22-VIII-1976.
- ギンスジキンウワバ *Erythroplusia rutilifrons*
(Walker) 4-V-1963, 13-VI-1963.
- キクキンウワバ *Thysanoplusia intermixta* (Warren)
7-XII-1964.
- エゾギクキンウワバ *Ctenoplusia albostrata*
(Bremer & Grey) 15-VIII-1963, 28-VIII-1976.
- ミツモンキンウワバ *Ctenoplusia agnata* (Stau-
dinger) 21-VI-1970(2) [羽化] (食草-ミツバ).
- ニシキキンウワバ *Ctenoplusia ichinosei* (Dufay)
10, 12, 13-VII-1967 [羽化] (食草-ツツブキ).
- モモイロキンウワバ *Anadevidia hebetata* (Butler)
24-V-1967.
- <シタバガ亜科 CATOCALINAE>
- アシプトクチバ *Dysgonia stuposa* (Fabricius)
3-IX-1975.
- ホソオビアシプトクチバ *Dysgonia arctotaenia*
Guenée 19-IX-1964, 8-VIII-1970, 3-IX-1975.
- オオウンモンクチバ *Mocis undata* (Fabricius)
21-VIII-1976.
- モンシロムラサキクチバ *Ercheia niveostrigata*
Warren ?-1970.
- <クチバ亜科 OPHIDERINAE>
- モクメクチバ *Perinaenia accipiter* Felder & Ro-
genhofer 22-IV-1964.
- アサマクビグロクチバ *Lygephila vulcana* (But-
ler) ?-1971.
- ワタアカキリバ *Anomis flava* (Fabricius)
24-VII-1963, 8-VII-1965, 31-VIII-1969.
- アカキリバ *Anomis mesogona* (Walker)
31-VII-1971, 26-VIII-1971.
- オオアカキリバ *Anomis commoda* (Butler)
20-VI-1976.
- ヒメエグリバ *Oraesia emarginata* (Fabricius)
18-VIII-1965, 17-IX-1967, 9-VIII-1984, 23-VIII-
1984.
- アカエグリバ *Oraesia excavata* (Butler)
?-VIII-1977.
- アケビコノハ *Adris tyrannus* (Guenée)
自宅(高砂・米田)にアケビを植えたら毎年葉上
に幼虫が見られた。
- ウスツマクチバ *Dimumma deponens* Walker
17-VIII-1968, 3-X-1976.
- アカテックチバ *Erygia apicalis* Guenée
20-VIII-1976, 25-VIII-1976.
- チャバネキボシアツバ *Paragobara ochreipennis*
Sugi 13-V-1963.
- テックロアツバ *Rivula sericealis* (Scopoli)
16-IV-1964 [羽化] (食草-エノコログサ).
- フタテナツバ *Rivula inconspicua* (Butler)
9-VI-1963, 16-VIII-1966, 11-IX-1969.
- チビアツバ *Luceria fletcheri* Inoue
2-IX-1976, 12-IX-1976.
- アヤナミアツバ *Rhynchodontodes plusioides* (Bu-
tler) 6-IX-1970.
- <アツバ亜科 HYPENINAE>
- コテングアツバ *Hypena pulverulenta* Wileman
23-XI-1963(2), 22-XI-1964, 1-XI-1967.
- *編集者注: 少ない種で県下では他に記録例を聞
かない。
- <クルマアツバ亜科 HERMININAE>
- キマエアツバ *Adrapsa ablualis* Walker
28-VII-1964.
- ヒメツマオビアツバ *Zanclognatha subgriselda*
Sugi 9-VI-1963, 20-VIII-1963.
- チョウセンコウスグロアツバ *Zanclognatha um-
brosalis* Staudinger 3-VII-1965.
- シラナミアツバ *Herminia innocens* Butler
12-V-1963, 13-V-1963, 15-V-1963.

高砂のハナアブ

岡本 清

我が家の庭に来たハナアブを集めたらかなりの種類数となったので、メモ書き程度であるがリストアップしてみた。

採集地はすべて高砂市米田町の自宅、採集者はすべて筆者である。

また、()書きの数字は採集した頭数を示す。1頭のみ採集の場合は(1)を省略した。

シマハナアブ *Eristalis cerealis* Fabricius
15-XI-1973(13), 4-XI-1974(2).

ホシメハナアブ *Lathyrrophthamus cularis* Coquillett
15-XI-1973(6), 10-XII-1973, 4-XI-1974, 7-XI-1974, 8-XI-1974, 10-V-1975, 11-V-1975, 6-XI-1977.

キゴシハナアブ *Lathyrrophthamus quinquestriatus* Fabricius
15-XI-1975(5).

ハナアブ *Eristalomyia tenax* Linné
15-XI-1973(6), 6-XI-1977.

オオハナアブ *Megaspis zonata* Fabricius
15-XI-1973(3), 10-XII-1973(2), 30-VIII-1974(4).

アシブトハナアブ *Tubifera virgatus* Coquillett
25-V-1963, 10-X-1969, 10-XI-1973, 4-IV-1974, 10-IV-1974(3), 7-XI-1974(2).

シマアシブトハナアブ *Mesembrius flavipes* Matsumura
4-V-1974, 11-V-1974, 10-V-1975.

マダラコシボソハナアブ *Baccha maculata* Walker
7-XI-1974.

ヘリヒラタアブ *Didea alneti* Fallen
4-XI-1974.

ヨコジマオオヒラタアブ *Dideoides latus* Coquillett
5-XI-1977.

コマバムツボシヒラタアブ *Lasiopticus komabensis* Matsumura
10-XII-1973, 8-XI-1974.

ホソヒラタアブ *Epistrophe balteata* de Geer
15-XI-1973(6), 12-XII-1973(2), 6-IV-1974, 5-V-1974, 4-XI-1974.

ナミホシヒラタアブ *Metasyrphus nitens* Zetterste
15-XI-1973(3), 10-XII-1973, 4-XI-1974, 7-XI-1974, 8-XI-1974(3), 6-XI-1977(2).

クロヒラタアブ *Syrphus serarius* Widemann
10-X-1969, 10-XII-1973(4), 4-XI-1974, 7-XI-1974(2), 8-XI-1974(3), 6-XI-1977.

フタスジハナアブ *Syrphus torbus* Matsumura
4-XI-1974, 7-XI-1974.

ケヒラタアブ *Syrphus bilineatus* Osten-Sacken
15-XI-1973, 4-XI-1974(2).

ヤマトヒラタアブ *Syrphus ribessit* Linné
15-XII-1973, 4-XI-1974, 7-XI-1974(3), 8-XI-1974(2).

オオマメヒラタアブ *Sphaerophoria javana* Wiedeman
4-XI-1974, 7-XI-1974, 8-XI-1974, 5-XI-1977(2), 6-XI-1977(2).

マメヒラタアブ *Sphaerophoria menthastri* Linné
10-XII-1973, 4-V-1974, 8-XI-1974.

ナガマメヒラタアブ *Sphaerophoria cylindrica* Say
4-IV-1974, 10-IV-1974(3), 11-IV-1974(2), 12-IV-1974, 15-IV-1974(11), 4-XI-1974.

シママメヒラタアブ *Paragus fasciatus* Coquillett
4-V-1974, 5-V-1974.

キアシママメヒラタアブ *Paragus tipialis* Fallen
29-VI-1975.

ホシツヤヒラタアブ *Melanostoma scalare* Fabricius
4-IV-1974, 5.

<参考文献>

古川晴男・長谷川仁・奥谷禎一編 原色昆虫百科
図鑑 昭和40年発行・集英社

九州の蝶／観察と知見

(オオルリシジミとオオウラギンヒョウモン)

大東 康人

はじめに

30年程前、シジミチョウ科のオオルリシジミ (*Shijimiaeoides divina*) と、タテハチョウ科のオオウラギンヒョウモン (*Fabriciana neriooe*) は、生息地に行けば、いづれも決して少ない蝶ではなかったと聞く。ところがその後、日本の産業構造の変化と共に、農業の機械化と燃料革命、植林・治水事業の進展、道路網の拡充と舗装化、観光地やゴルフ場の開発、更には農山村地域での茅葺き屋根の消失等が進むにつれ、両種の生息環境である草原が開発あるいは放置される事によって次々と消滅し、現在の危機的状況を招いた、と言われている。1991年の日本版レッドデータブック(環境庁選定)においては、それぞれ稀少種と絶滅危惧種に指定される迄の衰亡を来している。

草原性の蝶の衰亡と生息環境の変化に関心を持ち、この2年間各地を訪れてきたが、現在も尚僅かながら生息している両種の生息環境と生態をこの眼で確かめる為、1996年、二度に亘って九州地方を訪れた。

特にオオウラギンヒョウモンは、兵庫県においても絶滅危惧種に指定され、ここ七十年程の公式な採集記録は皆無であることから、今回の見聞によって、県内における今後の生息可能性調査の参考とすべく考えた。

オオルリシジミ

1. 種の概要¹⁾

オオルリシジミ属は僅か2種から成る小属で、このうち日本に産するのは、オオルリシジミ1種のみ。国内の分布は、本州(青森・岩手の東北地方、新潟・長野・群馬の中部地方)及び九州(阿蘇・九重火山地帯)と、特異な分布を示す。

発生は年1化、蛹で越冬する。成虫は、九州では5月上旬から、本州中部では通常6月上旬から

発生し、山地の明るい草原や裾野に生息するが、平坦地の河川堤防や畑の土手等でも見られた。幼虫はマメ科クララの花・蕾しか食べないため、母蝶の産卵は、花穂に行われる。

2. 観察地の概要

1996年5月18～19日に訪れた観察地は、熊本県阿蘇郡内。阿蘇山群の南斜面にある尾根状の草原(標高約900m。幅約20～50m。長さ約200m。周囲は杉の植林地や雑木林)で、この周辺一帯の草原と同様、牛馬の放牧に使用されている。

* 植生

写真1に見られる如く、一面に草丈の低い雑草の生い茂る草原となっている。その中でオオルリシジミ唯一の食草であるクララは最大約80cmと、草原内で最も丈の高い草本で本数も多く、この時期における優占植物であった。尤も、クララは毒草であり牛馬は全く食べない事から、幸いにして優占状態が維持されているのであろう。



写真1. 生息地の環境

* 天候

観察日の前日に相当量の降雨があった様だが、幸いにして当日は快晴、無風に近い状態だった。

* 観察時間と日照時間帯

観察時間は、18日はAM10時～PM2時、翌19日はAM9時～PM1時迄と、残念ながら終日観察することは出来なかった。従って、観察地の日照時間帯は不明であるが、付近の状況を考え併せると、かなり良好で、推定AM8時前からPM5時過ぎまでは確実に日照が確保されている様だ。

* 同時に見られた蝶

この観察地では、セセリチョウ科はギンイチモンジセセリ・ミヤマチャバネセセリ、シジミチョウ科ではツバメシジミ・ルリシジミ、シロチョウ科ではキチョウ等が見られた。しかしその頭数は何れも僅か1～2頭に過ぎず、食草の占有状態・生育状況に一致したものとなっている。

尤も、この内ルリシジミはクララも食草としており、何故ルリシジミが少ないのか、疑問に思うところである。本件については、後の纏めのところで検討を加えたい。

〈注〉尚、文献¹⁾ではツバメシジミの幼虫もクララを食草とする記録もあるが、主要な食草ではない為、検討の対象から除外した。〉

3. 観察事項

* 発生数と汚損度

観察地では、オオルリシジミ成虫の発生が見られ、その数は凡そ200頭前後と推定された。雌雄別の頭数は定かではないが、観察の範囲内では、ほぼ同数に近いと判断された。従って、この草原のオオルリシジミは、ガリバー型の単独優占種ということになる。汚損度については雌雄共に殆どが完全な個体であり、或いは発生のピークにあたるのかもしれない。

* 成虫の行動範囲

行動範囲は狭く、草原の緩やかな起伏を飛翔するが、草原から離れるケースは皆無に近かった。

* 雌雄の活動開始時間

観察開始時には両日共、既に雄の飛翔が見られた。しかし雌の方は、二日目に訪れたAM9時頃には未だ葉上に静止している個体が多く、雄のアプローチや、観察時の歩行に気付いて飛翔を始めるものが散見された。雌が自ら飛翔を始めたのは

9時半から10時の間で、雄に比べて若干の遅れが見られた。

* 雄の探雌飛翔

探雌行動と見られる雄の飛翔は上下動が激しく非常にせわしないもので、斜面に生える食草を一株一株舐める様に行き来しては、隈なくチェックし、執念深く雌を探している様子(アカシジミ等の下等ゼフィルスに見られる、いわゆる「さまよい飛翔」)が観察された。この時の、雄の一回の飛翔継続時間は約2分から5分、時として10分以上に及んだ。

* 雄の求愛行動と交尾

探雌飛翔で葉上に静止している雌を発見した雄は、速度を落として着地・接近し、求愛行動をとったが、交尾が成立した事例は見られず、雌の交尾拒否行動のみが観察された。この拒否行動は個体によって様々で、落下して食草の間に入り込むケース、飛翔して逃げまどうケース、典型的な交尾拒否行動(羽を開き腹端を上げる)、の3タイプが見られた。

又これとは別に、交尾中の固体も三例観察することができた。発見は観察開始直後(AM9～10時)で、この三例の交尾終了時刻は、何れもAM12～1時であった。従って今回は残念ながら、交尾時間を実地に割り出すことは出来なかった。

交尾中の姿勢は、写真2～3に見られる如く、上から見て、結合部を起点とした互いの体が一直線になる場合とV字状の場合が見られたが、基本となる姿勢は直線状で、風や他の昆虫(蟻など)の外部刺激を受けて、一時的にV字型の姿勢をとるものと考えられる。写真撮影の為、10cm程の至近距離にカメラを接近させたが、三例とも逃げる(飛翔又は歩行による移動)ことはなかった。

強制的に飛翔させることは憚られたため、交尾飛翔形式は確認していない。

* 産卵飛翔と産卵

雌は産卵に適した食草を求めて草原内を飛び回るが、速度は比較的緩やかであった。適当な食草を見つけると、未だ伸長していない花穂(時には伸長前の若葉)に接近する。しかし、ここで更に

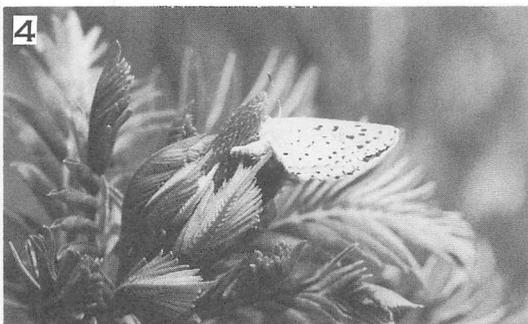
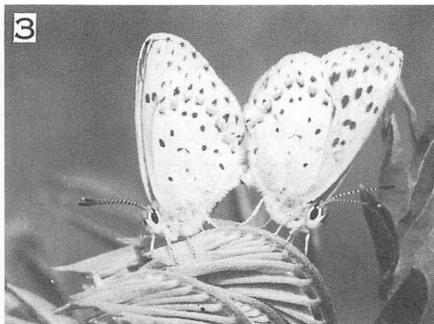


写真2. 交尾姿勢① (一直線型)

写真4. 産卵① (クララの花穂)

写真6. オオルリシジミの卵 (クララの花穂)

写真3. 交尾姿勢② (V字型)

写真5. 産卵② (クララの若葉先端部)

写真7. 訪花 (雌・スミレ類)

確認が行われる様で、不適と判断された場合は、静止する前に次の食草を求めて飛翔する。静止した後でも、更に確認は続けられ、産卵の適否が決められる様だ。産卵行動は、腹端を後方にせり出して、花穂(時として、伸長前の若葉の先端)に産みつける。静止場所での産卵数は1卵から4卵と、ばらつきが見られた。尚、産卵直後の卵の色は純白で、成虫の大きさに比してそのサイズは非常に小さいものであった。(写真4~6参照)

母蝶は、産卵の後は休息する事が多く、再飛翔までに3秒~10秒、その場で静止していた。

* 求蜜飛翔と吸蜜

この時期、草原で開花中の植物は、僅かにスミレ類(種名は不明)が見られた程度で、他には殆ど無く、吸蜜に相応しい環境とは言えなかった。この為、求蜜飛翔の観察は困難なものとなり、これこそが求蜜飛翔、と言える程の行動は、識別することが出来なかった。しかし幸いにも、スミレに

訪花しているところを1例、観察することができた。(写真7参照)

*求水飛翔と吸水

この観察地の周辺にある山道に、土の露出した土手(傾斜約80度、高さ約2m)があり、前日の雨を受けて、土部は濡れていた。オオルリシジミはこの場所に二頭飛来しており、静止して吸水を行っていたが、迂闊にも雌雄の確認を怠る等、十分な観察はできなかった。

*活動と休息

活動開始時間については先に述べたが、その後観察を終えるPM2時迄は、頻繁に増減を繰り返しはするものの、絶えず飛翔する姿が見られた。当日の天候は快晴であったことから、日中の気温は汗ばむ程に上昇したが、この時でも飛翔行動や産卵行動は、止むこと無く続けられた。曇天や少雨時でも少数の活動が見られる、との話しも聞かすが、今回は残念ながら、調査の機会を得られなかった。

日光浴中の本種を観察したところ、太陽を背に受け、体を水平或いは頭部をやや上にした状態で羽を45度~60度にかけていた。(写真8参照)



写真8.日光浴(雌)

4. 観察結果より

僅か2日間を以て、本種の普遍的な生態行動を捉えたとは思えないが、今回の観察結果から、凡そ次の事が確認、或いは推定出来る。

①ルリシジミとの競合

先に述べた様に、この観察地は、周辺を植林地や雑木林に囲まれた、閉鎖的な空間であった。食草をマメ科のクララに限定しているオオルリシジミにとって、「競合」は言わば死活問題と言えるが、とりわけ、この様に閉鎖的な環境の場合、ここで生息地を失うことは即、絶滅を意味する。従って、単一の食草しか持たない種の生存戦略はいきおい、激しいものになると考えられる。

片やルリシジミの食餌植物は、対象を広範に広げており、基本となるマメ科植物に限らず、バラ科・ブナ科・ヤナギ科等までも対象とする等、旺盛な生命力と巧みな環境適応力を備えている¹⁾。従って、ルリシジミにとってクララは、単に食餌メニューの一つであり、競合の結果次第では、何時でも代替植物に転換できる余力を持っていると言えよう。生息場所における両種の発生数を比較してみると、オオルリシジミは、信州で過去、通常に生息していた場所では、多数が乱れ飛んでいたとの文献²⁾があり、生息地での単位面積当たりの発生密度は、非常に高いと推定される。一方のルリシジミは、どこでも見られる普通種であるが、知人による観察結果を併せても、オオルリシジミの様な大量発生例は聞かれない。

この事から、ルリシジミの生存戦略は、点の生息域に固執するのではなく、拡散行動〔食餌植物の拡大に加え、蕾・花(時として若葉や若実)各ステージを食べることで、年間発生回数を増加させるとともに、広範な面或いは地域全体を対象とした分布拡大を図る〕によって、種の繁栄を図っているのではないかと。そうであれば、ルリシジミにとって吸蜜植物の少ないこの観察地は、選択価値の低い場所であるのかも知れない。

対するオオルリシジミは、生存の基盤となるクララの生息が絶対条件であることから、必然的に点の領域で生息域を確保するしかない。この為、生息地で絶対的な優位を確保する方法として、点レベルの発生密度を高くしたものと考えられるが何れにせよ、限られた草原内における種間の生存競争や適応能力に係わる問題として、今後の調査に期待したい。

②雌雄の活動開始時間

天候が良好な場合、雌の活動開始時間は、雄よりも若干遅れることが観察された。この事実が単なる偶然によるものか、或いは雌雄の相違に基づく種固有の生態行動なのか、詳細は不明である。本件に関する文献は、不勉強もあって、これまで見たことは無いが、蝶類全般に亘って、一度調査する必要がある、と考える。

③雄の探雌行動

雄の探雌行動は、所謂「さまよい飛翔」である事が分かった。草原に生育するシジミチョウ科を見ると、ベニシジミの様に「待ち伏せ型」をとるものもあり、様々である。このような行動の違いは、種の分化と進化の過程で選択されて来たのであろうし、環境への適応の結果、形成されたものであろう。人間から見ると他にもっと優れた方法も有ると思うのだが、この行動を選択するに至った過程に、些か興味を持った。今後フィールドにおいて、観察を深めたいテーマではある。

④クララへの産卵場所

参考文献¹⁾では、雌は食草クララの花穂に産卵するとある。本種の幼虫はクララの花か蕾しか食べないことから、その効率性からも、当然の事である。しかしながら今回の観察で、別々の個体が伸長前の若葉の先端部に産卵する様を、二度観察し、写真も撮影することが出来た。

本件については、たまたま観察しただけで二例あることから、実際には一定の割合で発生しているものと考えられる。この場合、孵化した幼虫の行動や生存率等に興味を持たれる。

⑤吸蜜植物について

文献¹⁾を見る限り、吸蜜植物としては、クララやシロツメクサを始め、白色系の花を好むことが判っている。また、これまでスマレ類の吸蜜例は報告が無く、今回が初の事例であった。

尤も、今回の調査地は、この時期、開花植物が少ないことから、選択の余地は無いと言える。

或いは、クララの開花時期になれば、嗜好選択の結果、スマレは選ばれないのかも知れない。

⑥吸水行動

文献³⁾によれば、吸水行動をとるのは、通常羽化後間もない雄の個体で、ミドリシジミ類やミスジチョウ類、及びジャコウアゲハ・カラスアゲハ・モンキチョウ等は、雌も吸水する様である。現在の所、オオルリシジミ雌による吸水の報告は見当たらないが、今後注意する必要がある。

⑦日光浴の姿勢について

参考文献¹⁾の観察事例では、頭部を下にして静止するとあるが、今回の観察では、水平若しくは頭部を上にして行っていた。従って、種としては決まった姿勢と言うものは無く、種々のスタイルで日光浴を行うものと考えられる。

⑧活動時間帯

文献¹⁾によると、成虫の活動の基本は二山型〔午前と午後の活動の中間時点(昼前後)には一時的に減少〕であるが、気象条件や地形・周囲の樹林環境によっては基本型が崩れるとの事である。今回の観察では、飛翔開始から2時過ぎまでは、波動的な増減はあったものの、二山型と言える程の減少は見られなかった。外的環境の変化によって種々のバリエーションが有るのであろう。

オオウラギンヒョウモン

1. 種の概要^{A, E)}

本種はチベット東部からウスリー、アムールを経て日本に至る典型的な東アジア分布種である。国内では本州・四国・九州に分布し、過去の記録では近畿以西・中国地方と九州に比較的産地が多かった。但し、いずれの地域でも生息地は局限され、中には発生数の年偏差が大きい産地もある。年1化で九州等の暖地では5月下旬、本州低地では6月上旬、近畿・中国・信州等の寒冷地や高冷地では7月下旬から出現する。冷涼な地では夏眠しない。生息場所は、河川堤防の斜面・火山性草原・カルスト台地・演習場・スキー場・放牧場・カヤ場等、開けた明るい草原を生活の場とする。食餌植物としては各種スマレ類を食べるが、嗜好性の点ではスマレとされる。交尾は雌の羽化後比較的早い時期に行われる様だが産卵は遅く、9月

以降でないとは開始しない。

2. 観察地の概要

長崎県東彼杵郡内の観察地には1996年7月6日に訪れた。標高約450mの、なだらかな起伏が続く草原には池が点在し、その周辺には湿地帯が見られた。この時期の草原は、全体が膝下までのカヤカススキに覆われており、蕨も多く見られた。観察地の日照時間は、斜面の向きにもよるが、推定AM8時前からPM6時迄は確保されている様だ。この雰囲気は、かつてオオウラギンヒョウモンが産した兵庫県杉ヶ沢高原、砥峰高原等に似通った環境と言える。

* 観察時間と天候

観察時間はAM8時半～PM2時過ぎ迄の、僅か半日であった為、十分な観察は出来なかった事を、先ずお断りしておきたい。当日の天候は、午前中は時々曇りであったが、PM1時過ぎから本曇り、2時過ぎには雨となった為、観察を断念した。

* 同時に見られた蝶

観察地では、シロチョウ科のツマグロキチョウ(少)、ヒョウモンチョウ科のミドリヒョウモン(少)・ツマグロヒョウモン(少)、シジミチョウ科ではベニシジミ(少)・ツバメシジミ(稀)・サツマシジミ(1雄のみ)が見られた。

この内、サツマシジミについては、過去に幾度か見掛けた場所は、何れも樹林帯か溪谷地であったが、今回は樹林帯を口に離れた草原の真ん中で観察された。食樹を求めて季節移動を繰り返す本種の旺盛な生命力の程を、思い知らされた。又、二種のヒョウモン類は、何れも草原の外縁部で見られるのみで、外周に沿って飛翔はするものの、決して草原の中に入ろうとしなかった。

3. 観察事項

* 発生数と汚損度

当地で会った人の話では、本年のオオウラギンヒョウモン雄の発生は6月25日頃で、雌は約10日後に発生を始めることから、順当であれば7月10日頃が雌の最盛期と推定された。

観察の結果は、雌雄ともに発生が見られた。しかしながら、雌雄別の観察頭数は大きな差異がみられ、比率にして凡そ1:20程の開きがあった。

とは言え、雌雄を併せたオオウラギンの個体数は他を圧倒しており、本種もこの時期における単独優占種であった。

汚損度については、雄は比較的新鮮な個体が多く、小破の個体がこれに混じた。この時期は梅雨と重なる為、晴天が少ない。本年も雨天が続いた事から、発生に影響したと思われる。この中で翅を大破した雄が、1頭観察された。(写真9参照)尚、少数見られた雌は、新鮮個体であった。

* 雌雄の活動開始時間

AM8時半頃には未だ自翔は見られず、観察のため草原内に入ると驚いて飛翔する姿が、雌雄とも観察された。この際の飛翔は弱々しく、移動距離も短かった。その後、自翔が確認されたのは、9時半頃であった。雌雄別の活動開始時間については、観察頭数の差があまりにも大きい為、推定するには至らなかった。

* 活動と休息

観察地の草原は広大で、且つ飛翔力のあるこの蝶は、草原内を自由に飛び回る為、行動範囲を掴むのは容易でなかった。しかし、仔細に見てみると、谷底にある湿地及びその周辺部に集中する傾向が伺えた。

また、他のヒョウモンと同じく日照には敏感で、日が陰ると忽ちにして姿が見えなくなった。付近の隠れ場所を捜したが、残念ながら観察することは出来なかった。

* 訪花行動と訪花植物

草原内で開花中の植物は極僅かで、アザミ類、ハンカイソウ、オカトラノオ等が目につく程度であった。開花本数は何れも少なく、オオウラギンは花を求めて彷徨っている様に見えた。アザミは昔からヒョウモンの重要な吸蜜植物として知られるが、今回の観察では、赤色系のアザミとともに、黄色のハンカイソウに訪花が集中する姿が見られた。

4. 観察結果より

僅か半日で何が見出せるか、甚だ心もとないが今や見ることすら叶わぬ本種の観察機会を得たことでもあり、平にご容赦を願いたい。

①活動の性向と生存戦略

オオウラギンヒョウモンは、広大な草原で満遍なく観察されたが、特に谷底にある湿地及びその周辺部で多かった。幼虫の食草となるスマレは随所に見られたし、吸蜜植物のアザミも、この時期には特に湿地付近に多いとは言えなかった。従って、人の目で判る事と言えば、湿地特有の環境だけが大きな違いと言える。

ここで、兵庫県において同様の雰囲気を持つ杉ヶ沢高原と砥峰高原の環境について、触れてみたい。これらの高原にはこれまで4月から11月の各月に訪れ、その環境を見てきた。高原は共にゆるやかな起伏を持ち、その中心部が窪地となっており、湿原を有している。又、全体はススキ・萱・蕨などに覆われており、アザミ・オミナエシ等を始め、四季折々の植物が見られた。開花植物の季節毎の分布密度は、湿地の周辺部が常に高いことが観察された。二つの草原は各種ヒョウモン類やセリチョウ類の生息地となっているが、彼らの行動範囲をみると、常に湿地の周辺部を起点に行動している様である。

これらの事から、湿原地帯は、草原の中では蝶の活動(訪花・雌雄の出会い・交尾など)に最も適した環境、と考えられる。これ以外にも、或いは産卵・吸水・夜のネグラ等に利用されているのかも知れないが、観察したことはない。

又、九州の観察地における二種のヒョウモンの行動については、これは、生息地を巡るオオウラギンとの種間競合の結果、圧倒的な頭数の違いによって周辺部に追いやられた、とも考えられる。この排除行動は今回僅か1例観察されただけで、果して常態的行動であるのか、不明である。オオウラギンは、発生初期には遠くに拡散せず、発生地で圧倒的多数を誇る、との話も聞く。

以上より、ここでオオウラギンヒョウモンの生存戦略について考えてみたい。

- ・先ず第1に、他のヒョウモン類よりも発生時期を若干遅らせ、且つ集中的に大量発生する事で制空権を確保し、草原内の最適場所(湿地帯)を占有していると考えられる。
- ・これにより、競合する他のヒョウモン類を排除し、生命維持活動(吸蜜・吸水・休息・休眠など)や生殖活動(雌雄の邂逅・交尾・産卵など)の有利化を図っていると思われる。
- ・また、交尾後は夏眠(寒冷地を除く)することで受精卵の成熟を待つと共に、秋の産卵迄のエネルギー温存を図っているのではないか。
- ・そしてヒョウモン類中最大の産卵数(2,589卵^{D)})を誇る雌は、新たな生息地を求めて夏眠前後に拡散移動を開始し、分布拡大を狙っているのではないか。

以上は裏付けデータが乏しい中での推論でもあり恐縮ながら、各位による今後の調査に委ねたい。

②色彩に対する反応

参考資料^{C)}によれば、求蜜飛翔の際は先ず最初に視覚(色彩)反応で吸蜜植物を探す、とある。

この観察地ではハンカイソウの黄色に強く惹かれていたことから、黄色が反応色であると推定された。そこで、ハンカイソウとほぼ同じ色のシャツを着て、オオウラギンの反応を試してみた。結論から言うと、反応したと言える。但し、参考資料にもある如く、至近距離(5m以内)まで近づくと、臭覚反応も用いる様で、ここで急に方向転換して飛び去るケースが多かった。尤も、全てのオオウラギンが黄色に反応した訳ではなく、その率は半数程度とみられた。

③鳥による襲撃の可能性

写真9に見られる右前後翅の大破の痕跡を見て頂きたい。この形状は通常の飛翔では起こり難く何者かに襲われたとみるのが順当であろう。

蝶類は食物連鎖の下部に位置し、肉食昆虫以上の餌となる運命にある。捕食や襲撃の例としてはこれまでに肉食昆虫や蜘蛛を始め、鳥類や哺乳類など様々の報告を見るが、この写真の例は破損の形から、鳥の嘴によるものとの印象を受ける。

尚、文献を調査した範囲では、これまでにオオ

ウラギンへの鳥類の襲撃・捕食の報告は見られなかった。文献⁹⁾には、鳥による各種の蝶の被災例が紹介されている。



写真9. 鳥の嘴による破損? (雄)

二種の観察を終えて

中学校時代、毎晩の様に横山図鑑を眺め、これら未知の蝶が自由に飛びまわる様を想像しては、一度はこの目で見てみたいと、憧れたものであった。然しながら近年、この二種の急激な衰亡の報告を聞くにつれ、もはや生きた姿を見る事は叶わぬものと、諦めかけていた。

今回、短い期間であったがこの二種が飛翔する姿を見た。彼らは「衰亡の原因は人間だ」何て事は叫ばない。何も知らず、唯、人類の登場以前に完成した脳内プログラムに基づいて、無心に生き続けるだけなのだ。マニアによる絶滅が心配される蝶でもある。他ならぬ愛好家によって絶滅する事のない様、心から願うものである。

最後に、約20年のブランクを経て4年前から又蝶に親しむ様になったが、この間、蝶類の生態観察の成果は目覚ましいものがあり、目下基礎からの再勉強中である。日頃から何かとご意見を拝聴している広畑政己氏と近藤伸一氏に対し、紙面を借りて心より謝意を表したい。尚、本稿を纏めるにあたり、広畑政己氏には貴重な資料を閲覧させて頂いたことも併せて報告しておきたい。

<参考文献>

オオルリシジミ

- 1) 福田晴夫ほか(1984)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) 保育社: 272~279.
- 2) 京浜昆虫同好会篇(1959)新しい昆虫採集(下) 内田老鶴園: 220~221, 237.
- 3) 福田晴夫+高橋真弓(1988)蝶の生態と観察 築地書館: 26~31, 36~37.
- 4) 石井実男ほか(1994)特集・自衛隊演習地の昆虫 昆虫と自然7(67): 2~8.
- 5) 栗田貞多男・田下昌志(1996)信州の蝶 信濃毎日新聞社: 78~79, 172~173.

オオウラギンヒョウモン

- A) 福田晴夫ほか(1983)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ) 保育社: 101~105.
- B) 石井実男ほか(1994)特集・自衛隊演習地の昆虫 昆虫と自然7(67): 2~3, 9~14.
- C) 福田晴夫+高橋真弓(1988)蝶の生態と観察 築地書館: 26~31, 100~103.
- D) 鳩山邦夫(1996): チョウを飼う日々 講談社
- E) 広畑政己(1987)兵庫県産蝶類分布資料 てんとうむし(10): 11~12.
- F) 近藤伸一(1989)兵庫県のオオウラギンヒョウモン 日本の生物3(11): 69~75.

二種共通の参考文献

- * 大東康人(1996)但馬の蝶に関する若干の知見と推論—ヒサマツミドリシジミ— IRATSUME(20): 37~40.
- * 蝶研出版編集部(1988)蝶類年鑑1987. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1989)蝶類年鑑1988. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1990)蝶類年鑑1989. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1991)蝶類年鑑1990. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1992)蝶類年鑑1991. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1993)蝶類年鑑1992. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1994)蝶類年鑑1993. 蝶研出版
- * 蝶研出版編集部(1995)蝶類年鑑1994. 蝶研出版

僅か1日のタイ採集紀行

相坂 耕作

エメラルド寺院で有名なタイへ僅か1日であるが訪れ、採集や資料等を探し出すことができたので報告しておきたい。筆者にとっては10年以上も前にいったフィリピン以来の東南アジアへの旅である。虫友の壺坂氏と1昨年、中国上海へいってから機会がなかったので今回何とか行こうということになった。しかし、壺坂氏も会社のNo.2の重職であり、筆者もこの度、工場の移転がからみ30年ぶりに新工場を新設するという重要な時期となっているので双方ともあまり休暇がとれず、それを無理して訪問したわけである。

通常タイのバックツアーは5日以上が多いのだが、大阪にある旅行会社"旅のデザインルーム"というのがあり普通にはない3日や4日のツアーがあった。しかし、1日目が午後便になっており着くと夜遅くなり寝るだけとなり、中1日だけの旅行となってしまふ。そこで追加料金を払い午前便に振り替えてもらい出発することとなった。なお、この旅行には筆者と同じ企業の経営者である小池社長も同行した。

タイの味をもとめて

7月12日 新幹線と関空特急はるかに乗車し、9時少し前に関西空港に到着した。受付まで時間があるのでミネラルウォーターを買いこんだり喫茶店で時間をつぶし日本航空・タイ航空共同運航便JL623便(A330)にて関西空港を出発したのは、午前11時45分であった。タイのドンムアン空港に到着したのは3時30分(日本時間5時30分)となっていた。時差は2時間であり、5時間45分飛行機に乗っていたわけである。税関等で諸手続を済ませ、出たところで無理矢理?両替をさせられ、出たところで現地案内人が待っていてくれた。早速マイクロバスに乗車、クーラーをがんがん利かせ一路宿泊ホテル"シェラトン"へ。タイでは超一流

であり、バンコクで最も贅沢といわれるホテルという。しかし、世界一の渋滞名所バンコクである。ホテルに着いたのは5時半も過ぎていた。ひとまず部屋に入り案内人と6時に待ち合わせ、長時間の渋滞を覚悟して夕食を食べに行くこととなった。案内されたレストランで食べたものはタイ風のいわゆる"しゃぶしゃぶ"だった。美味しいことは確かだが、タレが辛く筆者の口には合わなかった。後に醤油のタレを持ってきてくれたので、やっと口におさまった。やはり暑い国なので辛く腐りにくくすべてのものになっているものと思われる。食事後タクシーにてホテルへ送ってもらい、ホテルの売店にて各自ショッピングとなった。筆者も"虫グッズ"を物色したが、標本の額入りや昆虫標本を樹脂で封入したものが多く目についたが買う気持ちになれなかった。やっと目についたのが壁掛けのチョウ工芸品である。以前求めた中国製品より造りがしっかりしていた。また、びっくり木の実も買いこんだ。一体この木箱に入った虫はこの国で作っているのだろうか?日本でも売っているし、中国でも見た。インドネシアからの輸入とも聞かしく、マレーシアの土産でも戴いた。

明日の採集を楽しみにホテルの各部屋に分散し寝るのみとなった。

バンコクとアユタヤにて昆虫採集

7月13日 タイ時間8時に朝食をホテル内のレストランにてとる予定だったが、早く目が覚めたのでホテル付近を物色し、花壇の花にきたミツバチ風のアブを撮影したり採集し時間を潰しやがて朝食をとった。前日の打ち合わせでは9時に前日の案内人が来る予定であったが、ツアーの市内観光をキャンセルしている関係で代りの女性案内人が来た。そして9時30分にしてほしい旨の連絡があり、待っていた。しかし、案内人は遅くなり、

そのうえ移動車が渋滞のため来ないという。7時に会社を出発したというのに……。車を待っていてもらいがあかず諦めてホテルタクシーにて移動することになった。その時はすでに11時頃となっていた。壺坂氏が一生懸命に昆虫のいそうな環境へ連れて行くように言うのだが、案内人と運転手は頭を抱えこんでしまい困っている。仕方がないのでアユタヤ(タイがシャムとよばれていたころ日本人町があったところで山田長政が有名)方面へ出発し、適当に採集することにした。走りだして30分くらいすると線路沿いに水溜まりがあり、チョウが飛んでいるのが目につきました。車を止めてもらい見てみると多くのトンボやチョウが飛んでいる。早速壺坂氏はカメラを取り出し撮影。筆者も補虫網をセットするまではよかったが三角紙がないのに気が付いた。仕方がないのでチャック付きのポリ袋(カタツムリの採集用)を利用し応急三角紙にした。ここではトンボ科の小型種とショウジョウトンボ、アジアイトトンボ、また目撃種としてコモンハネビロ、小型のヤンマ等を見た。チョウはシロチョウ科が多く、マダラチョウの仲間やタテハモドキの近縁種が見られた。その場所は線路のそばであり汽笛をならされたりしてヒヤヒヤ採集したが、後で写真をみるとドンムアン空港の前であった。

筆者の求めているタイの蚊取線香はまだ入手出



バンコク市内にはユミポン国王の肖像画が多い

来ていないので何とかコンビニエンスストアでも寄ってほしいと希望し、やっと入手出来た。アユタヤ方面に行くまでに4カ所くらい止まっただろうか種々の昆虫を撮影もしくは採集して、やがてアユタヤへ。遅い昼食をとるべくレストランへ。そのレストランは外国人は余りこないらしく我々のしている動作を珍しそうに見いつている。食事後アユタヤの日本人町を観光したりショッピングしたりして夕方宿泊ホテルに帰着した。夕食はこのホテル自慢の日本料理を食べ僅か2日目で懐かしんだ。

たいした土産も買っていないのでホテル横のリパーシティへ出掛け各自ショッピングを楽しんだ。筆者はあらゆる機会にタイの虫凧を収集すべく物色してきたし、現地案内人にもお願いしてみたが、凧など売っているところは知らないとの返事であった。それが、目の前のショッピングセンターにて売っているではないか。そこにはタイの工芸品や特産品などが多く売っている。タイ式の和紙なども販売しており、小池、壺坂の両氏も買い求めていた。

すぐに帰国へ

現地時間5時15分に起床し、6時00分にホテルのバイキングにて朝食をとり、直ぐホテルを出発し、7時前にはドンムアン空港に到着していた。世界一の渋滞都市バンコクでも日曜日の早朝は例外で車もスムーズにはしる。9時15分定刻に日本航空・タイ航空共同運行便のDC10は離陸した。

今回筆者の求めたいコレクションの蚊取り線香と虫凧も入手でき、まずまずの成果があったと思う。ただ残念に思うのが採集のため観光地に十分な時間がとれなかったことである。しかし、それは車にて走行していたら感覚的にタイを覗いているのと同じように思うので、今回はこれでよかったのである。尚、今回の旅行では壺坂孝一氏と小池積氏に大変お世話になった。心より感謝申し上げます。



<写真説明>

1. ショウジョウトンボ♂ 2. ヒメキトンボ♂ 3. ネグロトンボ♀ 4. 吸蜜するインドホソチョウ
 5. 吸蜜するジャノメタテハモドキ 6. 樹上で翅を休めるハレギチョウ 7. 採集地にて(筆者)
 8. ホテルから見たチャオプラヤ川とバンコク市内

アオアシナガハナムグリとジュウシチホシハナムグリの分布*

高橋 寿郎

アオアシナガハナムグリ *Gnorimus subopacus viridiopacus* (Lewis, 1887) とジュウシチホシハナムグリ *Paratrachius septecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven, 1864) の両者は兵庫県下での記録は大変少ない。そこで、この両者の日本での分布状況はどんなであろうかと眺めて見ることにした。

まず、アオアシナガハナムグリから眺めて見る。アオアシナガハナムグリは1887年 G. Lewis が Chiuzenji, Nikko 産で *Trichius viridiopacus* Lewis として新種記載された。この原記載で *T. subopacus* を対馬から5頭得ている、そして、この種を朝鮮からも得ていると。上翅は緑色或いは褐色で胸部の色彩が異なるとしている。

1875年の C. O. Waterhouse の"日本産鯉角類"なる論文では *Gnorimus subopacus* Motsch. Chowsani, Tsu-sima の記録のみである。

Lewis がアオアシナガハナムグリを新種記載した同年(1887) "日本のハナムグリ, 新種, シノニムそして分布"なる論文を発表。その中で *Gnorimus viridiopacus* Lewis として夏の終りに中禅寺で3頭得たと書いており *G. subopacus* Motsch. について Mr. Bowering がずい分前に対馬から得ていたが、自分も1881年に同じ対馬で5頭得ており、また札幌から1頭得ているとも記されている。

即ち *G. subopacus* と *G. viridiopacus* は、あまりはっきり違う種であるとされないまま両者が日本に分布しているように扱われている。

1923年に発表になった新島善直、木下栄次郎両博士の論文では *Gnorimus viridiopacus* Lewis アオアシナガハナムグリとあり、産地として Tsushima, Chiuzenji, 日光、飛騨、天塩、上川、樺太とあり、ローマ字の産地は文献からの引用で検視標本が漢字で示されているようである。ここで検することの出来なかった種として *Gnorimus subopacus* Motsch. そして産地に Chousan, Tsushima, Sapporo としている。いずれも文献の引用である。

1930年代に出版された各種図鑑、横山(1931)、加藤(1933)、平山(1937, 1940)には皆アオアシナガハナムグリ *G. viridiopacus* の図説はある。そして産地は、北海道、本州、対馬(中には樺太、朝鮮も入っている)。また加藤正世の1935年の目録にはアオアシナガハナムグリ *G. viridiopacus* (樺、北、本)は入っているが *G. subopacus* が入っていない。

さらに1939年の三輪勇四郎、中條道夫両博士の目録では *G. viridiopacus* アオアシナガハナムグリ Japan. *G. subopacus* Motschulsky イブシアシナガハナムグリ Japan (Hokkaido, Honshu, Tsushima), Corea, China, East Siberia とあって、この両者の取扱いが逆のような取扱いになって当時、この両者を的確に検討された文献が無くわかったようなわからないような処置のままになっていた。

戦後、1960年に野村 鎮によって発表になった目録にはアオアシナガハナムグリ *G. viridiopacus*, Hokkaido, Honshu, Kyushu, イブシアシナガハナムグリ *G. subopacus*, Tsushima? (ex. Lewis), Korea, Manchuria, E. Siberia と区別され、日本にいたのはアオアシナガハナムグリであり、対馬にだけイブシアシナガコガネがいるのではということになった。そのことは1963年の図鑑によっても解説されている。

その後出版された日本の図鑑類にはアオアシナガハナムグリがほとんど図説されているし、学名も安定している(一応日本での広域分布種である)。しかし、日本産のこの両者がすっきりしないことに気づいている人は多くいたと思われる。石田正明はこの両者と考えられるものを検討(1982)されて、両者に明確な区別点が見出せないとして、日本に産するものは *G. subopacus viridiopacus* Lewis と亜種に扱われ対馬にはたして *Gnorimus* 属の種がいるのかと疑問をなげている。即ち日本にはシベリア東部原産の *G. subopacus* の亜種 ssp. *viridiopacus* を産することになる。最近出版された Ma Wenzhen, Economic Insect Fauna of China

* 兵庫県甲虫相資料・329

Fasc. 46. Coleoptera: Cetoniidae, Trichiidae and Valgidae. pp. 1-210, pl. 5, 1995 をみると (p. 169-171, Fig. 141-143) *Gnorimus* 属は勿論日本にも分布種がいるとあるが、中国からは *G. subopacus* Motschulsky, 1860, *G. pictus* Moser, 1901 の2種が記録されており、しかも *G. subopacus* Motschulsky は日本に分布していないことになっている。こうなると、*G. viridiopacus* Lewis は独立種と云うことになる。しかし、石田が検討しているように *G. subopacus* と *G. viridiopacus* 両者の種として区別さるべき有意の差をほとんどもっていないと云った意見から *G. viridiopacus* を *G. subopacus* の亜種に扱うことは該当であると考えられる。

アオアシナガハナムグリの分布は現在では北海道、本州、四国、九州、対馬ということで関東から北の地では割合と見られるようである。手許にある文献によってこの種の分布をザッと眺めて見る。

樺太にいと云う記録は新島、木下(1923)の論文に出ているが河野広道、玉貫光一の報文では北樺太から記録され(1936)南樺太には多いような記述もある。千島からは桑山 覺博士が国後島から南千島初記録として報告されている(1967)。

北海道からの記録は1936年、河野広道が大雪山を同じく保田が層雲峡、ルベシナイモ(1985)、霧多布湿原、風間林道の中谷が(1993)しており、上杉博物館の所蔵標本の中に北海道福島町大千軒岳、上士幌町糠平産の記録がある(1994)。霧多布湿原周辺の丘陵地には多く花に集まるとの記述もある。

青森県では渡辺福寿の内真部砂川事業所(1937)と尾崎俊寛による南八甲田山駒ヶ峯地区猿倉がある(1992)。

山形県の記録は大変多く見られる。即ち吾妻山(白布高湯)、蔵王山(清水)雁戸山、二口峠、山形市(盃山)、最上郡(神室山)、鳥海山、以上板垣(1964)による。奥会津や奥日光では比較的多いようであるが当地では個体数の少ない種であると言った記述もみられる(草刈, 1991)。同じく山形県の記録としては朝日山系: 祝瓶山、月山: 湯殿山口、吾妻山: 大平、吾妻: 白布高湯、蔵王: 清水、山形市: 雁戸山、二口峠、盃山、神室山、鳥海山(桜井, 1984)並びに米沢市新高湯、口田沢、小国

町温身平(草刈, 1994)もある。

秋田県、岩手県での文献が手許になく、おそらく産すると思われるがよくわからない(竹内誠一の岩手県甲虫誌・1939には確か記録があったと記憶しているが今この文献手許になく、よくわからない)。

宮城県では二口峠(渡辺 徳, 1983)の記録があるが産出状況は記されていない。新潟県では Echigo: Miomote, Mt. Monnai, Renge spa. が記録されている(中根猛彦・馬場金太郎, 1960)、また胎内川流域(馬場金太郎, 1972)の記録もある。

茨城県では山地稀という記録があり(日置正義, 1973)、他に産地とかコメントのついていない記録もある。

群馬県では古く熊ノ平産のカラー図説があり(平山修次郎, 1937, 1940)、尾瀬の記録もある(中根猛彦, 1954)。

神奈川県では小田原、箱根、小田原・駒ヶ岳、丹沢・蛭ヶ岳の記録があり、少ない種であるとき

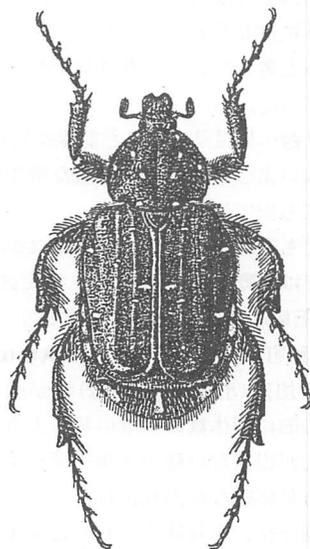


FIG. 817. *Gnorimus subopacus* Motsch. ♂

Fig. 1. Fauna U. S. S. R. Scarabaeidae by MEDVEDEV
Vol. X, No. 4 (No. 74), p. 329, 1960 より

Gnorimus subopacus MOTSCHULSKY.
イブシアシナガハナムグリ
日本産は subsp. *viridiopacus* (LEWIS, 1887)
アオアシナガハナムグリ

れている(平野幸彦, 1981)。

山梨県韭崎市鳳凰山の記録がある(水野弘造・細田偉市, 1991)、高羽正治による石川県の記録はあるが産地名とか産出状況がわからない(1992)。静岡県の記録もあるが、産地名とか産出状況の説明がない。

愛知県では東三河：設楽町裏谷、豊根村黒川の記録がある(松野更一ほか, 1990)。

福井県では大野市：小池、今庄町：夜叉ヶ池の記録がある(佐々治寛之・斎藤昌弘, 1985)。

三重県、奈良県両方にまたがっている大台ヶ原には記録がある(山下善平ほか, 1972, 林 匡夫, 1955)。

和歌山県下では北山村、護摩ノ壇山清水町が記録されている(的場 績, 1994)。

兵庫県は後で述べるとして中国地方はどうであろうか。まず鳥取県八頭郡智頭町の八河谷～綾木谷川流域、八河谷、芦津～北投川流域にはアオアシナガハナムグリが極めて普通に生息している(恩藤芳典・江原昭三, 1974)。鳥取県の記録はこれ以外には見られなかった。伯耆大山あたり当然産すると考えていたが意外に記録を見ることが出来なかった。

もう少し西へ島根県に行くとも記録が見られるが、わりと少ないようで1995年の貴重な野生動物のリストの中にも出ている。

岡山県でも記録を見ることが出来なかった。

広島県では高野町(小田脇康行・須安貞荘, 1965)、十方山(小阪敏和, 1970, 赤木克己, 1989, 竹下 富, 1933)、比和町(中村慎吾, 1977)、臥竜山(小阪敏和, 1973)、加計(小阪敏和, 1972)等が記録で見られるが全般的に個体数の少ない種のように、あまり見ることが出来ない種の印象を受けている。

山口県も具体的な産出状況はわからなかったが寂地山、筋ヶ岳、木谷峽5～6月と産地が示されている。一般に中国山地は鳥取県の東端を除けば、かなり少ない種の一つに思われる状況である。

四国では、まず三宅義一等による(1958)、徳島県の剣山夫婦池、剣山大剣神社がある。矢野俊郎はそれ迄(1961)の四国での記録をまとめて発表している。即ち徳島県：剣山(大剣神社)、夫婦池、見ノ越、高知県：梶が森、愛媛県：面河山、皿が

嶺、石鎚山とある。面河溪は石原保博士等の記録(1953)が引用されている。その後小島圭三博士は高知県天狗高原から記録(1963)、坂口清一は徳島県剣山を記録(1989)している。四国はいわゆる石鎚山と面河溪で代表される地域の山地には広く分布しているようであるが、個体数はそれほど多くないようである。

次いで九州であるが、九州での記録は英彦山がある。高倉康男の「福岡県の甲虫相」でも英彦山釈迦岳の記録のみが示されている(1989)。

三宅義一は1957年祖母山系に産し久重山系から見出し得ない種類として、このアオアシナガハナムグリをあげている。九州全般での文献がほとんど手許にないのではたしてアオアシナガハナムグリの記録があるのかどうか良くわからなかった。あったとしても、やはり北方系の種であるアオアシナガハナムグリの九州での分布は極めて珍しいのではないだろうか。霧島山での記録はある(中島義人, 1968, 清水 薫, 1969)。対馬にしてもはたしてアオアシナガハナムグリ、イブシアシナガハナムグリが現在分布しているのかどうかははっきりしていない。おそらくアオアシナガハナムグリは九州では大変珍しい種の一つと考えても良いのではないだろうか。

以上大雑把にアオアシナガハナムグリの分布状況を眺めてみたが山地性、北方性(関東地方では大体1000m位のところからあらわれると云われている)の種類と考えられる種である。

さて、兵庫県でのアオアシナガハナムグリの記録であるが、山本義丸が氷上郡神楽村で採集した1頭が記録された〔1952, 1958〕。それが現在に到る迄の県下での唯一の記録になっていた。氷の山、扇の山の両側の地域には、本種がわりといると云った記録があっても県下での本種の記録はこの1例だけと云った大変淋しい結果になっていた。

ところが1995年になって1989年の1年間林 靖彦他10名の人々(大阪甲虫同好会のメンバー)による多紀郡雨石山におけるのトラップによる調査以外に甲虫相の調査を5, 6月と9月に月2回ずつ実施。それらにて得たる種名確定の450種のリストをまとめたものが送られてきた。その中でアオアシナガハナムグリが1頭採集出来ている記録を

見ることが出来た。実に山本義丸の採集品からして31年を経て採集出来たことになる。採集の状況がよくわからないが1989年5月14日に得られているから、この種はかなり早く野外にて見られる種であるとうかがえる。一般的には高度1000m位から現れると云ったことが報告されているが、この雨石山の標高は630mであるから大変低い。出現期の早いのもそのあたりのことと関連があるのかもしれない。どちらにしても兵庫県中央部にて採集記録があるが音水、赤西、氷の山、扇の山付近には必ず本種はいることと思われるので、これからの調査に期待することが大である。もっと広く個体数も多く産するであろうと考えてよいのではないだろうか。

さて次はジュウシチホシハナムグリ *Patrichius septemdecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven, 1864) のほうであるが残念なことにこの種の原記載を持っていないので日本のどこで採集されたものであるのか、また誰が採集したものであるのかと云ったことが全くわからない(どうもシーボルトが採集して持って帰ったものではないのかと云った気がしないでも無い)。

1875年に Waterhouse が“日本の鯉角類”をまとめて発表した論文の最後の所で本種の全形図をつけて記載をしている。その最後の所で長崎近くの Tomatru からのみ5月に4頭得たとあり、6年間の探索の結果とも記している。また♂♀に関係なく赤色を呈したものがいるとあり、Lewis の1頭は胸部赤色で前縁は黒色を呈しているとも記している(この色彩の点は♂では赤褐色のものと黒色のものがいるが♀では黒色型のものだけのようである)。

1887年の Lewis の論文ではジュウシチホシハナムグリは九州からのみ産する。1881年5月19日 Konose (神瀬) のガマズミの花からわりと見ることが出来、古い丸太の穴(横)から同じ日20頭採集内5頭は全体赤褐色であったとある。

1923年発表の新島善直・木下栄次郎両博士の論文は新に産地として日向、豊後、熊本が加わっている。1930年代に出版された図鑑類に本種はまだ図説されることが少なかった。その中であって平山修次郎の原色千種続昆虫図譜(1937)には熊本県

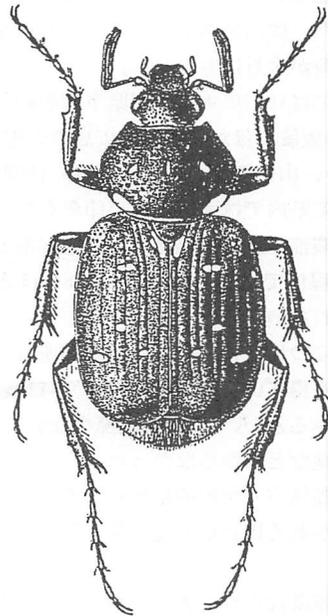
阿蘇山産のものが図示され分布として九州と朝鮮のみを掲げている。この図説そのまま1940年の原色昆虫図譜にも収録されている。

1937年沢田玄正は九州以外の産地を紹介された。即ち九州若杉山、屋久島、阿波祖谷溪谷、土佐黒尊、奈良県吉野郡北山地方池峰、大台ヶ原である。

本種は本州では関東以西に分布している種となっている。即ち神奈川県昆虫調査報告書には出てこなかったが多比良嘉晃の静岡県からは記録がある(1989)。

石川県での記録もある(高羽正治, 1992)。福井県では大野市刈込池のみである(佐々治寛之、斎藤昌弘, 1985)。岐阜県の河合村角川の記録もある(鳥飼兵治, 1974)。

愛知県では富山村漆島、日本ヶ塚山、東栄町鴨山林道、東栄町桑原とあるが、いずれもあまり多いといった表現は見られない。三重大学の平倉演習林にもおり大台ヶ原の記録もある(1968, 1972)。



Phc. 816. *Gnorimus septemdecimguttatus* (Snell.)

Fig. 2. Fauna U. S. S. R., Scarabaeidae by MEDVEDEV Vol. X, No. 4 (No. 74), p. 327, 1960 より

学名は現在 *Paratrichius septemdecimguttatus* (SNELLEN VAN VOLLENHOVEN, 1864) ジュウシチホシハナムグリ

また大阪府立大学生物研究会の伯母子岳(奈良県)生物相調査報告書でこの種を記録されている(山本雅則, 1979)。的場 績は和歌山県下の記録をまとめられている(1994)(北山村, 那智山, 串本町, 護摩ノ壇山, 高野山)。中国地方に入る前に四国を眺めてみる。四国でのジュウシチホシハナムグリの産地はアオアシナガハナムグリとほぼ同じような地点ということになる。三宅等による名西郡高根・旭ノ丸, 神領村大久保鉾山橋下(1958)、石原等による面河溪、成就社(1953)、高知県天狗高原(小島圭三, 1963)、矢野俊郎による四国での既知記録の紹介(1961)でも同じような産地になっている。ただ四国ではアオアシナガハナムグリに比しジュウシチホシハナムグリの方が産地が少ないような印象を受けるが、どんなものであろうか。

中国地方では鳥取県では伯耆大山の記録はあるが県全体を見た場合他に産地の記録がみられない。あまり目に出ないようである。岡山県ではこの種の記録は山地 治による苫田郡三ヶ上が1カ所だけあった。岡山県内でどのような分布をしているのか資料が余りにも少ない。

広島県では1977年本串山で県下初記録というのがある(小阪敏和ほか, 1977)。広島市安佐町(清水健一ほか)、山県郡深入山(小阪敏和, 1988)と散発的な記録で県内では大変少ない印象を受ける。島根県も美濃郡匹見町裏匹見での記録があるのを知っている程度で(福井修二ほか, 1989)ほとんど記録がみられない。

山口県についての文献はほとんど所有していない。止むを得ず山口県立博物館の"山口県の昆虫"(1988)をみると"5~6月山間部少ない"とあるだけで記録地などわからなかった。

以上中国地方も全般的に産しはするが、かなりお目にかかる機会が大変少ない種の1つのようなのである。

さて兵庫県はどうであろうか。今までの記録のあるのは美方郡扇ノ山広留野、宍粟郡坂の谷林道(高橋寿郎, 1981)、その後扇の山、氷の山地域で本種が採集されているのかどうか筆者は知らない。恐らくこのあたりには個体数は多くないとしても産することは間違いないであろう。大体本種は日本では紀伊半島と屋久島のある地点でかなりの個

体数が見られるほかは、それほど多くみられるのではないようで分布が広い割に個体数の少ない種といえるかと思う。国外では朝鮮半島と中国大陸に分布している。(尤も M. Wenzhen, 1995 によれば *Paratrichius* 属の種は中国では13種も分布しており、このジュウシチホシハナムグリもわりと中国では広く分布しているようで、もちろん日本にも分布しているがなぜか朝鮮に分布は示されていない)。どちらにしてもコガネムシの中ではそう簡単に接する機会の少ないコガネムシといえるかと思う。

<参考文献>

参考文献は大変多い。此処には全部掲載していないことをお断りしておく。

赤木克己(1989) 標本箱の中から 広島虫の会会報(28):39

馬場金太郎(1972) 胎内川流域の鞘翅目 飯豊山塊・胎内溪谷の生物:195-240

福井修二・鬼頭 剛・鈴木謙治・山崎克友(1989) 匹見丘の鞘翅目(2) すかしば(31):13-18

林 匡夫(1955) 大台ヶ原・大杉谷の甲虫類 大杉・大台ヶ原の自然科学調査:35-39

林 靖彦ほか(1995) 1989年度雨石山に於ける甲虫相調査報告書 KASUGA(大阪甲虫同好会連絡誌)No. 11:1-25

日置正義(1973) 茨城県のコガネムシ りりぼし(1):2-3

平間祐介・中谷正彦(1993) 霧多布湿原の甲虫相 第4節鞘翅目(甲虫類) 霧多布湿原の昆虫 *Sylvicala* 別刷:35-38

平野幸彦(1981) 神奈川県甲虫 神奈川県昆虫調査報告書:296

平山修次郎(1937) 原色千種続昆虫図譜(三省堂・東京)

平山修次郎(1940) 原色甲虫図譜(三省堂・東京)
保田信紀(1985) 上川町(大雪山、石狩川源流地域)の甲虫類 第X報(総目録) 上川町の自然: 生物目録集:111-167

石田正明(1982) イブシアシナガハナムグリとアオアシナガハナムグリについて 北九州の昆虫:29(1)1-4, pl. 1.

- 石原 保その他(1953) 石鎚山と面河溪の昆虫相
 四国昆虫学会会報:Vol. 3:1-137, 8pls. (ref. p. 70)
- 板垣輝彦(1964) 山形県産甲虫類の分布資料 山形昆虫同好会誌 2(1):4-7
- 神谷寛之(1959) 英彦山昆虫目録Ⅱ:鞘翅目:25 (九州大学英彦山生物学研究所刊)
- 加藤正世(1933) 原色日本昆虫図鑑 第八輯(厚生閣・東京)
- 加藤正世(1935) 主要金亀子科の分類(4) 昆虫界 3(18, 19):342-349
- 小島圭三(1963) 県立自然公園天狗高原学術調査報告書:113-174(ref. p. 170)
- 河野広道・玉貫光一(1926) 北樺太の甲虫類に就て 動物学雑誌 38(435):276-296
- 河野広道(1936) 大雪山の甲虫類 Biogeographica 1(2):75-104, pl. X
- 小阪敏和(1970) 広島県産甲虫ノート(4) 広島虫の会会報(10):335-338
- 小阪敏和(1973) 会員の採集活動 広島虫の会雑誌(25):14
- 小阪敏和(1973) 広島県産甲虫ノート(7) 広島虫の会会報(12):67-69
- 小阪敏和(1988) 広島県産甲虫ノート(11) 広島虫の会会報(27):37-42
- 小阪敏和・村上貴望・角島幸二(1977) 広島県産甲虫ノート(8) 広島虫の会会報(16):187-191
- 小阪敏和・清水健一・村上貴望・矢野立志(1988) 昆虫類 広島市の動植物:167-193
- 草刈広一(1991) アオアシナガハナムグリ(コガネムシ科) ファウナウキタム(9):29
- 桑山 覺(1967) 南千島昆虫誌(北農会刊)
- G. Lewis (1887) Notes on a new species of *Osmoderma* and a *Trichius* from Japan. Wiener Ent. Zeit., VI(2):49.
- G. Lewis (1887) On the *Cetoniidae* of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities. Ann. Mag. Nat. Hist. XIX(5):196-202.
- 的場 績(1994) 和歌山県産甲虫類既報の整理 KINOKUNI(46):1-129
- 松野更一・伴 憲隆・穂積俊文(1990) 愛知県の
 コガネムシ 愛知県の昆虫(上):339-361
- 三宅義一(1957) 久重山系の鯉角群相 北九州の昆虫 4(1):1-12
- 三宅義一・日浦 勇・溝口 修・西岡靖夫(1958) 徳島県のこがねむし類 昆虫科学(7):3-33
- 三輪勇四郎・中條道夫(1939) 日本産鞘翅目分類図録 金亀子虫科(野田書房・台北)
- 水野弘造・細田偉市(1991) 鳳凰山産甲虫目録(山梨県韭崎市) 関西昆虫談話会資料 第二号 P. 53
- 中島義人(1968) 霧島山産昆虫目録 タテハモドキ(3):43-71
- 中村慎吾(1977) 広島県比和町とその周辺の昆虫類 比和の自然:255-294
- T. Nakane(1954) A List of Coleoptera (Polyphaga) from Oze with Descriptions of Some New Species. Scientific Researches of the Ozegahara Moor pp. 727-740.
- 中根猛彦・馬場金太郎(1960) 新潟県のコガネ子虫類 市立長岡科学博物館館報(4):1-9
- 中谷正彦(1993) 霧多布湿原の昆虫相 第4章 総括, 霧多布湿原の昆虫 Sylvicola 別冊:72-142
- 新島善直・木下栄次郎(1923) こがねむし二関スル研究報告(第二) 我国二産スルこがねむし及び其分布 北海道帝国大学農学部演習林研究報告 Vol. 2. No. 2
- S. Nomura (1960) List of the Japanese Scarabaeoidea (Coleoptera). Toho Gakuho(10):39-79.
- 野村 鎮(1963) 原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇)(北隆館・東京)
- 小田脇康行・須安貞荘(1965) 高野町のコガネムシ類 比婆科学(67):19-21
- 大桃定洋ほか(1993) 茨城県のコウチュウ目 茨城県の昆虫:128(水戸市立博物館)
- 恩藤芳典・江原昭三(1974) 氷ノ山等中国山地国定公園・拡大予定地域の動物相 東中国山地自然環境調査報告:141-154
- 尾崎俊寛他(1992) 南八甲田山地(駒ヶ峯地区)の昆虫相 南八甲田山地総合学術調査報告書(駒ヶ峯地区):40-55

- 坂口精一(1989) 香川県産昆虫標本目録兼香川県産昆虫目録 (B5, 223p. 自刊)
- 桜井俊一(1984) 山形県の甲虫類(IV) 山形昆虫同好会誌(13):13-25
- 佐々治寛之・斎藤昌弘(1985) 福井県の甲虫目録 福井県甲虫目録:79-245
- 沢田玄正(1937) 十七ホシハナムグリの分布 日本の甲虫 1 (1):33
- 島根県(1995) 島根県の貴重野生動物リスト p1-34
- 清水 薫(1969) 霧島山の昆虫 霧島山総合調査報告書 p237-284
- 多比良嘉晃(1989) 静岡県産コガネムシ科仮目録 静岡の昆虫 7(1/2):21-31
- 高羽正治(1992) 石川県産甲虫類初出文献一覧表 石川むしの会特別研究報告第6号. B5. 98p
- 高橋寿郎(1981) 兵庫県甲虫相資料・91 きべりはむし 9(1):32-33
- 高橋寿郎(1989) 広島県産甲虫類研究史概説 比婆科学(141):5-17
- 高橋寿郎(1989) 広島県産甲虫類に関する文献目録 比婆科学(141):18-39
- 高橋寿郎(1992) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 すかしば(37/38):51-60
- 高橋寿郎(1993) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 追加 すかしば(39/40):48
- 高橋寿郎(1994) 広島県のコガネムシに関する文献目録(I-III・追加) 比婆科学(159):43-50, (160):55-62, (161):33-43, (163):17-21
- 高橋寿郎(1995) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録(2) すかしば(41/42):11
- 高橋寿郎(1996) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 追加(3) すかしば(43/44):60-61
- 高橋寿郎(1996) 鳥取県産コガネムシに関する文献目録 すかしば(43/44):53-60
- 高橋寿郎(1996) 岡山県産コガネムシに関する文献目録 未発表
- 高橋寿郎・淀江賢一郎(1996) 島根県のコガネムシに関する文献目録 すかしば(43/44):27-41
- 高倉康男(1989) 福岡県の甲虫相 B5. 526p. 自刊(葦書房・福岡)
- 竹下 富(1993) ハナムグリ雑記 I 北九州の昆虫 40(2):117-118
- 鳥飼兵治(1974) 飛騨高地の鞘翅目について 岐阜県の動物:190-206 岐阜高等学校生物研究会編
- 渡辺福寿(1937) 森林動物相調査報告 第一輯 金龜子科 鞘翅目
- 渡辺 徳(1989) 宮城県の甲虫(日本鞘翅学会)
- C. O. Waterhouse(1875) On the Lamellicorn Coleoptera of Japan. Trans. Ent. Soc. London, 1875-Part. 1:71-116, pl. III.
- M. Wenhen(1995) Economic Insect Fauna of China, Fasc. 46. Coleoptera:Cetoniidae, Trichiidae and Valgidae 1995:1-210, 5pls.
- 山口博物館(1988) 山口県の昆虫
- 山地 治(1978) 岡山県より採集した甲虫類 すずむし(115):25-30
- 山谷文仁・草刈広一(1994) 上杉博物館館蔵昆虫目録(38) 甲虫目(コガネムシ科②) ファウナウキタム(39):286-296
- 山本雅則(1979) 伯耆子岳とその周辺の甲虫 SA KAIENSIS 16(2):128-184
- 山本義丸(1952) 郷土・氷上郡の昆虫相について NaturaVII:8-13
- 山本義丸(1958) 兵庫県氷上郡昆虫目録. 氷上の自然第3集 Natura 特別号
- 山下善平ほか(1968) 平倉演習林の昆虫目録 三重大学農学部演習林資料:No. 1:1-94
- 山下善平ほか(1972) 大杉谷及び大台ヶ原山の昆虫相ならびに樹上クモ類相 大杉谷・大台ヶ原自然科学調査報告書 195-285p
- 矢野俊郎(1961) 四国産既知甲虫類目録Ⅲ(多食亜目) 松山昆虫同好会時報(16):1-20(ref. p. 19)
- 横山桐郎(1931) 続・日本の甲虫(西ヶ原刊行会・東京)

姫路市広嶺山の蛾(1)

(兵庫県産蛾類分布資料・6)

高島 昭

この地域の原植生は常緑広葉樹林であるが、隆起準平原に由来するこの地域の山は流紋岩質あるいは花崗岩質で地味も貧弱で、アカマツを主体とした極めて貧弱なフロラであるため、生息する昆虫、とくに森林生活者である蛾の分布状況は、種類数も少なく普通種がほとんどであると思われる、木村(1984)でもその様相が伺える。

また西播南部の低山地、とくに姫路市の蛾については、詳しく調査された報告例が少なく、調査が行き届いていないだけに思いもかけない種にめぐり会える可能性もある。

このようなことから、姫路の蛾を一度調査する必要性を感じていたところ、1996年夏、広嶺山付近で若干の蛾を採集する機会を得た。

6月23日には、播磨空港建設にかかる環境調査が行われることになり、県立人と自然の博物館から姫昆への調査協力依頼があった(サロンニュースNo. 120で速報)。この調査は主に蝶の生息状況の調査が種であったが、これに合わせてその前夜、A氏とともに広嶺神社参道の鳥居付近で夜間採集を行った。また、23日当日は、広嶺山からそうめん滝への尾根道での調査の傍ら、飛び出した蛾を採集した。また、この時、夜間採集を行えばよさそうなポイント(広嶺山神社奥約1kmの無人観測所付近)があり、是非一度実施してはという声が多く、7月6日に決行した。姫昆メンバー(A氏、I氏、S氏、M氏)とともに兵庫県立人と自然の博物館の中西教授と八木研究員も加わり、7日未明まで酒を酌み交わし虫談義の花が咲いた。

この夜は、あいにく満月でしかも夜半から風が強くなり、気温も低く長袖シャツでも寒いという最悪のコンディションであったが、結構虫たちは現れ、それなりの成果があった。

十分な調査とはいえず系統だった蛾相の解明とはいかないが、とりあえず報告させていただく。

配列は、講談社の日本産蛾類大図鑑によった。

また、注目すべき種には簡単な解説を付した。

なお、採集年はすべて1996年、採集地は姫路市広嶺山、採集者は高島 昭である。

マダラガ科(1種)

Pidorus atratus Butler ホタルガ 1♂, 23. VI.

マドガ科(1種)

Strigina cancellata (Christoph) アカジマドガ 1♀, 22. VI; 1♂ 6. VII.

メイガ科(14種)

Cotachena pubescens (Warren) スカシトガリノメイガ 1♂, 22. VI.

Nacoleia commixta (Butler) シロテンキノメイガ 1♂, 6. VII.

Nacoleia satsumalis South サツマキノメイガ 2♂, 6. VII.

Sinibotys evenoralis (Walker) セスジノメイガ 3♂, 22. VI.

Circobotys aurealis (Leech) キベリハネボソノメイガ 1♀, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Herpetogramma luctuosalis (Guenée) モンキクロメイガ 1♂, 6. VII.

Demobotys pervulgalis (Hampson) トガリキノメイガ 3♂1♀, 22. VI.

Teliphasa elegans (Butler) ナカアオフトメイガ 1♂, 6. VII.

Craneophora ficki Christoph ナカムラサキフトメイガ 1♂, 6. VII.

Stemmatophora valida (Butler) トビイロフタスジ

シマメイガ 1♂3♀, 6. VII.

Orthopygia placens (Butler) ツマキシマメイガ
1♂1♀, 6. VII.

Endotricha portialis Walker キベリトガリメイガ
1♂, 6. VII.

Endotricha olivacealis (Bremer) ウスベニトガリメイガ
3♂, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Nephoterix intercisella Wileman ヤマトマダラメイガ
1♂, 6. VII.

イラガ科(5種)

Narosoideus flavidorsalis (Staudinger) ナシイラガ
1♂, 22. VI.

Monema flavescens Walker イラガ
1♂, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Microleon longipalpis Butler テングイラガ
1♀, 22. VI.

Phrixolepia sericea Butler アカイラガ 1♂, 22. VI.
Natada takemurai Inoue クロスジイラガ

1♀, 6. VII.

南方系の種で、三重県以西、四国、九州、沖縄と日本の太平洋岸沿いに分布している。県内ではこれまで淡路島の洲本市¹⁾で1例の記録があるだけである。

カギバガ科(2種)

Agnidra scabiosa (Butler) マエキカギバ
1♀, 22. VI.

Macrocilix mysticata (Walker) ウスギヌカギバ
1♂, 6. VII.

トガリバガ科(1種)

Tethea octogesima (Butler) ホソトガリバ
1♂, 6. VII.

シャクガ科(29種)

Gelasma protrusa (Butler) ヒメツバメアオシャク
1♀, 6. VII.

Gelasma grandificaria (Graeser) ハガタツバメアオシャク
1♀, 22. VI.

Nipponogelasma lucia (Thierry-Mieg) スジツバメアオシャク
1♀, 6. VII.

北方系の少ない種で、兵庫県での記録はこれまで見あたらない。北海道、本州、四国北部に分布し、北海道ではアカトドマツを食樹としている。

Comostola subtiliaris (Bremer) コヨツメアオシャク
1♂, 6. VII.

Scopula nigropunctata (Hufnagel) マエキヒメシャク
1♂, 22. VI.

Scopula epiorrhoe Prout ギンバネヒメシャク
1♀, 6. VII.

Idaea nudaria (Christoph) キヒメシャク
1♂1♀, 22. VI.

これまで県下での記録はない。

Sibatania mactata (Felder & Rgenhofer) ピロードナミシャク
1♀, 23. VI.

Eupithecia addictata Dietze ミジンカバナミシャク
1♂, 6. VII.

Lomograoha temerata (Denis & Schiffermüller)
バラシロエダシャク 2♂, 6. VII.

Cabera purus (Butler) コスジシロエダシャク
1♀, 22. VI.

Parabapta clarissa (Butler) ウスアオエダシャク
2♂, 22. VI.

Plesiomorpha flaviceps (Butler) マエキオエダシャク
1♂, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Synegia limitatoides Inoue スジハグルマエダシャク
1♂, 6. VII.

Synegia esther Butler クロハグルマエダシャク
1♂, 23. VI.

Krananda semihyalina Moore スカシエダシャク
1♀, 22. VI.

Cystidia stratonice (Stoll) トンボエダシャク
1♂, 23. VI.

Antipercnia albinigrata (Warren) ゴマダラシロエダシャク
1♂, 23. VI.

Hypomecis roboraria (Denis & Schiffermüller)
ハミスジエダシャク 1♂, 6. VII.

Phthonosema tendinosaria (Bremer) リンゴツノエダシヤク 1♂, 6. VII.

Ophthalmitis albosignaria (Bremer & Grey) ヨツメエダシヤク 1♂, 6. VII.

Paradarisa chloauges Prout ヒロバウスアオエダシヤク 2♂2♀, 22. VI.

Menophra senilis (Butler) ウスクモエダシヤク 1♂, 6. VII.

Nothomiza formosa (Butler) マエキトビエダシヤク 1♀, 6. VII.

Garaeus specularis Moore キバラエダシヤク 2♂, 6. VII.

Endropiodes circumflexus Inoue ツツジツマキリエダシヤク 1♂, 6. VII.

関東～中部、四国に分布するとされているが、近畿地方にも分布している。比較的少ない種で県内では上郡町(未発表)で1頭採集している。

県外では大阪府箕面市²⁾で記録がある。

Plagodis dolablaris (Linnaeus) ナカキエダシヤク 1♂, 6. VII.

Plagodis pulveraria (Linnaeus) コナフキエダシヤク 1♂, 6. VII.

Ourapteryx maculicaudaria (Motschulsky) シロツバメエダシヤク 1♂, 22. VI.

アゲハモドキガ科(1種)

Psychostrophia melanargia Butler キンモンガ 1♂, 23. VI.

カレハガ科(1種)

Dendrolimus sueprans (Butler) マツカレハ 1♂, 6. VII.

ヤマムユガ科(1種)

Actais artemis (Bremer & Grey) オオミズアオ 1♂, 6. VII.

スズメガ科(5種)

Clanis billineata (Walker) トビイロスズメ 1♂, 6. VII.

Marunba gaschkewitschii (Bremer & Grey) モモスズメ 1♂, 6. VII.

Marumba sperchius (Ménétrières) クチバスズメ 1♂, 6. VII.

Phillospingia dissimilis (Bremer) エゾスズメ 1♂, 6. VII.

Macroglossum saga Butler クロホウジャク 1♂, 6. VII.

シャチホコガ科(14種)

Quardicalcarifera cyanea (Leech) オオアオシャチホコ 1♂, 6. VII.

Cnethodonta grisescens Staudinger バイバラシロシャチホコ 1♂, 6. VII.

Harpia umbrosa (Staudinger) ギンシャチホコ 1♀, 22. VI.

Fentonia ocypete (Bremer) ホソバシャチホコ 1♂, 6. VII.

Phalera assimilis (Bremer & Grey) ツマキシヤチホコ 1♂, 6. VII.

Shaka atrovittatus (Bremer) クビワシャチホコ 2♂, 6. VII.

Rablala criatata (Butler) セダカシャチホコ 1♂, 6. VII.

Nimopydra pallida (Butler) ウスキシャチホコ 1♂1♀, 6. VII.

Peridea gigantea Butler ナカキシヤチホコ 1♂, 6. VII.

Peridea oberthueri (Staudinger) ルリモンシャチホコ 1♀, 6. VII.

Hiradonta tataonis (Matsumura) タカオシャチホコ 1♂, 22. VI.

Lophontesia pryeri (Butler) プライヤエグリシャチホコ 1♀, 22. VI.

Spatalia doerriesi Graeser ウスイロギンモンシャチホコ 1♂, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Pterostoma sinicum Moore オオエグリシャチホコ 1♂, 6. VII.

ドクガ科(2種)

Calliteara conjuncta (Wileman) スズキドクガ
1♂, 6. VII.

Orgyia thyellina Butler ヒメシロモンドクガ
1♂, 22. VI.

ヒトリガ科(4種)

Ghoria gigantea (Oberthür) キベリネズミホソバ
1♂1♀, 22. VI; 1♀, 6. VII.

Bizone hamata Walker アカスジシロコケガ
1♂, 6. VII.

Miltochrista aberrans Butler ハガタベニコケガ
1♂, 22. VI.

Lemyra flammeola (Moore) アカヒトリ 1♂, 6. VII.

ヤガ科(35種)

Moma alpium (Osbeck) ゴマケンモン
1♂1♀, 22. VI.

Gerbathodes angusta (Butler) ヒメケンモン
2♂, 22. VI; 1♂, 6. VII.

Gerbathodes lichenodes (Graeser) シロフヒメケン
モン 2♂2♀, 6. VII.

日本産蛾類大図鑑ではやや局地的な種となっ
ているが、西播地域ではよく見かけ、個体数も多い。

Hylonycta catocaloida (Graeser) キシタケンモン
1♂, 6. VII.

冷温帯林に優勢な種で、ミズナラが食樹として
知られ、県内では能勢妙見山³⁾と大屋町⁴⁾で記録
がある。採集したものは新鮮な個体で、このよ
うな低標高の丘陵地での記録は注目に値する。

Lophonycta confusa (Leech) アミメケンモン
1♀, 6. VII.

Sineugraphe bipartita (Graeser) ウスイロカバ
スジヤガ 1♂, 6. VII.

Sineugraphe longipennis (Boursin) オオカバ
スジヤガ 1♂1♀, 22. VI, 1♂, 6. VII.

Diarsia ruficauda (Warren) ウスイロアカフヤガ
1♂1♀, 6. VII.

Triphaenopsis lucilla Butler シロホシキシタヨト

ウ 1♂, 6. VII.

Athetis lapidea (Wileman) ヒメウスグロヨトウ
1♀, 22. VI.

Orthogonia sera Felder ノコメセダカヨトウ
1♂, 6. VII.

Sphragifera biplaga (Walker) コマルモンシロガ
1♀, 6. VII.

Gelastocera exustra Butler クロオピリンガ
1♀, 6. VII.

Pseudoips prasinanus (Linnaeus) アオスジアオリ
ンガ 1♂, 6. VII.

Corgatha argillacea (Butler) カバイロシマコヤガ
1♂, 6. VII.

Sophta subrosa (Butler) ウスベニコヤガ
1♂, 22. VI.

Neustrotia japonica (Warren) マエモンコヤガ
1♂, 6. VII.

Catocala jonassii Butler ジョナスキシタバ
1♂, 6. VII.

時期が合わなかったのか飛来したカトカラは本
種とマメキシタバ、オニベニシタバの3種であっ
た。本種は県内での記録が少ない種で、氷ノ山⁵⁾
⁶⁾、扇ノ山⁷⁾、三日月町⁸⁾で記録がある。ケヤキ
を食樹とするので、綿密に調査すれば低山地での
記録がもっと増えるものと思う。

Mocis annetta (Butler) ウンモンクチバ
1♂, 6. VII.

Ercheia umbrossa Butler モンムラサキクチバ
2♂, 6. VII.

Lygephila maxima (Bremer) クビグロクチバ
1♀, 22. VI.

Oraesia excavata (Butler) アカエグリバ
1♂, 22. VI.

Synpoides hercules (Butler) アヤシラフクチバ
1♂, 22. VI.

Blasticorhinus ussuriensis (Bremer) コウンモンク
チバ 2♂, 6. VII.

Pangrapta porphyrea (Butler) ミツボシツマキリ

アツバ 1♀, 22. VI.

ハルニレ、オヒョウが食樹として知られ、県下では中央山地で記録がある。しかし、氷上郡柏原町や市島町⁹⁾や三日月町⁸⁾での記録もあり、おそらくケヤキも食樹として利用されているに違いない。

Lophomilia polybapta (Butler) キマダラアツバ

3♂, 6. VII.

Goneptatica opalina (Butler) フタスジエグリアツバ

1♂, 6. VII.

Hepatica nakatanii Sugi ナンキシマアツバ

1♂, 6. VII.

東海地方から九州の太平洋岸と対馬に分布している暖地系の種である。県下では南淡町¹⁰⁾で記録があるのみである。

Diomea cremata (Butler) ムラサキアツバ

1♂, 6. VII.

Adrapsa simplex Butler シラナミクロアツバ

1♂, 22. VI.

Edessena hamada C & R. Felder オオシラホシアツバ

1♂, 22. VI.

Hadennia incongruens Butler ハナマガリアツバ

1♂, 6. VII.

Nodaria tristis Butler ヒゲブトクロアツバ

2♀, 6. VII.

Simplicia xanthoma Prout ニセアカマエアツバ

1♀, 6. VII.

Herminia arenosa Butler ウスキミスジアツバ

1♂1♀, 22. VI.

計116種

以上のように普通種がほとんどで、とりたてて特徴的なものはないが、スジツバメアオシャク、キシタケンモンのように冷温帯に優勢な種やクロスジラガやナンキシマアツバのように南方系の種など、この地域としては注目に値する種も少しは採集できた。

姫路近辺は、蛾の分布調査があまり行われていない地域なので、思わぬ種が分布している可能性もあり、蛾相究明に向けて今後さらに調査を継続したい。

なお、蛇足ながら7月6日夜から未明にかけてのライトトラップに、ミズイロオナガシジミが数頭やってきた。このことはサロンニュースNo. 120の中でも紹介されているが、筆者も採集しているので報告しておく。周りは背の高いアベマキ、コナラ林で本種の生息地である。当日強風が吹いていたのでそれを避けてたまたま飛来したものか、光に対して反応したものかは不明であるが興味深い。

ミズイロオナガシジミ 1♂ 6. VII

<参考文献>

- 1) 登日邦明(1981)洲本市で採集された注目すべき蛾3種について PARNASSIUS(24):18-19.
- 2) 山本義丸(1996)箕面山蛾類目録 p. 113 誘蛾会・新潟
- 3) 夏秋 優・佐々木 昇(1984)能勢地方の蛾(Ⅲ) 妙見山・夏の蛾(1) Crude(25):15-22.
- 4) 遊磨正秀(1981)養父郡大屋町田淵山の蛾類について(1) きべりはむし 9(1):3-6.
- 5) 山本義丸(1956)氷ノ山の蛾について(第二報)兵庫生物 3(3):121-123.
- 6) 奥谷禎一他(1974)中国山脈東端の昆虫相 東中国山地自然環境調査報告:173-191.
- 7) 谷田昌也(1986)扇ノ山の蛾類分布資料(1) IRATSUME 10:30-37.
- 8) 川副昭人(1987)佐用郡三日月町の蛾覚え書 てんとうむし(10):1-10.
- 9) 山本義丸(1996)兵庫県氷上地方の蛾類(1) きべりはむし 24(2):1-13.
- 10) 藤平 明(1987)南淡の蛾 自刊

兵庫県における冬虫夏草^{*}

付. コガネムシの冬虫夏草とコガネムシを食べるについて

高橋 寿郎

兵庫県における冬虫夏草とコガネムシの冬虫夏草

夏には草として実を結び、冬には虫と化して動きまわるといふ意味の中国名であるが、昆虫やクモ類から生えるキノコ(子の菌類)の総称で日本ではわりと種類が多く、既に300余種が記録されているとある(清水大典, 1994)。

本来は冬虫夏草の名称は中国奥地に産するコウモリガの幼虫に生じるもので、海拔3~4,000mの高山帯に特産分布するものであったが、現在では上記にのべたように昆虫やクモの他、一部菌類に寄生する同属のキノコの総称として扱われる。中国では、この冬虫夏草が長命強壯の秘薬として取り扱われ、薬としても珍重されているようで現在でも大いに珍重されると同時に、ものによってはかなり高価で販売されているようで、ためにでんぷんで作った偽物の冬虫夏草が市場に出現したりしているようである。

我国へは、慶長12年(1607年)中国から長崎へ李時珍の大著「本草綱目」が渡来して家康に献ぜられた。これが原典となって日本でも本草学が発展を始め冬虫夏草の名も広く日本に知られることになった。享保13年(1728年)には四川省産の現物が日本に届いたほか多くの本草書や「冬虫夏草図」(柚木常盤, 1801)、「千虫譜」(栗本瑞見, 1812)、雲錦随筆(暁晴翁, 1861年)などあいついで本邦産の冬虫夏草が紹介された。

冬虫夏草は薬用として古くから記述があり、四川省産のヨトウムシの一種の幼虫に寄生するそれは薬効が高いと云われている。難波恒雄はその薬能、用途について色々と記している(1980)。“肺、腎を益し、精髓を補い、血を止め、痰を化し、勞

咳をとめ……”等々長々と効能をかかっている。恰好が良いことからセミタケは珍重されているようであるが、その効能は「本草綱目」によればテンカンやヨナキに効能があるとか。とにかく冬虫夏草が薬として効能があるのかないのか良くわからない。中国では長命強壯の秘薬としても珍重され、又は中国の王宮料理にも重用されたとか冬虫夏草のスープ料理は世界最高の珍味としてよく知られている等々色々云われているが、どれも今一つ吾々には良くわからない点が多くある。

冬虫夏草は一般的には空中湿度が高く、空気が清浄で適当な樹陰(散光)地帯、広葉樹林が有力な候補地であると云われており、東海地方とか中部地方の自然状態の良い所に多く見られるようであるが、発生環境はかなりデリケートで簡単に説明出来ない点が多くある。

発生の場所とか時期、周期などまだまだ良くわかっていない点が多くある。

さて、この冬虫夏草の兵庫県下での記録はどんなものであろうか貧弱な筆者の所有文献から拾ってみたものを此処に紹介しておきたい。

先ず一番古く、また数多く記録された人として大上宇一を挙げなくてはいけない。大上宇一は菌類については色々と研究をしたようで「二千菌譜」(1923)のような書をまとめ、その中で冬虫夏草を156種も記録しているとある(大上宇一, 1922)。この「二千菌譜」と云うのは直接見ていないのでどのような記録の仕方をされているのかわからないが1992年の「大上宇一」の中では(p. 87)セミタケが図説されており、大上が発見の冬虫夏草15種の新種が記載されているとあり、その一部の和名も示されている(p. 88)(仙台第二高等学校教授安田 篤に送付した菌類403種の内に上記冬虫夏草の15種の記載がされているとある)。また、大上宇一が東

* 兵庫県甲虫相資料・329

京文理大 小林義雄に送付した *Cordyceps* 属の各種菌類の中にコエビガラスズメの蛹茸があることは山本義丸がのべている(1953)(東京文理大理科紀要 Sect. B. No. 84. 1941)。大上宇一の記録以後、兵庫県での冬虫夏草の報告というものは意外と少ない。1953年、山本義丸が氷上郡妙高山(標高564 m)中腹にてコエビガラスズメの死蛹に冬虫夏草が出来ているのを採集したと図をつけて示された。同時に同じものを大上宇一が1918年に採集していると報告(これは小林博士の論文によって)しておられる。

1972年、大平広士は篠山中野付近でハチタケを採集発表した。

1977年には山西 元が淡路島洲本市柏原山(標高569m)にてカメムシタケを採集している。

筆者も1975年頃から何年間に佐用郡大撫山にオサムシ掘りに出掛けていたが其処でオサムシが冬季成虫越冬しているのを掘り出すのであるが土中にある関係でオサムシタケが出来ているのに割合と出会った。その内いくらかは図示して紹介したが(1982)その気になって探すともっと見つけることが出来たのではないかと思っている。兵庫県下からの冬虫夏草の記録は僅かに以上のようなものである。

清水大典の「原色冬虫夏草図鑑」の中でイトヒキミジンマリタケと蟻に出来た冬虫夏草が神戸と四国香川県から僅数の記録があるとあった(pl. 92, f. 186, 260, p. 293-300)。いがいと兵庫県下での冬虫夏草の記録が少ないように思われる。一般にあまり注意していないからとも思われるが、県の中央部から北の方には注意すればまだまだ見つけることは出来ると思う。

さてコガネムシの冬虫夏草と云うのは筆者は採集したことは無いが、余り見つからないものかどうなのか、コガネムシの幼虫は土中生活者が多いので当然多く見られるかと思ったのであるが、こちらも意外と少ないように思われる。その中でもなかなか面白いと思った冬虫夏草が若干見られたので簡単に紹介しておく。

1952年に松井一郎はヒメコガネらしきものの幼

虫の胸部に冬虫夏草と思われる3つの突起物があるのが紹介されていた。1979年の清水大典の解説書はコガネムシタンポタケと云ってやはりコガネムシの幼虫の頭部や尾部から発生しているもの(タンポ型)、同じくコガネムシ科幼虫の頭~頸部から発生するハリタケ型のマルミノコガネムシタケと云うのが図説されている(p. 63, 68)。

また極く最近出版された清水大典の原色冬虫夏草図鑑の中でなかなか立派なコガネムシに発生する冬虫夏草がカラーで図説されている。1979年に図説されたコガネムシタンポタケ(p. 61, f. 170)、マルミノコガネムシタケ(p. 79, f. 212)が美しいカラーで示されているが他にもハグロコガネムシタケ(p. 61, 251, f. 170)、ヤエヤマコガネムシタケ(p. 62, f. 172, 251)、ケンガタコガネムシタケ(p. 73, pl. 199, 266)等々いずれもコガネムシの幼虫に発生するものであるがカラーで図説コガネムシタケとして成虫に発生する素晴らしい冬虫夏草(p. 53, 240, f. 151, lex. は台湾産)がカラーで図説されており、やはりコガネムシにもこのような冬虫夏草があるのだと感心させられた。

コガネムシを食べることに關して

昆虫を食料に供する習俗は一般には奇習とみなされる傾向がある。これほど地上に多い昆虫を何故に従来食料としてあまり利用しないのかと云うと、第一に必要な量を集めることが面倒なためであって、味や栄養の問題はその種類によっては決して他の動物社会に劣るものではないとある。日本の伝統的食用昆虫にイナゴ、ザザムシ、蜂の子、蚕、孫太郎虫、鉄砲虫などが知られている。此処では、このような虫と違ってコガネムシを食べることについての話をしぼってながめてみたいとおもう。

台湾ではコガネムシ類も煎って醤油をつけて喰う由である。またコガネムシ類(*Adoretus compressus* WEB, *A. convexus* BURMEISTER)が燈火に集まるのをかき集めこれを焼き翅鞘を除いて食べるとあ

る(江崎, 1984)。

イギリス人 W. S. BRISTOWE がシヤムおよびラオスにおいて見聞した事実を記述したものの中に牛や水牛の糞の中から集めた糞虫を盛んに食すると云った記述が紹介されている(W. S. BRISTOWE, 1932)。

V. M. ホールドがまとめている昆虫食に関する一文は仲々面白い話が集められている。その内いくらかを紹介する(1995)。

ローマの美食家たちはコウモリガの幼虫を小麦粉とワインで味付けし食卓を豊かにする習慣があったという。コウモリガ *Cossus* という単語が今日その名で知られる昆虫そのものを指しているのか否かにいささかの疑問があるのだけれどおそらくヨーロッパミヤマクワガタか大きなカミキリムシのたっぷりした幼虫を指すものと思われる。ローマの美食家たちは食べ物に関する限り最高に繊細な舌を持ち、また味を識別する能力に長れていた。そこで振り返るに我々はなぜ彼らが偉大なる珍味とみなしたものに関心を向けようとしなないのだろうかと記している。

ジャワではコフキコガネの一種(*Melolontha hypoleuca*)が住民によって食用にされておりヴィーデューンがそれを丁寧にスケッチして残していると。そして色々の昆虫食の中にコガネムシについて次のようなメニューが出てくる。即ちコガネムシの幼虫の辛味焼き、ヨーロッパミヤマクワガタの幼虫のせトースト、コフキコガネのカレー風味等々が他の昆虫食の中に入っている。実際にこのようにしてコガネムシ類を食べていたのであろうか。お隣の中国でも「」を食すとある。即ちコガネムシ類の幼虫である。一般に中国ではコガネムシの幼虫などは貧しい大衆の食べものであったと云った表現を見ることが出来る。

ここで面白い話が江崎悌三博士によってのべられているので紹介してみる。

カプトムシ幼虫の天ぷら。腹の中に堆肥や泥を一ぱい食べているので、まず魚を料理するように腹を割いて腸管を取除き、それにころもをつけて天ぷらにするのであるが、料理した生身はエビに

彷彿としているとあるが実際に口にして見ると、この虫の白い薄い皮が実はゴムのように硬くて強くてなかなか食べ切れぬ。更にその上驚いたことに腹わたを綺麗に掃除してあって生の時は少しも、そんな臭いがしなかったのに天ぷらにして見ると堆肥の臭いがぶんぶんするので大方の士は一口でやめてしまったとある。このことは江崎博士の教室に一緒におられた安松京三博士も体験をされたようで同博士の著書(1968)の中で同様のことを述べられた箇所がある。

実際問題としてコガネムシを食べている地域はあるであろうし、小さい時からその様な習慣で大きくなった者にとっては何の抵抗も無く受け入れられると思うが、そう云った経験の無い者がそれらを食べると云った行動に簡単に入って行くことは余程の条件が無ければ無理のように思う。

日本では今一つコガネムシを食べると云った風習があるとも思われず、現実には口に出来る状態が無いことは充分わかる。このようにコガネムシを食用に用いることには色々と問題がある。食べることはばかりで無く、漢方薬としてコガネムシを見ることも忘れてはいけぬと考えるが、こちらも色々と効能とか用途、目的等示されているし糞虫まで薬用になるような説明が吾々には今一つ理解し難い面があり"実際に薬としての効能があるのか無いのか"門外漢の者にとってはわかり難い点がある。いずれにしてもコガネムシ類を食べるとか薬用に利用すると云ったことはもっと良く調査しなくてはいけないように思われる。

昆虫界 Vol. 3, No. 17(1935)の中で(p. 294-296)"薬用並に食用昆虫報告"という記事があり、その中で熊本県天草郡御領村の山腰秀芳という人の報告の中に「ヒメコガネの幼虫」やはり焼いて子供の「カン」の薬とする。特に川柳に潜入するものは心臓病の妙薬と称せられると云うのがある(加藤正世博士はコガネムシの幼虫は土中あるいは稀に朽木に棲むものですが柳に寄生するものは他のものではないでせうかとの註をつけておられる)。

一般的にはわが国ではコガネムシを食べるとい

った習慣も無いようだし、これからもこの様なことは無いだろうと考えられるが、世の中がどのように変わって行くかは予測もつかない。或いはコガネムシが吾々の食料の一部になることも皆無だとは云えないように思われたりもする。

<冬虫夏草関係の参考文献>

- 小林義雄・清水大典(1983) 冬虫夏草菌図譜(保育社・大阪)
- 久保道徳(1996) 冬虫夏草(保育社・大阪)
- 松井一郎(1982) 冬虫夏草の一例「ヒメコガネ?」
新昆虫 5(6):4
- 藤波恒雄(1980) 原色和漢薬図鑑(下)(保育社・大阪)
- 大平広士(1972) ハチタケ(冬虫夏草)を採集 植物と自然 6(10):18
- 新宮町教育委員会(1992) 郷土の偉大な博物学者 大上宇一 新宮町文化財調査報告17
- 清水大典(1979) 冬虫夏草 グリーン・ブックス 51(ニューサイエンス社・東京)
- 清水大典(1995) 原色冬虫夏草図鑑(誠文堂新光社・東京)
- 高橋寿郎(1982) オサムシタケとオサムシの畸形 てんとうむし(8):28-29
- 山本義丸(1953) コエビガラスズメとその蛹茸 新昆虫 6(4):46
- 山西 元(1977) 柏原山冬虫夏草採集記 Parnassius (17):1

<"コガネムシを食べるについて"の参考文献>

- W. S. Bristowe(1932) Insects and other invertebrates from human consumption in Siam. Trans. ent. Soc. London Vol. 80:387-404.
- 江崎悌三(1933) 蜘蛛類を薬用または食用とする記録 本草 1(13):1051-1058 (江崎悌三著作集第3巻:253-258, 思索社)
- 江崎悌三(1942) 食蟲習俗考 宝塚昆虫館報 No.

27:1-8 昭和17年11月8日宝塚昆虫館第7回文化講座にての講演要旨(江崎悌三著作集第3巻:思索社 p. 259-269, 1984)

- 江崎悌三(1954) 虫を食べた話 芸林 1(4):4-6 (江崎シャルロッテ編 江崎悌三随筆集 p. 131-136, 北隆館, 1958)
- V. M. ホールト, 友成純一訳(1995) 昆虫食はいかが? ユリイカ 27(10):224-244
- 時事新報(1918) 戦時代用食としてのコガネムシ幼虫のフライ 昆虫世界 22(246):87
- 三橋 淳(1984) 世界の食用昆虫 B6. 270p. 古今書院・東京
- 周 達生(1989) 中国の食文化 B5. 465p. (株)創元社・大阪
- 津田 薫(1935) 民間の昆虫薬 昆虫界 3(20):470
- 渡辺武雄(1982) 薬用昆虫の文化誌 東書選書83 (東京書籍・東京) B6. 210p.
- 山腰秀芳(1935) 民間薬としての昆虫 昆虫界 3(17):296
- 安松京三(1968) 昆虫と人生 B6. 250p. (株)新思潮社刊

(追記)

脱稿後次の文献を見ることが出来たので此処に追記させて頂く。

上本弘幸 広島県産冬虫夏草 (比婆科学 No. 171 :43-50, 1996)

広島県西城町熊野、西城町油木においてケンガタコガネムシタケ、マルミノコガネムシタケと共にコガネムシの幼虫に発生した冬虫夏草をカラー写真をつけて紹介されている。コガネムシについての冬虫夏草の例は大変少ないので貴重な記録と思われるので此処に紹介しておきたい。

(VII・1996)

最近、北寺尾ゲンコツ堂著「ゲテ食」大全が出版された(1996)。昆虫食、特にカブトについてはなかなか面白い。いろいろと参考になる話が出ている。 (IX・1996)

ガロアムシの新産地と考察

市川憲平・相坂耕作

ガロアムシは1913年、カナダのロッキー山脈の高冷地で発見され、北アメリカと日本、それにアジア大陸の極東部だけに隔離分布する特異な昆虫である。我国では大正4年(1915)ごろ、日光中禅寺でフランスの外交官 E. H. Gallois によって発見されこの名がついた。ガロアムシ目は系統的關係がよく分かっていない一群で、コオロギとゴキブリの中間の形態を持っている。翅は無く単眼もなく、そしゃく型口器や交尾器などの形態から原始的昆虫と見なされ、生きた化石と称される。ガロアムシ目ガロアムシ科に属し、日本では1科1属6種類が知られている。兵庫県下のガロアムシの種類は確定されていないが、ガロアムシ *Galloisiana nipponensis* といわれている。通常ガロアムシは朽ち木や岩石、ガレの下、鍾乳洞などで発見されるもので、兵庫県下で従来から知られている分布地は南光町船越山、千種町三室山、温泉町肥前畑、山南町下滝のガレ下(1980年現在：奥谷禎一)で幼虫態にてみつまっている。

新産地について

今回、筆者らは今まで知られた分布地と全く離れた地域にて発見採集したものである(図1)。これらもすべて幼虫である。

筆者の一人市川は昨年(1996)の12月に、宍粟郡と夢前町の中間地点(A)標高約500mくらいのガレの下にて発見、採集した。生息地、雪彦から一宮町東河内へ抜ける林道の途中で、道路脇の小さな沢の近くである。この林道は完成したばかりで、沢も人手が入ったばかりのようであった。ガロアムシは沢近くの小さな岩の下で採集した(写真1)。

また一方の相坂は昨年夏、揖保郡新宮町牧(B)において昆虫分布調査を実施したおり環境としてガロアムシ生息の条件の整った地点であると確信



図1 ガロアムシ分布図と新産地
(奥谷禎一 兵庫県大百科事典より 1983)

ガロアムシ *Galloisiana nipponensis*

〈A地点データ〉 (写真1)

兵庫県飾磨郡夢前町と宍粟郡一宮町の中間地点

標高約500m lex. -X II-1996 Col. 市川憲平

〈B地点データ〉 (写真2)

兵庫県揖保郡新宮町牧

標高約250m lex. 4-I-1997 Col. 相坂耕作

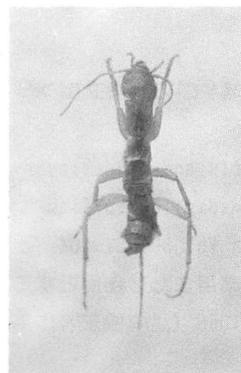


写真1

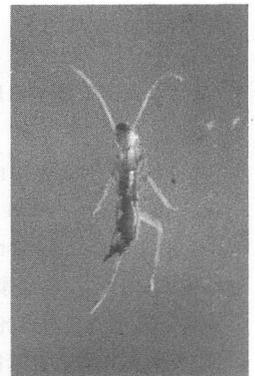


写真2

していた。しかし、あまりにも今までの分布地と比較して南すぎることと、低標高地であるという一抹の不安があったが、本年1月に採集を試み、発見したものである(写真2)。

成虫態のガロアムシについて

相坂は以前より、佐用郡南光町でのガロアムシの採集経験を何度かしており、そのほとんどが乳白色のいわゆる幼虫態であった。しかし、1986年1月に同地で採集した個体は体色の茶色の外骨格、体長などから成虫態と思われるもの

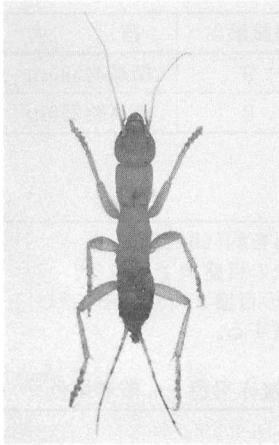


写真3

(神戸大学名誉教授奥谷禎一博士及び山崎柄根都立大学理学部教授に写真鑑定を依頼したところ、ほぼ成虫に間違いのないとのこと)であった(写真3)。

生息環境について

市川による飾磨郡夢前町と宍粟郡一宮町との生息地の状況と、相坂による佐用郡南光町の生息地点でのガレ地の環境が似ている点があり、今回、揖保郡新宮町の生息ガレ地と佐用郡南光町と比較してどのような湿地が県下の生息適地であるか探ることとした。比較の方法として、有機不純物試験と含水率試験を実施することにした。その試験を実施することにより、他の場所でも適合すればガロアムシの生息が可能であると考えたからである。

試験の方法

まず生息地のレキ混じりの土を採取し、筆者の勤務している会社の試験室において、いわゆる5

ミリ以上は砂利と称するので大きなレキは除去した(生息している場所は砂利やレキの中ではなく、その周囲のシルト、土、砂、腐葉土の間である)。そして恒温乾燥器にて105℃にて乾燥し含水を算出した。以上による含水結果は表1のとおりである。通常、降雨時以外は表面水はなく、表面乾燥飽水状態であるのが普通であり、含水率は図のような吸水能力または吸水量のこととなる。一方の有機不純物試験は土木学会で行われている試験と同じあつかいで実施した。生息地のレキを除いた試料を約500gをとり、試料を約400ccの無色ガラスびんに125ccの目盛まで入れ、これに3%の水酸化ナトリウム溶液を200ccの目盛まで加える。そして、びんに栓をしてよくふり混ぜ、1日おいて色の変化を見てみた。その結果が写真4のとおり。なお、含水率および有機不純物の参考資料を添付しておく(図2、表2)。

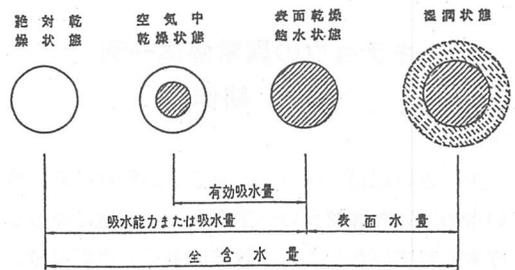


図2 含水状態による分類

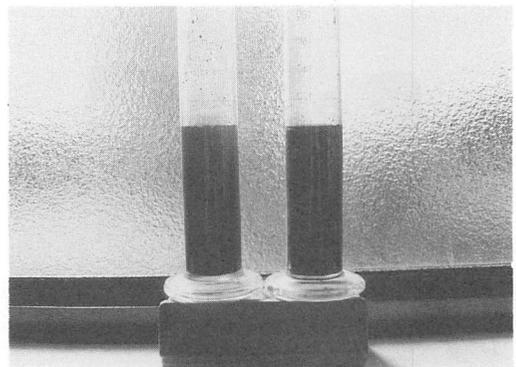


写真4

<参考文献>

(社)土木学会(1979) 土木材料実験指導書(基礎
・応用編)
奥谷禎一(1983) 兵庫県大百科事典 神戸新聞出

版センター
福島義一(1969) ガロアムシに関する研究(1)(2)
昆虫と自然

表1 生息地の含水率試験結果

生息地名	試料採集年月日	含水率試験%	備考
佐用町南光町船越山	1997年1月12日	49.9	標高約500m
揖保郡新宮町牧	1997年1月4日	42.2	標高約250m

表2 有機不純物試験の方法

- (1) 4分法または試料分取器によって代表的試料を約500gとる。
- (2) 試料を容量約400ccの無色ガラスびんに125ccの目盛まで入れる。
- (3) これに3%の水酸化ナトリウム溶液を200ccの目盛まで加える。
- (4) びんにせんをしてよくふりまぜ、24時間静置する。

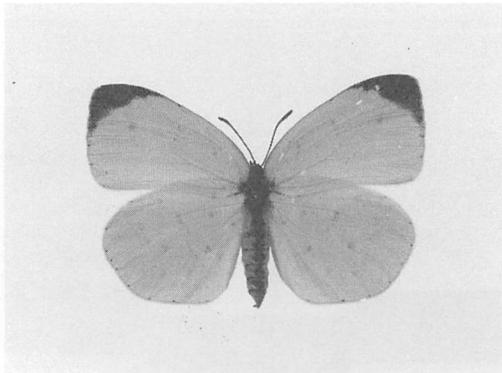
※色の変化(5段階)

1. 無色ないし淡黄色
2. 濃黄色
3. 赤黄色
4. 淡赤褐色
5. 暗赤褐色

キチョウの異常個体一例

相坂 耕作

少し古い記録となるが、筆者が20年ほど前に買い求めていた鉢植えの一才ネムノキを地に降ろし庭木としていたところ、数年前キチョウが産卵していたので寄生されるのも可哀想と思い、飼育し



写真：キチョウの腹部異常個体

ていたところその中の一頭が羽化したときに異常に腹部が太くなっているのを発見、標本とした。乾燥すると腹部もスマートになると思ったが、そのまま腹部が太いため、ある機会に白水博士におたずねしたところ、飼育をしているところのように腹部が膨大したものや腹部がスカスカのものが時に出てくるとのことで、病的個体と考えている。自然状態(野外)では見たことはないが、こういう個体は生きていけないのだと述べています。

まさに腹部が膨大した個体は大変グロテスクである。とり急ぎ写真を見て種々解説いただいた白水隆博士に厚く御礼申し上げます。

絶滅商品 トンボ印のバリカン

相坂 耕作

日本では古くからトンボはめでたい虫として愛され、また「勝虫」として武具をはじめ日本古来の品々に多くそのデザインが使われている。筆者の私設資料館にも、ハーモニカをはじめトンボのマークのグッズが多数あり、そのなかにバリカンにトンボのマークのついたものが数点あるので紹介しておきたい。

筆者の愛読している本のうち、隔週発行している(株)小学館発行の「サライ」誌に絶滅商品のコーナーがあった。そのなかにバリカンが登場したり、超ロング・セラー絶滅寸前商品という単行本が同じく(株)小学館で発行されている。それらの本と友人の理髪店主の私信などを参考にバリカン考を記してみる。

兵庫県には金物の街として有名な三木市があり、刃物がたくさん製造されている。はたしてバリカンも三木市でつくられたものかどうか三木市にある金物資料館に問い合わせしたが、ここでは大工道具が主をなしているらしい。

バリカンは、明治時代にヨーロッパから渡来したもので、フランスの製造会社名(Barriquand et Marre)からついた散髪用の器具である。

日本のバリカンの品質は世界でもトップクラスだったというが、いつしか電動バリカンに変わってしまった。また、今の理髪店ではハサミが主役をなしている。理容師の国家試験でも手動バリカンの技術は問われなくなると聞く。もはや理容界の主役はハサミにとって代わられたらしい。そのハサミも第二次世界大戦中の我が国ではハサミが統制で製造禁止になったというが、バリカンには何の規制もなく製造が続けられていたそうである。

子供の頃、首に風呂敷やタオルなど大きな布を肩に巻き、縁側に座り父親や母親に手動式バリカンで丸坊主の頭を刈りあげてもらい、首すじに刈った毛が入り随分かゆい思いをして、あわてて風

呂に入ったり、髪の毛をバリカンの刃が引っ張って痛いおもいをした諸兄も多いのではないだろうか。あのころは、兄弟みんなが丸坊主頭やおかつぱ頭に仕上げられた時代であった。そのバリカンを製造している会社は、第二次世界大戦直後には東京だけでも39社もあったそうである。ところが現在では、製造及び在庫を残すのは全国でも東京理器(株)や中央理器など僅か2,3社という。いわば絶滅商品となってしまったものである。

日本にバリカンが伝わった当時は、馬の毛を刈るバリカンを真似て作られ、両手で操作する方式もあった(写真1:左)。その後はおなじみの形が定着し、デザイン等はほぼ変わっていない。部品はハンドルとよばれる下腕と上腕、下刃と上刃、ネジ類の8部品の構造である。ハンドル部分は鋳物が多く専門の工場生産されるそうだ。刃は、炭素鋼を圧延して切り出し、フライス盤で削り出すとできあがる。昔から各社が作るバリカンには互換性がなく、部品の使い回しも利かないため各社微妙に刃の形が違う。その刃の下刃には各メーカーがトンボをデザイン化したマークをつけている。筆者が集めたバリカンの中に、絶滅したバリカンのトンボ印があるので紹介してみよう。

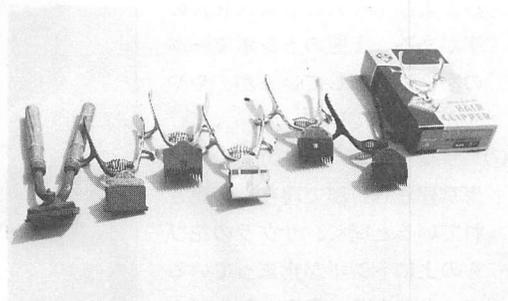


写真1 トンボ印バリカンの色々

① 戦前のバリカンで持つ手は木製品である。これにはトンボのマークは付いていないが民俗的価値があるので紹介しておく。

② YAMATONBO(ヤマトンボ)印のマークがついており、トンボの絵の下に山の字がある。その他TRADEMARKと特級の字がある。ヤマトンボとはヤンマのことか？

③ SAWAMURARIKICO(サワムラ理器鋼)印のマークにTRADEMARKに特製の字がある。トンボがSと共にデザイン化されている。

④ NIPPONRIKICO(日本理器鋼)印のマークにTRADEMARKに特製の字がある。トンボが地球を背負っている姿がデザインされている。

⑤ DRAGONFLY(ドラゴンフライ)印のマークにISHIMARUMEG. およびTRADEMARKの字がある。マークのドラゴンフライ(トンボ)にちなみトンボの図柄がある。メーカー名よりISのマークもついている。

⑥ 同じくDRAGONFLY印のマークにREGISTEREDおよびTRADEMARKの字がある。上記のトンボマークの図柄に酷似しているが、ややずんぐりしている。

⑦ サクラトンボバリカンの箱で、東京理器(株)製で現在も販売されていると聞く。サクラの花びらの上にトンボが止まっているマークがあり、TRADEMARKの字がある。

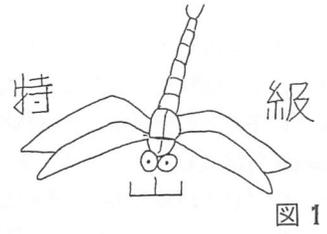
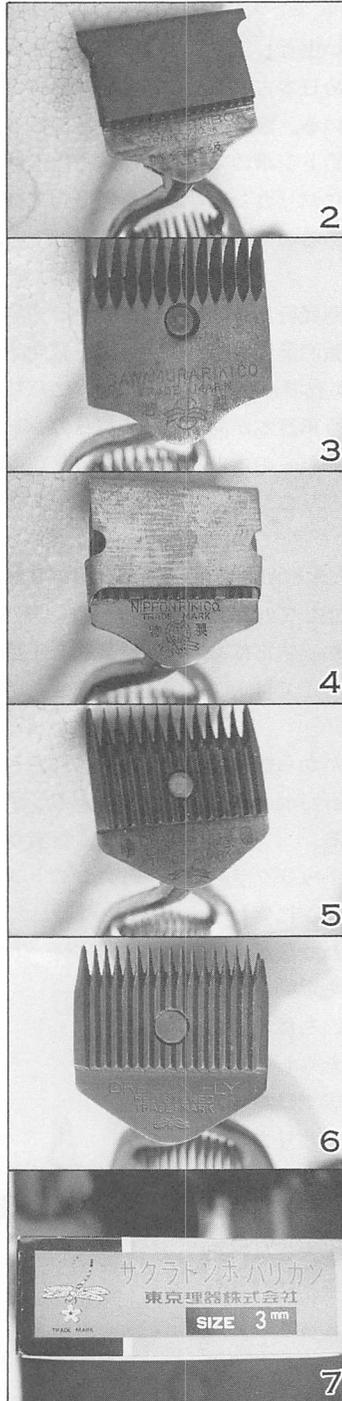


図1

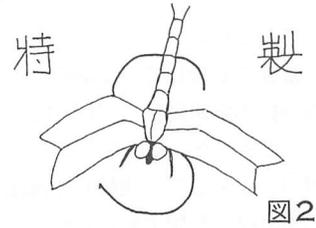


図2

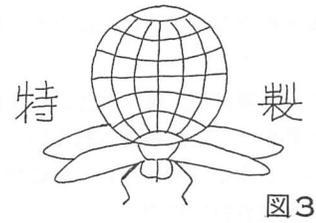


図3

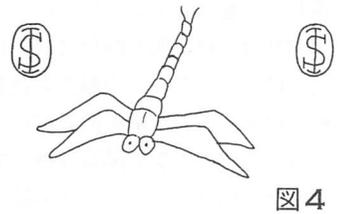


図4

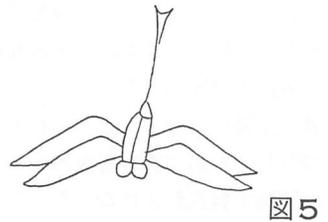


図5

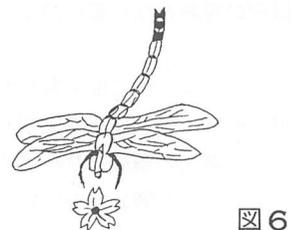


図6

上海紀行 その 3

相坂 耕作

娘の短大入学祝いに約束していた海外旅行を、今回引き続き上海を拠点に蘇州も訪問することとなった。平成8年1月の第2土曜日は勤務先が休みであり、日曜と祝日が重なり3連休となるので1日有給休暇を貰い4日間の旅となった。娘は初の海外旅行となるので大変喜んでいられるらしく、多くの友人に知らせたためにお土産が大変かとおもう。今回はJTBを利用し、宿泊は前回と同じく銀河賓館ときめた。何しろ空港から近いという利点があるため早く自由になれるのが最大の理由だ。

1年1ヶ月ぶりの上海訪問となったが、残念ながら円安のうえ物価がうなぎ昇りにあがり、そのうえ中国人もチップなれしているらしく昔の共産国にほど遠くなっているように思えた。昨年台湾を加え3度目の関西国際空港での旅立ちとなった。

1月13日 前日から修理中の歯の穴に埋めていたゴム状のかぶせがとれていたため朝一番から歯医者へいき治療をし、中華料理を食べる準備をととのえた。娘と車に乗り新幹線近くの駐車場へいれ新幹線に乗りしようとしたが予定の時間の列車がなかった。駅員からきくと季節列車らしく1列車遅く乗車することになってしまった。新大阪から関空特急「はるか」に乗り、関空に着いた時は集合時間の11時30分をやや過ぎていた。今回初めて乗る中国東方航空での旅立ちとなった。

昼1時30分よりのフライトで、時差1時間の関係で2時45分ころ上海虹橋空港に到着、入管手続きを済ませホテルに着いたのは4時頃となっていた。早速タクシーに乗り中国の昆虫民俗資料を求めるため自由市場へ出向いたが5時終了の間際だったためあまり物色できず、僅かの資料入手となってしまった。その後、歩いて上海の南京路を散策した。初めての海外旅行の娘にとってみる

ものすべてが珍しく映ったことだろう。

さて、フリーの旅行ゆえ、たちまち夕食に困ったが南京路の一画でショーケースの中の見本を指差し食べることが出来た。いろいろショッピングを楽しみながら最後には上海友誼商店へ。ここではセミやバッタの風を購入し、いつしか時間が9時頃となりタクシーにて宿泊ホテルの銀河賓館へ戻り旅の疲れを癒すこととなった。

1月14日 5時45分のモーニングコールをしておいたが早く目が覚めた。今日は筆者が是非一度訪問したいと願っていた寒山寺のある蘇州への旅である。オプションツアーでの参加は今まで一度も体験したことがなかった。朝早く朝食をとり、7時過ぎに旅行社がマイクロバスにて迎えにきた。あつかましい運転で約2時間で蘇州についた。

蘇州は運河が網の目のように走る水の都であり、運河沿いの白壁の家や樹々が水面に陰を落とす素晴らしいところである。最初に訪問した観光地は中国最古のレンガ塔、虎丘斜塔である。その後は留園へ行きすばらしい庭を鑑賞した。留園は蘇州の四大名園の一つで、清代の庭園様式を今に伝えている。中華料理の円卓を囲み昼食をとる。次ぎの訪問地は筆者にとって最も待ち望んでいた寒山寺である。中唐の詩人・張継の漢詩「楓橋夜泊」に詠まれた有名な寺である。とくにここにある鐘は有名で日本から「除夜の鐘」をつきに多く訪れる。

筆者も娘と共に願いがかなうように3回鐘をつけてきた。寒山寺は南北朝梁の天監年間に創建されたが、焼失と再建を繰り返し、現在のものは清代末に再建されたという。寒山寺は最初「妙利普名塔院」といったそうだが、唐の貞観年間に寒山と拾得という2人の僧侶が住むようになって寒山寺とよばれるようになったと聞いた。今の住職はかなり偉い僧侶だそうで、広い中国でも4本の指



写真①



写真②



写真③



写真④



萬洪成

中國剪紙學會上海剪紙學會理事
中國工藝美術學會會員
上海工藝美術廠高級工藝美術師

萬洪成氏による剪画で特別に切ってもらった
左にトンボ 中はヤゴ 右は千支の牛

写真①：寒山寺のシンボル鐘楼前にて

写真②：除夜の鐘で有名な鐘をつく

写真③：寒山寺の住職 性空僧侶

写真④：中国工芸美術会の会員さんと日中友好の記念撮影 左より肖応棋(中国古玩の昆虫シュロ編み名人)：劉萍(泥人形作者で有名)：筆者：萬洪成(剪画で有名、上海市在住)：娘

に入るとか。名を性空(しょうくう)といい、案内人によると日本では僧侶も妻をめとるが、性の空(からっぽ)のことだそうである。この日もマレーシアから尼さんが表敬訪問し寄進しておられ、一筆書を揮毫されておられた。最後にいったところはシルク博物館である。蚕に関する資料や絹についての織物を紹介しているが、規模だけ大きくて、日本各地にある郷土資料館の養蚕資料のほうが興味深く感じた。どちらかという博物館に併設してある土産物を買わずため連れてきた感じがしたので一切ショッピングはしなかった。

1月15日 どうも雨男らしく、筆者が上海へいくと毎回雨が多い。今日も雨模様である。まず、上海自然博物館へタクシーで乗りつけたが、お休み。続いて友誼商店古玩分店へいくが改築中でお休み。仕方がないのでシャンゼリゼ通りと称される淮海路へ行って娘のショッピングに付き合った。雨が止みそうもないので大きな傘を買うため友誼商店へめざした。昼食がまだだったので友誼商店前の〇〇酒家へいき、さっぱりわからないまま中華料理をたのんだ。知らないままに北京ダッグをはじめ大きな魚を茶碗蒸してまいたようなものなど6品も出てきて多く残してしまうことになった。その後友誼商店へいき大きなチョウ胤を入手。しかし、うまく通じなくて約8人の店員さんと交渉し購入した。娘は麵塑細工(小麦のようなものを練った粘土のようなもの)で自分の肖像を作成してもらいご満悦の様子であった。時間の関係でタクシーでホテルに戻った。1昨年前に通訳をして頂いた方さんと6時に会う約束をしていたため、久しぶりに再会できた。その後まだ夕食を食べる雰囲気ではなかったので、昨日に引き続き友誼商城へ出掛け、中国の紡績関係の大学のファッションショーをみて過ごした。それから前回訪問から懇意にしている中国民芸の有名な作者たちに自分の切り絵(もちろん虫つき)などを作ってもらったり、草編みの昆虫を入手したり、京劇の面に蝶の絵を書いた相坂耕作的胡蝶なる特製のものを作成して

もらったりして軽食を買い込みホテルに帰った。

1月16日 朝便の飛行機に乗るため8時10分の集合となった。そのため早くから食事をとりいつでも帰れる態勢をとった。迎えのバスがきて乗り込み早速出国の準備が始まった。現地係員と別れ、いよいよ上海再見となるわけだが一向に搭乗させてくれない。原因がなにかわからないうち約1時間30分遅れで離陸し機上の人となった。

今回も、何かと種々いような昆虫民俗資料が入手できラッキーな旅となった。

イシガケチョウの記録 唐土 洋一

セイダカアワダチソウの花で吸蜜しているテングチョウを写真撮影していたところ、イシガケチョウが山の上方より降りてき、付近を滑空した後、セイダカアワダチソウの花で吸蜜を始めた。近寄ると、すぐ飛び立ち付近に生えているヨメナ、イタドリ、セイダカアワダチソウの花といった順で吸蜜していった。

1996年10月23日 午後2時30頃 相生市矢野町小河にて1♀(黄色型)採集。

イシガケチョウはこのところ、少ないながらも毎年観察出来るようになった。これまでに私が記録(目撃)したのは次の通りである。

- ① 1ex. (白色型) 目撃 1994年6月16日 美方郡温泉町霧ヶ滝溪谷……文献1)
- ② 1♀ (白色型) 1994年8月24日 岡山県英田郡西粟倉村景清
- ③ 1ex. (白色型) 目撃 1994年8月28日 相生市矢野町三濃山(鍛冶屋谷)……文献1)
- ④ 1♀ (黄色型) 1994年10月16日 赤穂市周世……文献1)
- ⑤ 2ex. (白色型) 目撃 1995年6月25日 龍野市

揖保川町馬場

- ⑥ 1♀(黄色型)目撃 1995年10月10日 相生市矢野町小河
- ⑦ 1ex.(黄色型)目撃 1995年10月10日 相生市矢野町小河
- ⑧ 1♀(白色型) 1996年6月13日 揖保郡揖保川町馬場



イシガケチョウ♀

相生市矢野町小河 1995. 10. 10 撮影

<参考文献>

- 1) 難波通孝(1994)イシガケチョウの飛翔 自刊・岡山
- 2) 難波通孝(1996)岡山の蝶 山陽新聞社・岡山

兵庫県南西部のウマノスズクサと ジャコウアゲハ 唐土 洋一

ジャコウアゲハの食草であるウマノスズクサは田畑の畦、河川の堤防、墓地等に広く分布していたが、道路拡幅工事、ほ場整備工事、河川の改修工事等でめっきり減少してしまい、ジャコウアゲハも地域によっては稀少種になってしまったようだ。

1. ウマノスズクサ分布の概要
相生市 佐方・青葉台(植栽)

若狭野町入野・若狭野・下土井

- 矢野町下田・上・三濃山・能下・釜出
- 赤穂市 有年牟礼・木津
- 龍野市 中垣内
- 上郡町 野桑・金出地・岩木甲
- 揖保川町 馬場
- 新宮町 栗町

上記外の市町にも分布していると思われるが、調査不足で確認していない。

2. ジャコウアゲハの特異性

雌蝶はランダムに卵を産みつける。人間のように産児制限といったことはしない。もう少し、食草とのバランスを考えて産めばよいのに……。

沢山産まれた卵から幼虫も孵化する。理解出来ないのは、なぜ、食草の茎を喰いきり、枯らしてしまうのか。この習性がなかったら、餓死せずもっと多くの成虫が羽化出来ると考えるのは、短絡的な考えか。

3. ジャコウアゲハ受難の例

- 1) 河川の堤防上、田畑の畦に生えているものは、丁度、産卵等が終り若令幼虫時に環境整備のために、刈り取られてしまう。
- 2) 同じく、晩秋に火入れ等で焼き払うこともある。
- 3) 墓地等では、盆前に環境整備のために刈り取られることもある。

上記に示した例のように、通年をとおして観察出来る場所は少なく、食草のみで蝶がいないうところも多々出てきている。

4. 保護の例

ジャコウアゲハは平成元年に「姫路市の蝶」に指定されている。姫路市青山にある「自然観察の森」ではウマノスズクサを植栽し、この蝶を多数繁殖させている。これからは、特定の場所に食餌植物を植え蝶を呼び寄せ、繁殖させることも一つの方法かもしれない。

<参考文献>

久保快也(1987)チョウのはなし I 技報堂出版株式会社・東京

兵庫県赤穂市の蝶類補足

唐土 洋一

兵庫県赤穂市の蝶類としては、岩村 巖(1979)により9科73種が報告されている。その後、新たに追加されたものを以下に記しておく。

アゲハチョウ科 1種

ミヤマカラスアゲハ 1♀ 1981. 9. 30

赤穂市周世 唐土洋一……文献 4)

同上 1♀ 1996. 10 赤穂市有年牟礼 唐土洋一

タテハチョウ科 1種

オオムラサキ - データなし

赤穂市有年横尾 ……文献 5)

同上 越冬幼虫 5頭 確認 1995. 11. 26

赤穂市東有年 唐土洋一

イシガケチョウ 1ex. 目撃 1979. 7. 16

赤穂市坂越(大泊) 橋田和則……文献 7)

同上 1♀ 1994. 10. 16 赤穂市周世 唐土洋一
文献 6)

シジミチョウ科 1種

ムラサキツバメ 1♀ 1981. 9. 5 赤穂市周世
唐土洋一……文献 3)

同上 若齢幼虫2頭確認 1996. 8. 31 赤穂市
周世 唐土洋一

従って、赤穂市より記録された蝶は4種追加され9科77種となった。

<参考文献>

- 1) 岩村 巖(1968)西播の蝶分布資料(5) 赤相の蝶類 兵庫生物5(5):386-397
- 2) 岩村 巖(1979)西播の蝶分布資料(6) 赤穂市の蝶類 ひろおび(4):1-9
- 3) 唐土洋一(1981)西播におけるムラサキツバメ

の新産地 てんとうむし(7):19

- 4) 唐土洋一(1982)西播のミヤマカラスアゲハ採集例 てんとうむし(8):49
- 5) 広畑政巳(1987)兵庫県産蝶類分布資料(4) てんとうむし11-22
- 6) 難波通孝(1994)"1994"イシガケチョウの飛翔 自刊・岡山
- 7) 大貝秀雄(1995)赤相地区の蝶3種の記録 姫路昆虫同好会結成20周年記念-てんとうむし特別号「遊蟲千年」:60-61

ヒメアカタテハの食草について

唐土 洋一

【観察例1】

相生市若狭野町下土井の小河川沿いに生育しているカラムシ葉上より、アカタテハと思われる終令幼虫を2頭採集した。自宅にて、カラムシを与え飼育したところ、ヒメアカタテハが羽化(1♀, 1996. 8. 6)してきた。

<参考>1996. 8. 8 アカタテハ 1♀羽化

従来、ヒメアカタテハの食草としては、ヨモギが広く知られている。今回、見い出された幼虫は、アカタテハに混じっていた。

【観察例2】

1996. 8. 31 相生市若狭野町八洞の県道沿いに生えているヨモギに産卵している雌を見つけた。手づかみしテイッシュでくるみ持って帰り、ヨモギに産卵(9月1日)させた。孵化後カラムシ(相生市佐方産)を与え10頭ばかり飼育したところ、9月24日1♂をかわぎりに次々と羽化していった。

<参考文献>

- 1) 近藤伸一(1984)兵庫県におけるヒメアカタテハについて ひろおび(7):1-14
- 2) 福田晴夫他(1983)原色日本蝶類生態図鑑(II) 保育社・大阪

数種類の甲虫の記録

相馬 明直

筆者は、記録の少ない甲虫数種を採集している
ので報告しておく。

1. *Tenomerga japonica* (TAMANUKI)
ヒメナガヒラタムシ
1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 6. VIII. 1994
2. *Protaetia lugubris* (HERBST)
ミヤマオオハナムグリ
2exs. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 23. VII. 1992
1ex. 同 上, 5. VIII. 1993
1ex. 同 上, 16. VII. 1994
3. *Chrysobothris ohbayashii* Y. KUROSAWA
オオムツボシタマムシ
1♀ 姫路市青山, 10. VII. 1996
4. *Kibunea ignicollis* (LEWIS)
キンムネヒメカネコメツキ
3exs. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 16. VI. 1996
5. *Shirozulus ishidai* (KISHII)
イシダコガネホソコメツキ
1♀ 養父郡大屋町横河溪谷, 17. V. 1988
1♀ 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 29. VI. 1990
6. *Ometes rugiceps* (LEWIS)
チビホタルモドキ
1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 1. VI. 1996
7. *Helota cereopunctata* LEWIS
ミドリオオキスイ
1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 18. V. 1991
8. *Auletobius submaculatus* (SHARP)
モンケシツブチョッキリ
1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 16. VII. 1994
9. *Callipareius kojimai* MORIMOTO
クロツツホソミツギリゾウムシ
1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 9. VIII. 1985
1ex. 同 上, 3. VIII. 1987
10. *Karekizo impressicollis* MORIMOTO

シロカレキゾウムシ

1ex. 宍粟郡波賀町赤西溪谷, 29. X. 1985

11. *Atrachodes murakamii* MORIMOTO

ムラカミカレキゾウムシ

1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 13. VII. 1996

12. *Colobodes ornatus* ROELOFS

ワモントゲトゲゾウムシ

2exs. 相生市三濃山, 1. VI. 1982

13. *Rhyssematoides flavomaculatus* MORIMOTO

キボシクチカクシゾウムシ

1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 28. VII. 1987

1ex. 同 上, 22. VII. 1988

1ex. 養父郡大屋町横河溪谷, 15. VI. 1991

1ex. 宍粟郡波賀町坂の谷林道, 27. VI. 1991

1ex. 同 上, 21. VII. 1991

14. *Cryptoderma fortunei* (WATERHOUSE)

オオシロオビゾウムシ

1ex. 姫路市青山, 13. VI. 1996

アサギマダラの記録

唐土 洋一

相生市壺根にて飛翔中のアサギマダラの雌を採集したので報告しておく。壺根は相生市南端にある漁村で瀬戸内海に面している。この時期に卵をもっているのかどうか、キジョランに産卵させてみたところ十数卵産みつけたがすべて無精卵であった。

1♀ 1996年10月13日 相生市壺根

インターネットを用いた昆虫採集入門 大貝 秀雄

インターネットなど何の関係もないと思っていらっしやる虫屋の方は多いのではなからうか。かくいう私もつい最近までその一人であった。しかしながら実は密かに会社での仕事の必要上ほんのときたまながらインターネットを利用することはあった。ただそのような場合でも他の人がブックマークに入れておいてくれた相手先の名前をクリックするだけで自動的に接続される仕掛けになっていたのでネット上を(補虫網ではない)サーフィンする必要などはなかった。また、それ以上に私にとって有益な情報など入っているはずはないという強い思いこみがあったので敢えて触れてみようとはしない日々が続いていた。

冬の近づいたある夜、待ち時間ばかりが長い仕事で遅くなる日であったが私はちょっとした遊び心からいつも使っているマッキントッシュからインターネットキットを開いてみた。まず私が勤めている会社のホームページが出る。そして Net Search と書いてある所を初めてクリックした。画面が変わりいくつかのサーチシステムから選択せよとの指示が出たので、ずっと以前に聞いた説明のうろ覚えでヤッホー(Yahoo, 英語ではヤフーと発音するらしい)という所をクリックしてみた。そうするとスポーツとか芸能とかいろんなジャンルから何かを選択しろと言ってくる。その中で虫が一番良く出そうな場所ということでとりあえずサイエンスを開き、今度は動物学というように次々に適当に選んで進んでいった訳である。次の瞬間、忽然とそれは美しい蝶の姿が原色で私の前に現れた。その他にもいろんな所を次々たたくとヘラクレスオオカブトが落ちてきたりハキリアリが襲ってきたりで大変なことになってしまった。その日、インターネットによる昆虫採集の初日であったが私は10分とかげずに思いもかけない収穫を手に入れていたのである。それは今私が一番熱中している長翅目(シリアゲムシ類)の全世界の種名リストと1800年代以降の主要文献リストで

あった。そのとき私は本当にこれはすごいことになったと気づいた訳である。例えばモルフォチョウやユカタンピワハゴロモの生態写真なら、これまでも本で見ることができたわけであるが、種名リスト、文献リストとなるとそうはいかない。昆虫のグループによっては大学の昆虫学研究室でも容易に手に入られないものが多かったのではないだろうか。ところが、ほんの少しの英語力とインターネットに入る勇気さえあれば誰もがそれらを一瞬で入手できるようになったのだ。それは、アマチュアの昆虫愛好家が居ながらにして専門の研究者と同じレベルの知識を持つことを可能にするものだともいえるだろう。

最後にインターネットでネットインした昆虫の保存方法についても簡単に触れてみたい。文字だけの情報であればそのままプリントするのもよいけれどもマックライト・ワードなどのワープロ書類を開いてそこにコピーペーストすることをお奨めする。そうすれば、収集した情報を自分で自由に編集することが可能になる。生態写真やドローイングも同様で、私は Canvas または Adobe Photoshop のファイルにコピーしてMO(光磁気ディスク、フロッピー200枚分の記憶量)に保存することにしている。例えばこのようなファイルを After Dark といったスクリーンセーバーのフォルダーに入れておけばスライドショーとして鑑賞することもできるし、単に残しておくだけでも華麗な標本箱ができあがるに違いない。

(本稿は、パソコンで少なくともワープロ位なら何とかできるという読者を対象として書かれました。それ以上の方にはつまらない話だったのでしようし、それ以下の方にとっては意味不明の戯言と感じられたことと思います。またアプリケーションソフト類はマッキントッシュで利用できるものを中心に述べました。)

E mailaddress; hogai@po.diag.otsuka.co.jp

兵庫県昆虫館所蔵の長翅目標本について 大貝 秀雄

南光町船越にある兵庫県昆虫館は故平山修次郎氏所蔵の逸品を中心とした展示が今も人気を集めている。1996年7月にここを訪れた際に、当館付近で採集されたと思われる長翅目の標本が展示されていることに筆者は気づいた。分布資料として重要と考え注意して観察した結果、同定の誤りも認められたため僭越ながらここで訂正しておきたいと考えた。標本は11点あり一部ラベルの文字が判読困難になっていたが、すべて1970年代頃に南光町船越で採集されたものであった。展示内容は次の通りである。(種名と採集日は表示の通り。採集地はすべて南光町船越。)

1. シリアゲ 2♂♂1♀ VIII-73, VIII-73, VIII-78
2. プライヤシリアゲ 3♀♀ 12-V-76, 14-IV-77, 20-V-77
3. シバカワシリアゲ 1♀ 25-V-82(?)
4. キリシマシリアゲ 3♂♂1♀ 3-VI-76, 20-IV-77, 7-V-77(?), 10-V-77(?)

"シリアゲ"はヤマトシリアゲ (*Panorpa japonica* Thunberg) であろう。しかし標本ラベルが正しければ播磨の低山地では体色が黄褐色の *klugi* 型しか見られない時期の採品であるにもかかわらず雌雄とも黒色である点が気になった。播磨の高標高地では8月に黒ないし黒褐色の"シリアゲ"が見られる。しかしそれらと *Panorpa japonica* との同一性については本誌の別項で述べたように疑問があり、現時点では外見からの同定はできない。

"プライヤシリアゲ"と"シバカワシリアゲ"は同一種で、正しくはホソマダラシリアゲ (*Panorpa multifasciaria* Miyake) とすべきものであった。真のシバカワシリアゲは現在シバカワトゲシリアゲ (*Panorpa arakavae* Miyake) と改称されている。これは中部・北陸・関東の山地に分布する全くの

別種で、むしろ下記のキシタトゲシリアゲ (*Panorpa fulvicaudaria* Miyake) と近縁である。

"キリシマシリアゲ (*Panorpa kirishimaensis* Issiki)" はキシタトゲシリアゲ (*Panorpa fulvicaudaria* Miyake) のシノニムのひとつである。しかし、この標本の採集者が利用可能であったと思われる北隆館の原色昆虫大圖鑑では本種がキリシマシリアゲとして紹介されているので無理からぬ誤認であったろう。一方で最近、九州と中国地方西部のものは、播磨を基産地とする本種とは区別し得ると考えられるようになり(宮本正一、私信)、キリシマトゲシリアゲの名は亜種名として復活しそうである。もちろんその場合でも船越産の個体は疑いなく原名亜種に帰属する。

カラスザンショウに産卵するキアゲハ 唐土 洋一

1996年8月31日、自宅庭に置いている鉢植えのカラスザンショウにキアゲハが産卵しているのではないですか。カメラを取り出し写真をパチリ、2枚しか撮れなかった。

卵数を確認するため近寄ってみると、すでに葉上には1令幼虫が5頭ついている。卵は都合3卵



産卵に訪れたキアゲハ

産まれていた。

鉢植えのカラスザンショウを庭に放置しておいたところ、毎日に幼虫は減りすべて消えてしまった。恐らく、クモかアリに捕食されてしまったものと思われる。

<参考文献>

唐土洋一(1981)カラスザンショウを食べるキアゲハ てんとうむし(7):24

兵庫県美方郡温泉町のギフチョウ

唐土 洋一

① 1993年5月13日、扇ノ山(1,310m)へギフチョウの観察に向いた。ウスバサイシン喰いのギフチョウがいると聞き及んでいたためである。一路、R29を北上し鳥取県の八東町富枝より「丹比ふるさとの森」を経由して登山口へ、そこより歩くこと63分で頂上に立つ(扇ノ山への最短コースである)。風強く曇り空、気温も低い、とてもチョウの飛んでくる状態ではない。頂上避難小屋にて休息後、兵庫県の畑ヶ高原に降りるべく尾根を北へ約5分たどると、何と、大ズッコから北東面の谷は雪また雪、この装備ではとても降りられそうもない。やむなくもとの道を引き返す。

② 1994年6月1日、ギフチョウの飼育も一段落といったところ、さてと、もう一度チャレンジしてみようかとR29を北上、鳥取県の群家町堀越より雨滝街道、河合谷林道を経て入山。

林縁沿いを探すこと約30分で7卵塊(6, 6, 6(1), 5, 4(1), 4, 3卵)計26卵と2卵塊計8卵痕が確認出来たが、何者かに吸われている空卵が結構あった。

ここでは、ウスバサイシンとサンインカンアオイが入り交じって生えており、卵は明るい林縁沿いのサンインカンアオイの方に産み付けられている。ウスバサイシンは完全に葉が伸びきっており、

花も少ないながらもついていたが殆ど見受粉花であった。持ち帰った卵、3卵塊計13卵は6月3日から6月6日にかけて孵化し、ウスバサイシン、サンインカンアオイの2通りで飼育したが、どういわけか食いつきが悪く、若齢期に多く死んでしまった。終令時に一部ヒメカンアオイを与え、6月30日にしてようやく蛹になったが、たった3頭という惨憺たる状態であった。高温時の飼育という悪条件に加え、若齢時には柔らかい新葉が必要なのかもしれない。

(補足) 越年させた3頭の蛹は、管理が悪かったのか死亡していた。多雪地帯のものは、冬場の乾燥に弱いような気もするので、再度挑戦して、調べてみたい。

追記：扇ノ山方面は林道が整備(ダート道もあり)されており、特に走行に支障をきたす事はないが、たまに不愉快な思いをすることがあるので気になるかたは関係先に問い合わせしてから入る方がよい。どういことかという、雪解け後の「法面の崩壊、土砂崩れ防止等」の治山工事に出くわしたときである。工事の請負先が道路使用許可条件を下請けに順守させずに着工させているケースが見受けられる。特に、「通行止」の場合に問題があり、工事通告・迂回路等の表示を怠っているがために、「通せ、通さない」といったもめる因となり、最悪の場合、もとの道までえんえんと引き返さなくてはならない。特に、平日の日は要注意である。

<問い合わせ先>

①河合谷林道 鳥取警察署(県警本部)

0857-23-0111

②扇ノ山林道、河合林道 群家警察署

0858-72-0078

③扇ノ山から広留野への立ち入り 管理者：小谷久雄(鳥取県議)

0858-84-3139

注) 開拓道路は、道幅も狭く急勾配である。特にダイコンの出荷時期には大型トラックが通行するので、入山を控えるのが望ましい。

クモマベニヒカゲ低標高地の記録 高島 昭

筆者は1994年、北海道糠平～然別湖間の幌鹿峠(標高約850m)でクモマベニヒカゲを採集した。この付近での本種の記録はないと思われ、またかなり低標高での記録であるので報告しておく。

4-VIII-1994 1♂ 上土幌町幌鹿峠(alt. 850m)

北海道における本種の分布は、利尻島、大雪山系、ニセイカウシュベ山、平山、武利岳、石狩岳、ニペソツ山、三国峠、クマネシリ山、石北峠などが知られているが、幌鹿峠は最も近い既知産地であるニペソツ山から約15km離れている。北海道中央山地での垂直分布は、1,500～1,900mが中心で、三国峠、石北峠など900m前後の低標高地でも得られたことがあるが、これらの産地は他の産地との連続性があり、ベニヒカゲと混生していることが知られている。

採集地は幌鹿峠からナイタイ牧場方面へ続く林道沿いで、付近は林床にはチシマザサが繁茂したダケカンバの疎林である。他にコヒオドシ、エルタテハ等のタテハ類が多く見られたが、ベニヒカゲとの混生は認められなかった。

会費の納入について

1997年度の会費を同封の振替用紙を御利用の上、納入下さいますようお願いいたします。

1997年度会費 3,000円

郵便振替 01100-6-

姫路昆虫同好会 相坂耕作方

寄稿者一覧(五十音順)

相坂耕作(あいさかこうさく)
 稲田和久(いなだかずひさ)
 大貝英雄(おおがいひでお)
 岡本 清(おかもとときよし)
 奥谷禎一(おくたにていいち)
 相馬明直(そうまあきなお)
 大東康人(だいとうやすと)
 高島 昭(たかしまあきら)
 高橋寿郎(たかはしとしお)
 花岡 正(はなおかただし)
 広畑政巳(ひろはたまさみ)
 唐土洋一(もろこしよういち)

* * * 編 集 後 記 * * *

お待たせいたしました。やっと11号をお届けすることができました。発行が遅れ全く申し訳ありません。特に早くから原稿をお寄せ頂いた方には、大変ご迷惑をおかけしました。編集担当者としてお詫び申し上げます。特に今回は”てんとうむし”復刊号として多くの会員の皆様に玉稿をいただき心から感謝しております。10号を出したのは10年前の1987年。その間、”姫昆サロンニュース”や”遊蟲千年”で何とか情報交換や連絡網としてつないでまいりました。しかし、充分とはいえず会誌の発行は必要であるとの認識でした。しかし、世話人の怠慢も隠せません。ご容赦の程を。少しばかりの言い訳を許していただけるなら、世話をしていたメンバーが体調を崩したり、仕事を変わったり、また役職についたりする年代となり、極めて多忙となってきたからです。そのうえ年齢からか今いち体力も落ちてきているため、「昆虫」ばかりに頭が浮かべられなかったのも本当です。また、姫昆結成からの古い会員の方も精力的に頑張っておられる人もほとんどおられないのが現状です。10年一昔とか言いますが、休刊している間に環境庁や兵庫県からはレッドデータブックなどが発行され、時代に取り残されそうで全く最近では5年くらいでサイクルしているようです。この10年間のブランクを取り戻すように新生”てんとうむし”では原稿は県内に限るという了見の狭いことを考えず、県内外の会員が幅広く昆虫に関する研究の成果を発表できるよう考えています。いまや原稿不足は、各同好会誌の編集担当者の慢性的な悩みとなっております。他誌の中味をみると、投稿している会員さんは特定の方が大半を占めているようですが、何とか姫昆の”てんとうむし”は多くの会員さんの投稿により面目が保てたと思います。とくに11号からは2段組のワープロを高島氏にお願いし、一度ワープロ打ちをしていたものまで編集し直したり、ご苦勞をかけ本当に助かりました。

しかし姫昆を盛り上げて維持していくのは、会員一人ひとりの力だと編集者は思います。そして県内の昆虫相解明という目的を会員同志の親睦をはかりながら、地方の特殊性を生かした同好会として「昆虫」につき合っていきたいと思います。

いずれ編集者も仕事の関係や体力の関係から同好会活動から身を引く時期が来るかもしれません。それまでは何とか同好会を潰さないよう頑張りたいと思っております。ご協力の程をお願い申し上げます。

(K. A.)

てんとうむし 11号

発行 / 姫路昆虫同好会
発行日 / 1997. V. 20
編集者 / 相坂耕作・高島 昭
事務局 / 〒671-11
姫路市

相坂耕作方

TEL/FAX 0792-36-

てんとうむし 11 号 目 次

”てんとうむし”の復刊を祝う	奥谷禎一	1
明治以前日本で記録されたコガネムシ	高橋寿郎	2
兵庫県におけるウスバシロチョウの分布の変遷	広畑政巳	13
播磨地方の長翅目	大貝英雄	19
南国採集記	花岡 正	25
兵庫県相生市における蝶類の記録より	唐土洋一	29
西播磨地方におけるキリガ類の採集記録	稲田和久	37
高砂の蛾	岡本 清	40
高砂のハナアブ	岡本 清	46
九州の蝶・観察と知見(オオルリシジミとオオウラギンヒョウモン) 大東康人		47
僅か1日のタイ旅行	相坂耕作	55
アオアシナガハナムグリとジュウシチホシハナムグリの分布	高橋寿郎	58
姫路市広嶺山の蛾(1)	高島 昭	65
兵庫県における冬虫夏草		
付. コガネムシの冬虫夏草とコガネムシを食べるについて	高橋寿郎	70
ガロアムシの新産地と考察	市川憲平・相坂耕作	74
キチョウの異常個体一例	相坂耕作	76
絶滅商品 トンボ印のバリカン	相坂耕作	77
上海紀行その3	相坂耕作	79
イシガケチョウの記録	唐土洋一	81
兵庫県南西部のウマノスズクサとジャコウアゲハ	唐土洋一	82
兵庫県赤穂市の蝶補足	唐土洋一	83
ヒメアカタテハの食草について	唐土洋一	83
数種類の甲虫の記録	相馬明直	84
アサギマダラの記録	唐土洋一	84
インターネットを用いた昆虫採集入門	大貝英雄	85
兵庫県昆虫館所蔵の長翅目標本について	大貝英雄	86
カラスザンショウに産卵するキアゲハ	唐土洋一	86
兵庫県美方郡温泉町のギフチョウ	唐土洋一	87
クモマベニヒカゲ低標高地の記録	高島 昭	88
寄稿者一覧		88
編集後記		